
50代から始める基礎戦闘術

岡村 としあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

50代から始める基礎戦闘術

【Nコード】

N8093T

【作者名】

岡村 としあき

【あらすじ】

丸山田 誠一郎。52歳。突然のリストラ。嫁は外に男を作り帰って来ない。娘に完全にナメられ家に居場所がない。そんな彼の転職先は……

ヴァンパイアハンター。の見習い！？前職の経験が活かせるわけもなく

4段腹抱えて東奔西走、右往左往、焼肉定食。

メガネのフレーム折れても心は折れない。給与明細もらっその日までは。

はばたけ、丸山田 誠一郎

「丸山田君。君、明日からこなくていいから」

突然のリストラ、上司の渡辺はあっさりと言い放った。

良心の呵責^{かしやく さいな}に苛まれるでもなく、まるで食べ終えたコンビニ弁当をゴミ箱に捨てるように。

あっさりと。

この男。丸山田^{まるやまだ} 誠一郎^{せいいちろう}がコンビニ弁当ならば、廃棄処分前の油物でひしめき合う幕の内弁当……といったところか。

スキがなく、高級そうなスーツをバツチリと着こなし、野心に満ちた顔付きの渡辺とは対照的に、地味なスーツに身を包み、丸々と太っていて、ずれたメガネを着用している誠一郎の姿は、まさにリストラ候補者ナンバーワンだった。

渡辺がブラインドを上げると、午後4時の日差しが誠一郎の目にナイフの様に差し込み、一瞬目を細めた。額からは興奮したためか、大量の脂汗が溶けたアイスの様に零れだしている。

「何故、私なんですか!？」

営業部のオフィスの片隅で、誠一郎は哀^{あい}を叫んだ。

同期入社で国立大学を卒業した、エリート街道まっしぐらの渡辺と違い、誠一郎は高校卒業と同時にここ『立山物産』に入社した。

窓際社員を地で行く誠一郎であつたが、それでも33年間この会社
に尽くしてきたのだ。

愛する家族の為に、怒鳴られようと、取引先との接待で『あの
女口説いて来い』と言われ、口説いたら、怖いお兄さんに1分ポツ
キリでアバラを2、3本ポツキリ折られたりと、様々な苦勞に耐え
てきた……にも関わらず、裏切られた気分になつてしまう。

誠一郎が滝の様な汗を拭おうともせず、窓をじつと見つめていた
渡辺に詰め寄る。

地球温暖化に絶賛貢献中の誠一郎が、半径3メートル以内にいれ
ば気温が2、3度上がる。渡辺はそんな噂うわさをふと思ひ出す。噂など
気にもしない渡辺が、初めて噂の中にも真実はあるのだと、実感し
た瞬間である。

「何故なんです！？ 私のどこがいけないんです！」

つばのシャワーが渡辺を襲つた。せつかくのスーツがこれでは台
無しだ。同じ50代とは思えない、一切白髪まへの無い、渡辺のオール
バックに纏まとめられた黒髪にも、それがかかつていた。

渡辺は苛いら立つ自分を抑え、『ポジティブシンキングに行こう、こ
れは恵みの雨だ』と思うことにした。

「私に言われても困るよ、これは上の決定だからね」

恵みの雨をハンカチで拭い、脂ぎったシャワーヘッドに向かつて
冷たく言い放つ。

立派な4段腹を抱え、誠一郎がうずくまった。トドかセイウチか、もしくはカバのような鳴き声が聞こえてくる。

それを聞いた周りの社員が、何事か、と一斉に即席の擬似動物園に注目する。

いっそ、本当に動物園に転職したらどうかと、渡辺も勧めてみたくなった。

「家には……高校生の娘がいるんです。家のローンもまだ……。カミさんとはケンカして離婚寸前で……。そんな時にこんなビッグニュースは……。どうか、同期のよしみで……」

見かねた渡辺が誠一郎に掛けた言葉は慈愛に満ちた物だった。

「早く荷物をまとめて出て行きなさい」

はばたけ、丸山田 誠一郎（後書き）

よろしければ、ご感想をお寄せください。

カロリーは気にしない、丸山田 誠一郎

「何で帰ってきたの」

帰宅後、誠一郎が聞いた第一声は愛する娘、瑠奈るなのこの一言だった。

遺伝子の不思議を感じざるを得ない程、誠一郎と瑠奈は似ていない。

子供のころ冗談で『川から拾ってきた』と言えば、瑠奈は大喜びで『本当のパパに会いたい』などとはしゃいだ事がある。

妻の遺伝子を強く受け継いだために、高校1年生とは思えないくらい、大きく熟した果実を胸に抱き、細身でありながら身長は167cmと高い。業界関係者を名乗る男からスカウトの話が来たこともあるが、門前で追い返してやった。それほどにまで瑠奈は美しく成長してくれたのだが、誠一郎との親子関係は険悪であった。

「瑠奈、ママはまだ帰ってないのか？」

制服姿のままソファに寝転がり、肩まで伸びた長い髪を右手で弄びながら、瑠奈はファッション雑誌を夢中で読みふけている。

辛抱強く待ち続けていると、ようやくうつとうしそうな声で、瑠奈は返事をしてくれた。

「パート。残業じゃないの？」

時計を見ると、すでに午後9時をまわっている。こんな時間まで残業はおかしい、また男ができたのだろうか。

「それよりさあ、あたしお腹空いて死にそうなんですけど？ 早くご飯作ってよ」

瑠奈に言われ、誠一郎はスーパーの袋から半額シールの張られたパックを取り出した。

「ちよつと、まさかまたカレー？」

瑠奈がパックをブン取るとかわいらしい顔が恐ろしい顔になった。この時の顔は、本当に怒った時の母親の顔に、よく似ているのだ。

「パパのできる料理はコレしかないから……」

誠一郎唯一の得意料理がカレーである。

「カレーってすつごくカロリー高いんですけど。あたし、親父みたいになりたくないし」

誠一郎の腹部を見つめ吐き捨てるようにそう言つと、カップラーメンを手を取った。

「まだこっちの方がマシ」

掛ける言葉もなく、瑠奈が封を破る。さらに当てつけるかのよう
に、ポットを誠一郎の前に持ち出しお湯を注ぎ込んだ。

立ち上った湯気が誠一郎のメガネを曇くもらせる。

俺は何をやっているんだろう。会社でクビにされ、娘にナメられ、嫁は帰ってこない。

誠一郎はカップラーメンの匂いで一杯になったリビングを抜け出し、近所の公園に向かった。その大きな背中小さく丸まっており、とぼとぼと歩く様はより悲壮さが際立っていた。

飛べない豚はなんとやら、丸山田 誠一郎

公園にたどり着いた誠一郎は、のそのそとうつむき加減でブランコを目指した。

やがて目的地に辿りつくつと、ゆっくりとブランコに腰を下ろす。するとブランコが悲鳴にも似た音をたて、『乗るな』と猛抗議してくる。

それに構わず誠一郎はブランコをこぎだした。ブランコに揺られ星空を見上げる。

突然、世界の終わりの様な地響きが起こり、全身に衝撃が走った。

「壊しちゃったよ……あはは」

誠一郎の体重に耐え切れず、ブランコの鎖がはじけたのだった。センチな気分になる事も適わないらしい。しかたがなく、水でも飲もうと重い腰を上げた時だった。

砂場近くで、少女が数人の若い男に囲まれているのが目に入った。

ショートカットの黒髪に、白いＴシャツとデニムのショートパンツ姿のかわいらしい女の子が、4人の男に脅おどされているようだ。

整った顔立ちで、その大きな瞳には吸い寄せられる様な魅力があった。かなりの美少女……といっても、娘の瑠奈には敵わないが。年は10代前半……中学生くらいだろうか？

誠一郎は意を決すると、即座に回れ右をして、公園から脱出しようとする。自分の娘より幼い少女を見殺しにするのは後ろ髪を引かれるが、タコ殴りにされたくない。警察を呼ぼう。

震えた指でケイタイを操作するが、白く細い腕につかまれ激痛が走った。

「お前、最低だな。暴漢に襲われそうになってるか弱い娘を見殺しにするかフツ？」

恐ろしい握力で、か弱い娘が誠一郎の腕を持ち上げた。

それはさっきの少女だった。

少女の小バカにした様な口調と、外見のギャップに少し戸惑うが、悪戯っぽいやんちゃな笑顔は無邪気そのものであった。

少女の後ろに目をやると、先ほどの男達がぐったりと倒れ込んでいる。まさか、彼女がやったのだろうか？

誠一郎は、少女の肉食獣の様な瞳から目を放す事ができず、恐ろしくなって謝罪の言葉を口にした。

「うううううめぬはひゃい」

日本語に訳すと、『ごめんなさい』らしい。

中学生くらいの女の子に体重1?0Kgの自分が片手でやすやすと持ち上げられている光景に、誠一郎は思考が追いつかなかったのだ。

次の瞬間。

誠一郎は空を飛ぶ鳥になっていた。いや、それでは鳥に失礼か。空飛ぶ豚は放物線を描くように砂場へダイブする。

砂まみれの顔はウミガメが産卵する時のそれと同じであった。

「まだ生きていやがったか」

男なら吼えろ、丸山田 誠一郎

「あひゃあああん」

少女の冷たい声に、誠一郎は情けない声を出した。

砂を踏みしめる音がゆっくりと近づいてくる。やがて白くて細い足が目の前に現れ、誠一郎は覚悟した。

若くてカワイイ女の子に蹴^けられるなら、いいか。

違う覚悟を決めた誠一郎だったが、願いが叶う事はなかった。先ほどの男達が起き上がり、再び少女に迫ろうとしていたのだ。

頼りない公園の照明で男達の顔が照らされる。だが、いずれも顔に生気がなく、死んだ魚の様な目をしている。彼らは舌を出し、よだれを垂らしながら少女に一步一步近づいていく。何かの薬物でもやっているのか、とても正気とは思えない行動だった。

このままでは本当に少女が危ない。

「食べるなら私の方がうまいぞ！」

勇気を振り絞って、意味不明な挑発を力の限り叫んだ。振り絞るなら脂肪も一緒に振り絞りたいところだが。

挑発が効いたのだろうか、四人の男達は皆一斉にこちらに向かってくる。

「あ、やっぱり食べるならもうちょっと待ってくれないかなー。まだ旬の時期じゃないんで……」

春先はおせちや鍋やお雑煮などで、一番肥えている時期らしい。今は6月になったばかり、待てというほうが無理だろう。

旬を待ちきれず、男の一人が誠一郎の首筋に噛み付いた。

「ちょ、ちょっとやめてくださいよ！ 私にはカミさんと娘がいるんです。そんな趣味は……」

噛み付いていた男を引き剥がすと、ポイッと放り投げた。

「こいつらもうダメだからさ。話しかけてもムダだよ」

さっきの少女が隣に立っていた。

「え、ダメって？」

「おっさん、今から私がする事、誰にも言つなよ。言ったら殺すから、社会的に」

少女の迫力に押され、何も言葉が出てこなかった。

スマホに機種変換だ、丸山田 誠一郎

「ゴミ掃除だよな、コレ。ちゃんと給料出るのかね」

少女はそういつとカバンから拳銃を二丁取り出し。

——撃った。

爆竹のような音が鳴り響き、男の一人がうめき声を上げて倒れる。

映画の撮影か何かだったのか？

だが、目の前の男達はいずれもカメラ映りするような顔ではなく、服装も作業服やら、学生服やら、ジャージなど地味でバラバラだった。

残りの二人の男が同時に少女に襲い掛かる。

危ないと思った瞬間、男達の肩を踏み台にし、3メートルくらいジャンプして、滑り台の上に着地した。

ワイヤーアクションというヤツだろうか？

間抜けな顔で夜空にワイヤーを探す誠一郎をよそに、二発の銃弾が誠一郎の顔面をかすれ、男達に命中した。

苦悶くもんの表情を浮べどさりと倒れる。まさか、死んだのだろうか？

「救急車……えっと……警察？」

震えた指でケイタイを操作するが、白く細い腕につかまれ激痛が走った。

「余計な事するんじゃないよ」

少女がまたまた恐ろしい握力で腕を掴んだ。誠一郎の手からケイタイを奪い取り、踏みつける。

「あ……ああ……なんて事を……」

せっかく仲良くなったキャバ嬢（新人のハルヒちゃん21歳）の電話番号が……。ちよつとエッチなメールマガジン（購読無料）が……。白く細い足の下敷きになり……消えた。

誠一郎は、我が半身を失ったかのような喪失感に包まれた。

「あ、そついやおっさん。噛まれてたっけ？ 面倒な事してくれたな」

げんなりした顔で少女は誠一郎を片手で突き飛ばし、トランポリンの様なお腹に飛び乗った。

「痛い、何をするんだ！」

起き上がろうとする誠一郎の額に銃口を押し付け、脅す。

「ヴァンパイアに噛まれたら人間捨てるか、ヴァンパイアになる前に死ぬかどつちかしかないんだぜ？」

夜のスナイパー、丸山田 誠一郎

「あ、あんた何者なんだ!？」

「私? 元人間。現在バケモノ。ヴァンパイアハンターだ」

「ヴァンパイアハンター?」

アニメの見すぎなのだろうか?

ちゅうに病と言う単語をふと思い出した。

「そ、ヴァンパイアハンター。かつこいいだろ?」

「冗談のつもりなのだろうか? だが、少女の真剣な顔を見れば、それが冗談でない事は一目瞭然いちもくりようぜんであった。

「あ、ごめ。そついやもう一個道があつたつけ。あんまこれはおススメじゃないんだけど、ヴァンパイアハンターになるっていう道もあるんだわ、けっこもうう儲かるよ?」

——儲かる。その言葉に誠一郎は心を動かされた。こんな小さな少女にもできるのだ……ならば自分にだって……。

正直、この不況で何の資格もなく、パソコンも使えない50代の自分が、再就職できる自信なんてなかった。愛する家族を守るためなら、何でもいい。わらにもすすがる思いで誠一郎は叫ぶ。

「どうやったらなれるんだ? 私もヴァンパイアハンターになりた

い！」

52歳の男が夜の公園で少女に馬乗りになれ、さわやかでない汗を垂らしながらこのセリフを吐いたのだった。

「ふうん。ま、いいか。んじゃあ、テストだ。あれ、片付けてきな。コレ使っていいから」

立ち上がると、先ほどポイッと投げ捨てた男がこちらに向かってくるではないか。

拳銃を一丁誠一郎に押し付け、少女は鉄棒にまたがり事の成り行きを見守る。

「あの程度倒せないようなら、あきらめな。そいつとまとめてやってやるから」

と言つて、クルッと鉄棒で一回転して見せた。

誠一郎は静かに目を閉じた。ずしりと重たい鉄の塊が手のひらに収まっている。こんな物、一度も使ったことがない。だが、ひよんな事から巡ってきたチャンスだ、この手につかんでみせる。

誠一郎は目を見開き……引き金を引いた。反動で巨体が反り返り、不細工に尻餅をつく。

——何かが弾ける音が聞こえた。

発射された弾が命中したのだ。

「おっさん、あんたいいウデしてんよ」

少女は鉄棒の上に立ってほんとほと感心したようだった。

「何で私にタマが飛んでくるんだよ、私を殺す気か？」

ブレスケアだ、丸山田 誠一郎

少女の怒りは、ごもつともだった。だが、狙おうと思って狙ったわけではない。本当に偶然、手が震えて……。

「どうやったら、そんなに器用に狙いを外せるんだ」

外しようがないくらい、的となる男のヴァンパイアが一直線に向かってきているのに、弾は少女の右手に申し訳なさそうに収まっていた。

「あ……ははは、失敗失敗。今度こそ狙——」

謝罪の弁を述べる前に、ヴァンパイアの男に腹をつかまれ、お人形さんを抱きかかえるが如く持ち上げられる。いや、豚のぬいぐるみを持ち上げると言ったほうが、解りやすいだろう。

「く……苦しい。たずけてぶぼひい」

日本語に訳すと『助けてください』と豚のぬいぐるみが言った。

腹を刺激されたせいか胃から空気がこみ上げ……。

「げっぷ」

よほど臭かったのだろう、ヴァンパイアの男は地面をのた打ち回っている。

そういえば、今日の4食目にギョウザ定食を食べたのだった。—

日7食の内、4食目に食べたギョウザ定食と、6食目のペペロンチーノが誠一郎に力を貸してくれたのだ。

勝機が見えた。ヴァンパイアはニンニクに弱いというのは本当らしい。ならば……零距离で発射する！

誠一郎はヴァンパイアに近寄りふくと息を吹きかけた。

ヴァンパイアはさらに激しく苦しみ始める。

もつとも、ギョウザやペペロンチーノを食べていなくとも、効果はありそうだが。

「これは予想外。そんな戦い方もあるもんだな」

ない。

このまま全力で息を吹きかけてやる！ と思つたのも束の間、ヴァンパイアは起き上がり、誠一郎を突き飛ばした。少女の隣の鉄棒に豚の丸焼きが如く収まる。

顔面から突っ込んだせいか、メガネにひびが入ってしまったようだ。だが幸いな事に顔以外の箇所は、誠一郎を包む脂肪の鎧がダメージを最小限に抑えた。豚の丸焼き状態から抜け出すと、再び銃を構えなおす。

ひび割れたメガネのレンズの向こうを見据え、狙いをつける。今度こそあいつをしとめてやる。さっきまでの頼りない顔が、野生のイノシシの様に猛々しかった。

一発の弾丸がヴァンパイアを貫いた。

「え、まだ撃ってないのに……？」

撃ったのは誠一郎ではない。

——少女であつた。

「おっさん。あんた私が今まで出会った中でサイコーだよ。サイコーにドヘタ。ってわけでテストは不合格」

良薬苦し、丸山田 誠一郎

不合格……その3文字が誠一郎の頭を貫いた。

さつきまでのイノシシの様な猛々しさはすでに無く、叱しかられた子こ犬ぶたの様に意気消沈した。

「でもまあ面白いからいいか。正式なヴァンパイアハンターはダメだけど。見習いってことで使ってやるよ」

面白い……その3文字が誠一郎の頭の中をうずまいた。

正直、誠一郎は冗談の一つも言えないまったく面白みのない人間であった。飲み会で上司に『何か面白い事をやれ』と言われ、上半身を脱いだら、それを偶然目撃した居酒屋のアルバイトの女の子に『キャア!』と叫ばれ、逃げ出された。結果的にそれが上司にウケたわけだが。

そんな自分が初めて面白いと言われ、不思議な気持ちになる。ともあれ、ヴァンパイアハンターになる事ができるのだ。ここは素直に喜ぼう……見習いだが。

「あ、あのう。給料はいくらくらい出るんですか?」

一番かんじんな事を聞かずに、なりたいたどよく言えたものだ。自分のマヌケさ加減に、少しあきれてしまう。

「出来高制だからねえ。そのザコども全部でコレくらいは出る」

そう言つて少女はピンと人差し指を立てた。

「え、100万円？」

「アホ、10万だ」

腕利きのヴァンパイアハンターになれば、いくらもらえるのだろう。

「んじゃあ、ヴァンパイアハンター協会に行きますか。詳しい話はそこでしてやるよ。おっと、その前に」

少女は急に真剣な面持ちになり、誠一郎を見つめた。

「ヴァンパイアハンターになれば、超人的な身体能力と、年を取らない体が手に入る。それはいずれ、お前を苦しめる事になるかもしれない……それでもいいんだな？」

ここで首を横に振ったところで、この少女に消されるのだ。ならば、すでに答えは出ている。

誠一郎は首を縦に振った。

少女はそれを確認すると、懷から錠剤を取り出し誠一郎に放り投げた。

「それを飲みな。体内に入ったヴァンパイアの唾液を中和してくれる薬だ。ただし、完全にヴァンパイア化が止まるわけじゃないけどな」

誠一郎は言われるまま錠剤を大きな口に放り投げた。口の中いっぱいには苦味が広がる。

「苦い……これ、糖衣タイプのヤツとかないの？」

ラッパのマークのあれより数倍苦いんじゃないか？ 口直しにコンビニでスイーツでも買いたいたいところだった。

「良薬は口に苦いんだよ、ガマンしろ。おっさんなんだから。飲まなきゃヴァンパイアになって、私に始末されるだけだ。飲めばおめでとう。晴れてあんたもバケモノの仲間入りさ」

始末されるより、蹴られるならいいかなと、問題をすり替えて懸命に飲み込んだ。

苦味は口に残ったままだが体はなんともないようだ。

「さて、こいつらほつといたらまた復活しちまう。その前にちゃんと止め刺しておかないとな」

こいつら、とは先ほど倒した4人のヴァンパイアである。

少女は拳銃が入っていたカバンからペットボトルを取り出し、ヴァンパイア達の顔にしゅつとかけた。すると不思議なことにヴァンパイアはたちまち灰になり……消えた。

ペットボトルのラベルには『おいしいお茶』と表記されている。ヴァンパイアはお茶に弱いのだろうか？

「これでいいだろ。あー、ちなみに聖水はヴァンパイアを弱らせて

からでないと効果ないからな」

ペットボトルの中身は聖水らしい。ヴァンパイアを退治するには肉体にある程度ダメージを与え、最後に聖水で止めを刺す。というのがセオリーのようだ。

「さーで、そんじゃ協会の事務所に行きますか。ちゃんと着いて来いよ、おっさん」

「あの……あなたの名前は？」

誠一郎の問いかけに少女は面倒くさそうに答えた。

「たなか 田中 とめこ 留子だ」

少年の期待を裏切るな、丸山田 誠一郎

「この建物の中だ」

ヴァンパイアハンター協会の事務所というものだから、教会の地下だとか墓地の近くとかにあるのかと思えば、意外な場所に案内された。

「留子ちゃん、本当にここなのかい？」

誠一郎の前には全国展開しているスーパーマーケット、『スーパーフジタニ』がそびえ立っていた。24時間営業なので午後10時を回った今でも営業している。

「田中さん、もしくは師匠と呼べ。下の名前で呼ぶな」

留子の破壊力のありそうな目力を前に、誠一郎は即座に首を縦に振った。

スーパーフジタニは、今日の晩飯のカレーの材料を買ったスーパーで、誠一郎がいつもお世話になっているスーパーだ。

一瞬、親子で買い物かと思間違うが、どうしても不遜な態度で闊歩する留子の後ろにでかいナリを潜め、とぼとぼと歩く誠一郎と留子のカップルは、犬の散歩中の飼い主とペットと言ったほうがしっくり来る。

「ここで少し待っている」

そう言つて留子は『従業員以外立ち入り禁止』の扉の奥へ消えていった。

5、6分くらいだろうか。肉売り場でトンカツ用豚肉を指を加えて見ている誠一郎に、若い女が話しかけてきた。

「丸山田 誠一郎さん、ですか？」

ぱつと見では大学生くらい。ハタチそこそこ。スーパーフジタニの女子制服を着用している所を見ると、この店の従業員だろうか？

肩まで伸びた金色の髪と、品のいい化粧。

制服のラインをなぞる様に、誠一郎は女性の全身をなめるように見渡した。一言で言つと、『出るトコ出てる』だ。

天使の様な笑顔（営業スマイル）を浮かべ、誠一郎の奇行を寛大に見守ってくれている辺り、本当に翼とか生えているのかもしれない。

ネームプレートには『藤内 彩華』と書かれていた。

「は、はい？ 何でしょう？」

万引きGメンに見つかった不審な客の様に、誠一郎はかわいらしくない目をパチクリさせ、上ずった声で答えた。

「私、田中の部下の藤内と申します。手続きの準備が整いましたので、中にお入りください」

笑顔と共に一礼。それにつられて誠一郎も頭を下げると、目線の先には藤内の豊満な胸があった。制服の上からでもそのボリュームは確かなものだとわかる。

藤内がドアを開け案内する。美女が通った跡はいい匂いがした。やがて店長室の前で立ち止まりドアをノックする。

「失礼します」

藤内に促され、室内へと足を踏み入れる。

「ちよつとちよつとちよつと！ これ、おっさんじゃん！？ トメちゃん、さっき新人はかわいいナイスバディちゃんって言ったよね！」

いきなり高校生くらいの少年が、かわいいナイスバディちゃん 誠一郎を指差し喚わめいた。

見れば、瑠奈と同じ高校の制服を着ている。この店のアルバイトだろうか？

茶色に染めた長めの髪と、アイドルの様な顔立ちは美少年と言って差し支えないが、軽薄そうな言動が少し鼻につく。

「かわいいじゃないか。メガネ＋爆乳＋ヒゲだぞ。せっかくできた後輩なんだし、文字通りに『かわいがってやれ』よ」

留子は机の上に足を乗せ、ふんぞり返っていた。

少年のほうはまだ納得がいかない様子だ。

「丸山田さん、こちらにおかけください」

ソファが誠一郎の下敷きになるのを確認して留子が口を開いた。

「さて、そんじゃ説明してやるか。私たちヴァンパイアハンターの事を」

空気を読める男、丸山田 誠一郎

要約すると、こうだ。ヴァンパイアには親となる存在がいて、その親が血を吸うと吸われた人間は子となる。その子がまた親となり、延々とそれが繰り返されていく。らしい。

そしてヴァンパイアにはランクというものがあり、それはヴァンパイアとしての能力の高さであり、年齢によって分類される。

10歳以上のヴァンパイアはE。20歳以上がD。30歳以上がC。40歳以上でB。そして……50年をすぎるとAランク。

その戦闘力は凄まじく、協会の支部を一人で壊滅させたらしい。

留子が少し悲しげに天井を見上げる。

ちなみに先ほど公園で戦ったヴァンパイア達はノーランク……生まれたての赤ん坊というわけだ。だがそれ以上に驚いたのは。

「113歳!？」

「そぞ。トメちゃんぱつと見、ロリキャラ全開なんだけど、中身は明治生まれのお婆ちゃんなのよね」

少年が留子を指差しキヤハハと下品に笑った。

同時に銃弾が突っ立ったままの少年の股間に向かって放たれる。ズボンに穴が開き、すぐに少年はおとなしくなった。急所への直撃は免れたらしい。

「春川。お前『け わい』だな。女性の年齢を聞いてゲラゲラ笑うんじゃない。次笑ったら優子にするぞ」

少年は春川というらしい。下の名前はゆうや……ゆうきだろうか？

春川は穴の空いた自分のズボンを見てまた笑い出した。

「ちょっとちょっと！ これはこれでセクシーじゃね？
アヤちゃん見てよコ」

ズボンの穴を藤内に見せ付けるように下半身をくねらせた。

「藤内、そのヘンタイを表に放り出しておけ。うるさくてかなわん」

一礼すると藤内はヘンタイの首根っこをつかみ、ドアの外へ消えた。

「話を元に戻すと、だ。ヴァンパイアハンターはヴァンパイアと人間の狭間にある存在だ。人でありながら人ではない。ヴァンパイアでありながらヴァンパイアでない。どちらにも属さない。私たちはただのバケモノさ」

ヴァンパイアハンター協会日本支部長 田中 留子。日本最古のヴァンパイアハンターにして、世界最強のヴァンパイアハンター。Aランクヴァンパイアとの交戦経験を持つ唯一のハンター。

やがて誠一郎が彼女を超えるヴァンパイアハンターになる時が……

——来るのだろうか？

今回は出番がないよ、丸山田 誠一郎

二人きりの時間が始まった。

しかし、彼女は口を固く閉ざし、何もしゃべろうとしない。

当然だろう。自分が怒らせてしまったのだから。

未だ凶悪な腕力で自分の首根っこをつかむ藤内の顔は、無表情のままだった。

春川 はるか 優人 ゆうと が彼女と知り合ったのは1年前の事。予備校の帰りにコンビニで漫画雑誌の立ち読みをしていた時だ。

ガラス越しに美人のお姉さんが目の前を通り過ぎるのが見えた。即座にコンビニを飛び出し、お姉さんの残り香を頼りに追跡を始めた。

「ちよつとちよつとちよつと！」

春川が彼女を見つけるのに、そう時間がかからなかった。路地裏で彼女を捕まえると早速口説き始める。

（バリバリのキャリアウーマンって感じ？ ポイント高えぜ！）

相手は20代後半のOL風だった。

月明かりが照らす路地裏で、女性は妖 あや しく笑う。

「おいしそうな子、フフ。ここでつまみ食いしちゃおうかな」

（あつさりOKが来た。さすが俺！ しかもノリノリと来た。さうて、今日もトバシちゃいますかね）

女性の方から春川に抱きついてくる。

甘い匂いと柔らかい感触。生暖かい吐息が春川の耳にかかり、春川の意識はすでにその先へ進もうとしていた。だがその余韻よゐんに浸る間もなく、首筋に痛みが走った。

「ちよつとちよつとちよつと！ 刺激的すぎよお姉さん、痛いって！」

痛みに耐え切れず女性を突き飛ばす。

「ご馳走様、おいしかったわボウヤ」

唇が赤く濡れているのはルージユのせいではない。舌なめずりをする^と牙にも似た凶悪な犬歯が姿をあらわす。

「ちよつとちよつとちよつと！ 俺の守備範囲がいくら広いからってバケモノはノーサンキューっすよ！」

逃げようとするが全身がマヒして動けない。

「ママに対してひどい口ぶりね。お仕置きが必要かしら」

「お仕置きはあなたに必要ですね」

突然、ママの体を銀色の光が切り裂いた。

スーパーフジタニの制服を身に纏^{まと}い金色の髪をなびかせ彼女は姿をあらわす……右手に銀色の剣を持って。剣を握る彼女は勝利の女神か戦乙女か……。

「ヴァンパイアハンターです。お掃除に参りました」

ニコツと笑顔で一礼。完璧すぎる営業スマイルに春川はノックダウンした。未だかつてこんなスタイルの良い美人に出会った事が無い。目の前の噛み付き女の100倍はポイントが高いだろう。

「ヴァンパイアハンター!？」

「Eランクのお客様ですね……よかった。楽なお仕事で」

携帯の画面を確認した藤内は笑顔を崩さず、剣を構えなおす。

女ヴァンパイアはその立ち居振る舞いを見て、圧倒的な實力差を直感したのか、一歩後ずさりする。

「もっともつと血が要る……かわいいボウヤ、あなたの血を全部……ママにちょうだい」

春川に覆いかぶさろうとする女ヴァンパイアだったが、彼女がころうじて目の端に捉^{とら}えることができたのは、『藤内 彩華』と書かれたネームプレートと、笑顔の消えた藤内の瞳だけだった。

月光に照らされる中、藤内の手が春川に差し出される。その光景は、春川の目と心を奪うのに十分なものだった。

——それから1年。

春川はヴァンパイアハンターになった。理由はもちろん、藤内だ。

「あのおっさん……フツーじゃねえよな」

店の搬入口で缶コーヒーに一口つけた春川がつぶやいた。

「春川くんも気付きましたか？」

藤内は紅茶のペットボトルの口を閉め、ふと星空を見上げる。

「田中さんもあれで見る目はありますから。今後の経験しだいではかなり伸びるかもしれませんね」

通常、ヴァンパイアの唾液が体に進入すると全身にマヒがかかり動けなくなる。例え中和薬を服用したとしても、丸3日はベッドの上だ。それが、元気にどうどうと歩いているなんて……。

丸山田 誠一郎。

ただのメタボ親父ではなさそうだ。

門限は0時まで、丸山田 誠一郎

「明日からお前にはここで働いてもらう」

留子に突然そう言われ、誠一郎はボンレスハムのような首を傾^{かし}げるしかなかった。聞けば、このスーパーフジタニはヴァンパイアハンター協会の傘下にある企業で、他にも有名な大手企業のトップにも、協会の幹部が就任しているらしい。

ヴァンパイアの存在を一般人に秘匿^{ひとく}する為、今まで徹底した情報規制が敷かれていた事を考えれば、その影響力と政界への発言力は計り知れない。

「考えてもみる。『お父さん明日からヴァンパイアハンターになるね』、なんて言ったらお前の家族はどんな顔をする？ 『なにこのオヤジ、キモイ』 『あなた、早く病院に行ってきて、ご近所の恥だわ』。みたいな反応しか示さんだろ？」

留子の微妙なモノマネにどう反応したらいいのか解らず、誠一郎はとりあえず、こくこくと壊れたおもちゃの様に首を動かした。

「そこでだ、表向きはスーパーフジタニの社員としてここに勤務する形にする。昼間は研修だ。面倒は私が見る。ただ、夜は春川と組んで実戦に入ってもらうがな」

ヴァンパイアは夜にしか力を発揮できない。だがそれは同時に、ヴァンパイアと同じ変異の流れを汲^くむ、ヴァンパイアハンターも同様に昼間はただの人間なのだ。

だから戦闘が発生するのは夜間のみで、昼間は春川は学校に、藤内はスーパーフジタ二のレジ係りとして行動している。

「入社の手続き等は全て藤内がやってくれる。お前は明日からの研修に備えて今日は早く家に帰って休め。いっぺんに全部説明しても混乱するだけしな。研修を通じて理解していけばいいさ」

ふと時計を見ると、時刻は午後１１時をまわっていた。

「いつの間にこんな時間に……早く帰らないと門限がやばい！」

丸山田家では、日付が変わると入り口は完全に施錠され、翌朝までホームレス気分を満喫できる恐ろしい罰があった（誠一郎限定だけが）。

二階から忍び込もうとして、何度か不審者に間違われ、警察のこ厄介になったことも多々あるのだ。

「それなら早く準備しろ、帰るぞ」

留子に急かされ、誠一郎は店舗前の駐車場まで駆け足で移動した。途中、搬入口ですれ違った藤内と春川に挨拶をし家路につく。

「よかった、なんとか間に合いそうだ……」

ホツと安堵のため息をつく、隣に並んで歩いていた留子が口を開いた。

「お前の家、このあたりなのか。なかなかいい所に住んでるじゃない

いか」

「あれ、師匠の家もこのあたりなんですか？」

偶然の出来事に誠一郎は戸惑った、できればあんまり私生活に関わらないで欲しい。

「ああ、違う違う。当分お前と一緒に暮らしてやる、弟子の面倒はちゃんと見てやらないとな」

0 時だヨ全員集合、丸山田 誠一郎

「ただいまあ……」

数時間ぶりに帰宅した我が家は深夜にもかかわらず、照明がこうこうと輝き昼間のそれと変わりがなかった。

「誰かいないのか？」

リビングからはテレビの賑やかな音が漏れ出ている。

「うつさいな、今いいとこなんだから静かにしてよね。あたしの邪魔すんなっての、何様よ」

——お父様だ！

などと怒鳴ろうものなら、瑠奈はおそらく一週間は口を聞いてくれないだろう。

ドアの隙間から迷惑そうに瑠奈が顔を半分出した。

「こんばんはっ」

誠一郎の巨体の影からひょこつと留子が姿を現す。

「あれ、誰その子？　ちよ、まさかオヤジ、エンコー？　キモ……」

瑠奈は留子と誠一郎の関係を一番最悪な形で想像したようだ。

「違つんだ瑠奈……この子は……そう、パパの上司のお嬢さんなんだ。当分預かることになったから、仲良くしてやってくれないか？」

留子は瑠奈の前に出て、愛くるしい笑顔で自己紹介する。

「高城^{たかしろ} ららです、よろしくね。瑠奈お姉ちゃんっ」

留子の潤んだ瞳は、母親を求める仔猫の様に儂く、^{はかな}瑠奈の母性本能をくすぐった。およそ数時間前に見せたヴァンパイアハンターの顔は、そこにはない。外見通りの幼い少女の姿であった。

留子のアプローチは瑠奈のハートにクリティカルヒットだったようで、瑠奈は留子をぎゅっと抱きしめた。

「ららちゃんっていうんだ。かわいい！私一人っ子だったから妹が欲しかったんだよね……仲良くしようね。お姉ちゃんと一緒にテレビ見よ！」

そう言つて16歳のお姉ちゃんが113歳の妹を抱きかかえてリビングに消えた。

高城 ららは誠一郎が留子に言われ即興^{そつぎよう}で作り上げた偽名である。

『今風でかわいらしい名前を考える』

それが留子から下されたファーストミッションだった。

——どうも本名が嫌いらしい。

ちなみに、この名前は誠一郎が、大×3好きなエッチなビデオに

出演している、お気に入り女優さんの苗字と名前をつなげたものだ。

留子がそれを知ったらどうなるだろうか……おそらくタダではすむまい。

「あなた、帰ってたの？」

妻の美雪^{みゆき}がバスローブ姿で脱衣所から出てきたところだった。体からは石鹸^{せっけん}のいい匂いと湯気がもわもわと立ち上がっている。

30代後半とは思えないほどの引き締^しまった体。美しくも、幼さを残した女優の様な顔立ち。濡れた長い髪、上気した頬^{ほほ}、みずみずしい太腿^{ふともも}……。およそ男を引き付ける全ての魅力が、バスローブの中にあった。

街を歩けば、男に声を掛けられるのは日常茶飯事で、女子大生と間違われしばしばちょっかいをかけられている。

その度に誠一郎がワンワンと声を張り上げ、番犬の様に吼えるのだが、タヌキの置物と間違われるのが関の山で、番犬の効果など無い。誠一郎にはおよそ不釣り合いなこの美人妻との馴れ初めは、またの機会にしておこう。

誠一郎は生唾をゴクリと飲み干し、よこしまな考えを捨て意を決し口を開いた。

「……大事な話があるんだ。瑠奈と一緒に私の書斎に来てくれないか？」

娘に甘い、丸山田 誠一郎

「実はパパ、スーパーフジタニの社長に、ヘッドハンティングされただ」

書斎に妻と娘を呼び出し、誠一郎が事のあらましの説明を始めた。

まんま、『会社クビになったから、明日からヴァンパイアハンターになるね』とは言えず、『スーパーフジタニの社長に優秀な人材だから』という理由で引き抜きにあった、という嘘をつく事にしたのだ。無論これは留子の入知恵なのだが。

「へっどはなんていんぐ？」

母と娘は同時に首を傾げた。普段から仲の良い姉妹と間違われる二人らしく、見事に動きがシンクロする。

「オヤジ、そのスーパーの社長に頭……撃たれたの？」

「日本も物騒になったのね……」

二人の頭の中には、誠一郎が野生のイノシシと間違えられ、山中でスーパーフジタニの社長にライフルで頭部を狙撃されたという、間違ったイメージが湧き出ていた。実際にありそうな話ではあるが……。

「いや、パパが仕事でたまたま、スーパーフジタニの社長とお会いする機会があつてね、それが縁で『優秀な人材』だからって事で、引き抜きにあつただよ」

二人は同時に『あゝ、なるほどなるほど』という風にガッテンしてくれた。

「でも、オヤジが『優秀な人材』ねえ……それ別の丸山さんじゃないの？　もしかして、そっちがあたしの本当のパパだったりして！」

まだ、瑠奈にとって誠一郎は未だ『橋の下で拾ってくれた育ての親』らしい。

「でも、お給料は大丈夫なの？　それにそんなうまい話が本当にあるのかしら？」

——そう来ると思った。

「大丈夫だよ。すでにパパは重役の方々にも信頼されているからね。海外出張になった、ららちゃんのお父さんはフジタ二の専務さんなんだ。給料も今の倍出るって言うから大丈夫だよ」

留子が色々と作戦を練ってくれたので助かる。

50を過ぎた男が、大企業フジタ二にヘッドハンティングされるなんて、『優秀な人材』でもなければ夢のような話だ。夢を信用させるだけの材料が必要になる……それが架空の専務の娘『高城 くら』というわけだ。

「ずっと黙ってたんだけど、二人を驚かせたくてね。明日から早速、近くの店舗で研修を受けることになった。ママ、お弁当頼むよ、大盛りでね」

「わかったわ。特盛りで用意しておくわね」

ケンカ中であつた事も忘れ、美雪は上機嫌で1階の台所へ向かつた。

やはり給料が倍になるという魔法の言葉が効いたようだ。……明日から頑張らなければ！ 誠一郎は決意を新たに奮起した。

「ねー『パパ』」

瑠奈が猫なで声で、熟練のアサシンの様に誠一郎の背後に忍び寄り、誠一郎の首を音も無く切り落とす——わけではなく、優しい手つきで肩に手をかけた。

「あたし、新しい参考書買いたいんだけど、もうお小遣い無いんだあ」

ゆつくりと、しかし確実に、誠一郎の肩を揉み解す。

瑠奈にはマッサージの才能があるのではないか——。久しぶりに感じた娘からの愛情に、パパもう涙目だった。愛情への対価を渡すと、瑠奈はさつさと隣の自分の部屋に引ッ込んでしまう。

『ららちやーん、一緒にお風呂はいろいろか！』

瑠奈の部屋で留子は隣室の様子をうかがいつつ、韓流ドラマのDVDを鑑賞していた。ハンカチを口にくわえ、なんとか感情を押さえ込もうと必至になっているが、溢れ出る涙あふを止めることはできず、カーペットにいくらか濡れた跡があつた。

一人わんわん泣く留子を瑠奈が発見し、よしよしと瑠奈は姉の様にあやしている。二人は姉妹のようにすっかり仲良しになったようだ。どちらが姉であるのかは置いておくとして……。

娘はお年頃、丸山田 誠一郎

——私には時間がない。急がなければならない。だが時間は待つてはくれない、やらなければいけない事は山積みだ。

時が止まった自分の体を見る度、留子は99年前の事を思い出す。湯船の中、洗髪中だった瑠奈の鼻歌をBGMにして目を閉じ、記憶を掘り起こした。

全てが始まったあの日、留子は全てを失った。兄も姉も、大きな屋敷も大好きだった父も……。代わりに得た物は、年を取らない不便な体と一丁の銃のみ。

元人間現在バケモノは、99年経った今でも現在進行中だ。

留子の歩んだ道は、ヴァンパイアハンターの歴史そのものと言っている。全てのヴァンパイアの^{せんめつ}殲滅——。

だが、それを成す為には時間がない。ヴァンパイアハンターは不死ではないからだ。

100年のタイムリミット。

留子は残りの1年で全てが片付けられるとは、思っていない。だから、後進の育成と組織の強化を主軸に行動を起こした。いつ自分がいなくなっても大丈夫なように……。

「ららちゃん、もしかしてお湯熱すぎた？」

瑠奈が泡立った長い髪を手に持ち、湯船に近寄った。よほど深刻な顔をしていたのだろう、留子はそれに気付くと、満開の笑顔を咲かせた。

「大丈夫だよ。それよりお姉ちゃん、何かいい事あったの？」

——お姉ちゃん……懐かしい響きだった。

「うん、実はね……今度の日曜……彼氏と初デートなんだあ……。資金もさつき手に入ったい、もう楽しみで楽しみで」

「どんな人なの？」

今時の若者事情を知るチャンス到来だ。何より、留子の野次馬根性が大きく働いた。

「学校の先輩でね、三年生なの……もう、ちょーかつこいいの！勉強もできるしスポーツも万能で……おまけに冗談が面白くて……」

一体どんなチート野郎なのだ。

「なんか、スーパーでバイトもやってるらしくって、家に生活費出して好青年なんだよ！すっごいよね」

それは一度会ってみたいもんだ。

「その人、名前なんて言うの？」

「春川 優人っていうの、かつこいい名前でしょ？」

食い物の恨みは怖い、丸山田 誠一郎

時が止まった……ハルカワユウト？　だが、同姓同名ということもある……留子はもう一度確認してみた。

「もしかして、ちょっとちょっと！　って言う口癖の人？」

『ちよつとちよつとちよつと！』は、春川が興奮したときに出る口癖だ。やかましいので、やめろと言っているが、本人はなかなか直そうとしない。

「そうそう、先輩の第一声がそれだったんだ！。廊下ですれ違った時に、後ろから声かけられてね。振り向いたら、我が校ナンバーワンのイケメン様だったわけ！」

留子は今日の日付を思い出した。先ほど午前0時を回ったところなので、今日は6月7日火曜日。4月1日ではない。

春川はあれでいて、外ヅラはかなりいいらしい。だがそれにしても、詐欺の様な話だ。付き合ってまだ間もないのなら、クーリングオフで丁重に返品したほうがいい。箱を開けてみれば単なるバカなのだから。

「あれ、ららちゃん春川先輩の事、知ってるの？」

「え、うん！　私の中学でもちょー有名なんだよ！　カツコよくて、優しい高校生のお兄さんの噂うわさ」

もちろん、そんな噂などないのだが、怪しまれない様に適当なウ

ソを付いておく。

春川のメッキが剥がれるのは時間の問題だろうが……面白いからこのまま当人には黙っておこう。

誠一郎本人の耳にも入れない方がいい。やはり、その方が面白いからだ。

「デート頑張つてね！ 私も応援してるよ！」

「うん、ありがとう。私先にあがるね、冷蔵庫にプリンあるから、後で一緒に食べようね」

これは今度の日曜日が楽しみだ。

湯船の中で一人ククと笑うと、留子はまた目を閉じつぶやいた。

——長くて楽しい最後の一年になる、と。

その後、お風呂を上がった留子が目にしたのは、テーブルの上で空になった二つのプリンの容器を突っ伏して、満足げに見つめる誠一郎の姿であった。

すれ違いざまに腹に一撃蹴りを入れて、二階に上がる。サンドバッグよりも叩きがいのある感触が足に残り、誠一郎がどさりと崩れ落ちる音が階下より聞こえた。

留子は基本的に辛党なのだが、プリンだけは別で、大のプリン好きであった。本人曰く『プリンの為なら死ねる』らしい。

そんな留子から、知らなかったとはいえプリンを奪った誠一郎へ

の怒りは、相当なものなのだろう。食い物の恨みは怖い。

支部で備品申請したサンドバッグを、明日申請取消しておこう。代わりにいいモノが見つかった。ベッドに潜り込み、また留子は一
人ククと笑った。

翌朝。

スーツ姿の誠一郎と制服姿の瑠奈、そしてセーラー服姿の留子が
玄関を出た。

中学二年生という設定で、丸山田家に同居する事になったので、
朝出勤するときは制服を着用して出て行く事にした。偽装のため、
近所の中学の制服を準備しておいたのだ。

瑠奈はブンブンと、名残惜しそうに手を振って、駅前の方に
歩いて行った。

「覚悟はできたか？ 今日からお前は地獄を見る事になる」

瑠奈の姿が見えなくなるのを確認すると、そのままの視線で誠一
郎に言った。

「家族の為ならなんだってできますよ。ヴァンパイアハンターだろ
うと、なんだろうと」

家を振り返って誠一郎が言う。その顔は家族を思いやる父と、使命感に満ちた男の顔のものであった。

「いい覚悟だ。よかったよ、お前がイジメがいりそうな奴で」

朝日の中二人は歩き出した、ドでかい重箱を脇に抱え、どすどすと。

資格は大事、丸山田 誠一郎（前書き）

登場人物紹介

まるやまだ せいいちろう
丸山田 誠一郎

主人公。52歳。ふと夜の公園に出向いた為にトンデモナイ事態にまきこまれる事になった。丸々太った体系とメガネが特徴の優しそうなお父さん。

一人娘に彼氏ができた事に、まだ気付いていない。

たなか とめこ
田中 留子

見た目は十代前半の中学生くらいの子に見えるが、実年齢は13歳。

最強のヴァンパイアハンターにして、誠一郎の師匠。

『高城 らら』という偽名で丸山田家に同居する。

資格は大事、丸山田 誠一郎

誠一郎が住む三合市には、スーパーフジタ三合店がある。三合店は昨日藤内達と出会った店舗で、研修もここで行うとの事だった。

誠一郎が店長室に顔を出すと、藤内がすでに出勤していた。

「おはようございます、丸山田さん。今日からよろしくお願いしますね」

笑顔で一礼。誠一郎も頭をさげると、やはり目線の先にはナイスなお山が二つあった。朝一番でエネルギーをもらった誠一郎は、転職してよかったなと心底思う。だが誠一郎は、その気持ちが数分後に180度方向転換するとは、夢にも思わなかった。

店長室からヴァンパイアハンター協会事務所へは、隠し階段でつながっている。

藤内が備え付けのIP電話に『1、1、0、9、3』と入力すると、店長机が横にスライドし、その下に地下へと続く階段が現れた。

「……田中さんの趣味でこうなっただんです」

そう言っただけで藤内は困った笑顔を浮かべ、階段を下っていく。

誠一郎もそれに続く。

5分ほど階段を下りた所に広大な空間が広がっていた。そこには射撃場や会議室、講義室や演習場に医務室。さらには食堂にゲーム

センター（主に90年代後半の格ゲー）など、それも全て支部長権限で留子が口を出したらしい。

講義室に案内されると中では、留子が昨日の夜の様に、ふんぞり返っていた。

昨日の夜とは違い、今はスカートを穿いているので、年頃の女の子がはしたないマネをするべきではないと、注意しようと思ったが、中身は113歳なのでそのへんはどうなのかと迷った挙句、春川みたいにズボンに穴を空けられるのも嫌だったので、結局黙って席に着いた。

「ようやく来たか……時間も押してるしさつさと説明始めるぞ。まずはこれを受け取れ」

目の前に広げられたテキスト類に唖然とする。『よくわかるヴァンパイアハンターのお仕事』、『はじめよう！杭打ち検定5級』、『誰でもできる聖水精製講座』、『ヴァンパイアハンター史？』、『楽しく学べるヴァンパイアの生態』……どのテキストの表紙にも田中 留子著と記載されている。

「テキスト代はもちろんお前の初任給から差っ引いとくから、そのつもりで」

冊子の裏を見た誠一郎はさらに唖然とした……定価：本体5250円（税込）。

そして研修1日目が始まったのだった。

1日目は座学のみで、明日からは実技もあるとのことだ。

まず最初に教えられたのが、ヴァンパイアハンターの資格制度について。

剣術、銃火器、体術、杭打ち、薬品生成の5種の検定があり、その全ての5級を取得すれば研修は終了するらしい。

試験は筆記と実技の2つで、等級は漢字検定や英語検定と同じで、5級、4級、3級、準2級、2級、準1級、1級にわけられているらしい。

取得している検定の等級が上がれば、それだけ高ランクのヴァンパイア討伐任務を優先的に回されるのだ。

やはり、世の中資格がものを言うようだ。だが残念な事に、直接給料には影響しないらしい。

「私は剣術検定2級を所持していますので、わからない事があつたら遠慮なく聞いてくださいね」

笑顔と共に一礼。藤内にスリーサイズを聞いたら、あの笑顔はどうなるのだろうか？ 後で春川にでも聞いてみよう。

誠一郎はテキストに目を戻すと、空腹感をこらえた。

時刻は午前10時をまわったところだった。

念願のスマホを手に入れたぞ、丸山田 誠一郎（前書き）

登場人物紹介

はるか
春川 優人

高校3年生。17歳。アイドルの様な容姿と軽いノリの少年。学校での評判は良く、生徒会長も務めるほど人望もある。が、それは全て演技で本質はかなりアホ。

アホではあるが、勉強はかなりできるらしく、国立大学へ進学予定。ついでに誠一郎の娘、瑠奈の初の彼氏である。

ふじうち
藤内 彩華

20前後の物腰柔らかで、美しい女性。

とある事件をきっかけに、留子と知り合いヴァンパイアハンターとなった。

剣術の腕は確かで、抜剣の瞬間は一瞬ではあるが、笑顔が消える。

念願のスマホを手に入れたぞ、丸山田 誠一郎

午後5時をまわり、研修初日が終了した。

オランウータンが木の枝に捕まるように、高々と両手を振り上げ
誠一郎は伸びをする。

留子と二人きりの講義室に誠一郎のあくびが静寂を切り裂いた。

「夜の実戦の前にこれをお前に渡しておく」

オランウータンの右手に、留子から最新機種のスマートフォンが
手渡される。

「業務用に使ってくれ、私、藤内、春川、あとこの店の電話番号は
すでに登録しておいたから、確認してみる」

電話帳を開いてみる。

『トメたそ』、『きよぬー』、『バカ』、『自店』の4件が登録
されていた。

「解りやすい名前だろ？」

『きよぬー』が藤内で、『バカ』は春川なのだろう、『トメたそ』
はあえてスルーした。後でちゃんと名前を変えておいたほうがいい
かもしれない。

「あれ？ この女の子の顔みたいなアプリは何なんです？」

アプリケーション一覧に、ドット絵で書かれた、黒髪の女の子がウィンクしているアイコンがあった。よく見れば留子に似ている。アプリケーション名は『VHナビ』という名前だった。

「ヴァンパイアハンターナビ。略してVHナビだ。そいつを使えばGPSを通じて、ヴァンパイア的位置をお知らせしてくれる。便利な世の中になったもんだな」

うんうん、と留子は感慨深そうに何度も頷いた。

「ちなみにプログラミングしたの私だ。下請けなんかにはやらせたらムダに金がかかってしょうがないからな、あまり使わないプログラミング言語だから、苦労したんだぞ」

留子はプログラムもできるらしい。

「ちゃんとアップデートしとけよ、バッググラウンドで使用しておけば、万一ヴァンパイアが出現した時に、アラーム音が鳴るようにしてあるんだ」

なるほど、こいつでヴァンパイア的位置を確認し現場へ向かえと
いうことか。突然着信音が鳴り響き、驚いた誠一郎は、携帯を机の
下に落としてしまった。

「壊したら初任給から……解ってるな？」

留子のかわいらしい顔が恐ろしいオーラを発していた。

肥えたブルドッグが犬小屋に入るように、誠一郎は机の下に潜り

こんだ。頑張^{みぎて}って前足を伸ばし、ようやく捕まえることができた。

「一体誰からだろう?。」

ディスプレイには着信中 きよぬーと表示されていた。

『オレオレオレ!..!』

電話に出ると若い男が早口で、いきなりオレを連呼しまくった。
オレオレ詐欺だろうか?

「どちらさまでしょうか?。」

『ちよつとちよつとちよつと! だからオレだって! 今事故うち
やってさあ』

間違いない、典型的なオレオレ詐欺だ。

「お金ならありません、それに家には息子はおりませんので……切
りますよ?。」

『だから、オレだよ! 春川だよ!..!』

——きよぬーは春川だった。

風評被害かも、丸山田 誠一郎（前書き）

登場人物紹介

まるやまだ るな
丸山田 瑠奈

高校一年生。16歳。

幸いな事？に母美雪の遺伝子を濃く受け継ぎ、美しく成長した誠一郎の娘。

父親のことは『クサイ、ウザイ、ジャマ』の三拍子そろったダメオヤジという認識で、誠一郎が嫌い。

最近出来た初めての彼氏、春川 優人に夢中。

まるやまだ みゆき
丸山田 美雪

誠一郎の妻で瑠奈の母。推定30代後半（これ以上は何も知りません）

美しい容姿で、蜂の様に男を引き寄せる花。

大学時代はミスキャンに選ばれるなど、派手な経歴の持ち主。

そんな彼女が何故、誠一郎の様な男と家庭を築くに至ったのか……。
本編最大？の謎

風評被害かも、丸山田 誠一郎

「それで、どうしたんだい？ 私に電話なんて」

留子が番号を教えていたのだろうか？

『いやゝはは……なんかトラブっちゃってさ。元カノA、Bが同時にヨリ戻したいって迫ってきてさあ。そこに元カノCが現れたもんだから、第三次オレ盗り合戦に発展しちゃって……』

なんという……うらやましい奴だ。

『まあ、おっさんには縁のない話だろうけど、キャハハ』

激しくムカついた。携帯を握りつぶしたい衝動に駆られたが、初任給が人質にされているのですぐにクールダウンし、気持ちを落ち着かせた。

『そんなわけで、ちょっと遅れそーだからテキトーに時間潰しといてね……んじゃ』

きよぬーとの通話が終了した。

「春川か？ どうせまた遅刻だろう？ あいつはいつもああなんだ」

留子がやれやれ、と言った表情でドアを開け、私設ゲームセンタ―へ消えた。

春川が到着したのはそれから1時間後の事である。

「よー、マルちゃん！ 待たせちまったな！」

講義室の机で眠りこけていた誠一郎に、軽快な足取りで春川がやってきた。

「ってマルちゃんって……私の事かい？」

これでは、うどんやそばが風評被害だろう。

「昨日アヤちゃんと相談したのよ、マルヤマダセイイチロウって読み辛いじゃん？ 最初はマルヤマダセイウチロウとか、デカマルコちゃんとか、メタボリック將軍とか……」

最終的に候補に挙がったのが、肥満戦士ビッグマンとマルちゃんとデブだったらしい。最後のはどう考えても悪口だろう。

「あ！ ごめん、彼女から電話だわ！ はいはいー今出ますよー。るーちゃん」

るーちゃんというのが今の彼女のようだ。

「うん、うんうん。え、マジ？ 日曜行ける？ え！？ お金の事なら全部オレが出すって言ったじゃんよー。ん、お小遣い入った？ わかった、んじゃ現地集合にしようか。でも、るーちゃんが出すのは交通費までだぜ。あとは何もかもオレに任せておくんなまし。ん、じゃあまた、明日学校でねー」

ようやく電話が終わったようだ。

「いやあ、今付き合ってる子さ、チヨールレベル高けえんだけどね。もう、24時間オレの携帯鳴りつ放し！ ちよつち勘弁して欲しいかも。ま、それだけオレにお熱なだけどさ、イケメンって肉体労働なのよ、キャハハ」

24時間電話をかけまくるとは一体どういう神経をしているのだろう。きっと親の躰しっけがなっていないに違いない。デートなどに行かず、真面目に参考書を買う瑠奈の爪の力をせんじて飲ませてやりたいものだ。

誠一郎は目の前に娘の彼氏がいる事も知らず、一人鼻息を荒くした。

迷コンビ誕生、丸山 誠一郎

到着した春川と共にゲームセンターにいる留子の元に向かい、今日これからのスケジュールを聞くことにした。

「お茶買ってきてくれ。プリンに緑茶は合うんだ」

留子はプラスチックのスプーンを口にくわえたまま、ガマ口から100円玉と50円玉を取り出し、誠一郎の口に差し込もうとした。

「ああ、悪い悪い、貯金箱と間違えたよ、紛らわしいなお前」

留子は、金槌で叩いてお金を取り出すアレと勘違いしたようだった。ニヤケながら弁解するあたり、わざとであろうが……。

誠一郎が留子から言い渡されたのは、100円玉と50円玉を持って、店の搬入口の自販機で『おいしいお茶』500mlを買って来いというものだった。要するに、パシリだ。

「釣りはいらねいぞ」

ちなみに、『おいしいお茶』の価格は150円なので、お釣りは発生しない。

誠一郎は店の搬入口までたどり着くと、自販機に150円を投入し、目的の物を手に入れた。

突然、携帯からけたたましくピコピコと電子音がした。お茶のペットボトルを脇に抱え、両手でスマートフォンを操作する。

正直、オジサンにスマートフォンはキツイ。まったく操作に慣れる事ができず、片手ですいすいと自在に操る春川が少し羨ましかった。

苦戦した末、VHナビを立ち上げて確認する。反応は近所のようで、Eのマーク1つに、Nのマークが3つ。

急いで事務所に戻ると、すでに春川が槍のようなものを肩に担ぎ、スタンバイしていた。

「行くぜマルちゃん。実戦は初めてなんだから、ちくわでもくわえてオレの活躍を見てな。華麗に戦うオレの姿にホレるなよ？」

間違ってもそれはないだろう。

春川から、ちくわを一袋もらうと、誠一郎は早速口に一本くわえた。……これはなかなかうまい。

「マルちゃん。聖水を忘れずに持って行って下さいね」

藤内から『お茶のペットボトルに詰められた聖水』を受け取る。

「丸山田。実戦では春川の指示に従え、こいつはバカだが我が日本支部のエースだ。今日の実戦はいい勉強になるだろう、気を付けてな」

留子は誠一郎から『おいしいお茶』を受け取り、再び私設ゲームセンターに消えた。

「お二人とも、気を付けて行ってきたくださいね」

笑顔と共に一礼。藤内にメイド服を着せれば似合うかもしれない。

「アヤちゃん、メイド服似合いそうだよね。オレ、今度作ってくるから着てみてよ！」

春川も同じ思考だったらしい。というか、裁縫も出来るのかコイツは。

スーパージタニを出ると、ナビに従い二人は走り出した。

「マルちゃん、ナビで案内よろしく！」

春川に言われ、VHナビを再度立ち上げる。

画面には『アップデート中……もうちょっと待ってネ』とかかわいらしい文字が表示されていた。

ちゃんとアップデートしていなかったせいか、間の悪いことに今自動アップデートが始まったようだ。

「んもう、バカマルコちゃん！ いいよ、オレが自分で見るから」

立ち止まって、ナビを確認する。

「ターゲットはどうやら……三合ハム園みたいだな」

「ハム園？」

ハム園とは一体どんな所なのだろう、生い茂った木々の枝に、大きなハムが実っているイメージが誠一郎の食欲を刺激した。だが春川の携帯の画面を見て、すぐに謎は解けた。

「三合公園だね……」

嵐のように駆け抜ける、丸山田 誠一郎

公園をハム園と読み間違える春川に、誠一郎は一抹の不安を覚えた。

「春川くん、あれはなんて読むんだい？」

目の前の『つぎめちゅうしゃじょう月極駐車場』の看板を指差し尋ねた。

「決まってんじゃない！ つぎめちゅうしゃじょう。だろ？ げっきよくちゅうしゃじょうじゃないぜー？ んもう、こんな簡単な漢字も読めないのかよ、マルちゃんはー。困った子でちゅねー」

春川は薄くなり始めた誠一郎の髪をなでた。

「さ、早いとこ三合ハム園に行こうぜ。逃げられたらトメちゃんに殴られちゃう」

槍のような物を担ぎなおし、春川は駆け出した……ハム園に向かって。離されまいと誠一郎も必死に走る。

不思議だった。いつもならばすぐに切れてしまう息も、1キロ程走ってもなんともない。ヴァンパイアハンターになったおかげで、身体能力が向上しているのかもしれない。

マタドールの赤い布に突っ込む猛牛の様に、ドスドスと体重1？0kgの巨体が時速40kmで駆け抜けた。

「到着つと……反応は中央の池の辺りか、行くぜマルちゃん」

三合公園は中央に大きな池があり、休日の昼間は親子連れで散歩したり、カップルがいちゃついで賑わっているのだが、夜ともなればまた別の顔を見せていた。

「おーいるいる。ナビの反応からして、ノーランクが3匹……余裕だな」

池の周りには中年の男性と若い女性が二人。先日のヴァンパイア達と同じように舌を出し、目は空ろだった。こちらに気付いたのかよろよろと向かってくる。

春川が槍の様な物を覆っていた布を外すと、中から銀色の槍が出てきた。

いや、あれは……そうだ『はじめよう！杭^{くい}打ち検定5級』で写真紹介されていた。

「オレの得意武器、『銀^{シルバー}の杭打ち機』さ」

2m程の長さの金属棒の先端に、鋭い銀色の杭が備え付けられており、棒と杭はシリンダーの様な物を介してつながっている。目標に突き刺した瞬間にシリンダー内の火薬が炸裂し、打突力を大幅に増幅し相手を貫く……。対ヴァンパイア兵器の中で、最も高い威力を持ち、最も扱いが難しい武器……そうテキストに書かれていた。

「さーて、今日もトバシちゃいますかね」

春川めがけて中年男のヴァンパイアが駆け出した。中年男の拳は春川を捉えているが、春川にかわす気配は無い。

春川はゆらりと陽炎の様に一瞬で右に避けると、ステーキを右肩に担いだまま、右足で膝蹴りを放つ。

顔面にヒットし中年男は数歩後退^{あとずさ}りした。

「オレのモットーは地球と女の子に優しく！ ヤローとヴァンパイアに厳しく！ あんたにやダブルで厳しいぜ？」

春川は数歩の距離を一気に詰め、中年男に接近し、左手で掌底を中年男の腹に打ち付ける。流れるような動きでそのまま右足で男の顎を蹴り上げ、男は重力から解放された。

春川はニヤリとした表情でステーキを構える。

やがて中年男は重力に従い、地上へと帰ってくる。

春川は落下してきた中年男の腹にステーキを突き刺し――。インパクトの瞬間、轟音と共に男は爆ぜた。

「マルちゃん、杭打ち検定準1級のオレの腕前、どうよ？」

三日月を背にステーキを肩に担いだ春川の姿は……。

――ホレそうなくらい、カッコよかった。

鏡を見る、丸山田 誠一郎

「さてさて、残りはそっちのお姉さん達か。どうせ貰くなら、ベツドの上でといきたいもんだよね、キヤハハ」

女ヴァンパイア二人に向き直り、春川は軽い足取りで彼女らの元に向かった。

「あ、そーだ。聖水かけといてね、マルちゃん」

春川にそう言われ、誠一郎は藤内に渡された聖水を中年男のヴァンパイアにかけた。

——これでいいだろう。

振り向けば、春川のほうもカタが付いたようで、地面には女ヴァンパイアが横たわっていた。

「終わり、かな？ こっちも頼むわ、マルちゃん。サツが来ないうちにはさっさとずらかろうぜ、見つかるうちよっちな面倒だからな」

残りの二人にも聖水をかけ、討伐は終了した。

「ノーランクが3匹だと、大した額にならねえんだよなあ、今度の日曜デートだったのに。せめてEランクくらい、出てきてもらいたいもんだぜ」

Eランク……その単語を耳にした時、誠一郎の中である記憶が蘇った。搬入口でナビを見たとき、反応は4つだった。一つはE、あ

との三つがN……それらがランクを示すものならば……。

「春川くん、VHナビの反応は!?!」

未だアップデート中の誠一郎のVHナビはあてにならないので、春川に確認してもらうしかない。

「ああ……そうそう! あของเกม、クソだよね。オレ、買つてすぐに売りに行ったら5600円で売れたよ。るーちゃんも早めに手放した方がいいぜ!」

春川は彼女と通話中だった。

まったく……春川も春川だが相手の娘は一体どんな教育をつけているのだろう。親の顔を一度見てみたいものだ、誠一郎はまた鼻息を荒くした。

「ん、またねー」

通話を終えた春川に詰めより、VHナビを起動してもらった。

「お? ボーナスチャンスじゃん。Eランクちゃんがまだ近くにいます。反応はこのハム園の中みたいだな。手分けして探そう、見つけたらワンコくれ」

春川はそれだけ言うと、嬉々として公園の中を走り出していった。

ワンコの意味は分からないが、見つけたら春川に電話して知らせればいいだろう。しかし、Eランクヴァンパイアとはどんな相手なのだろうか?

10年以上生きているからには、先ほどのノーランクとは比べ物にならないに違いない。

誠一郎はどうせ相手にするなら、EランクよりEカップのほうがいいナ。とこっそり鼻の下を伸ばしたのだった。

ナビのアップデートはまだ終わっていないので、仕方なくその辺りをうろついてみることにする。

「おや、丸山さんじゃないですか！」

声のした方向を振り向けば、先週はす向かいに越して来た吉村さんが笑顔で手を振っていた。

吉村のスーツに包まれ、引き締まった体は誠一郎とは対照的だ。

20代半ばの、野生的で、筋肉質なその容姿は、近所の奥さんのハートを見事にキャッチしていた。

「こんなところで、どうしたんです？」

まずい、この辺りにはEランクヴァンパイアがいるのだ。吉村を巻き込まないように避難させなければ……。

「こんばんは吉村さん。いえ、ちょっと夜の散歩ですよ、家には居場所が無くてね……」

「丸山さんも年頃の娘さんを持つてたいへんですね」

世間話などをしている場合ではない。

「それより、吉村さん。この辺は物騒だから、そろそろ家にお帰りになったほうがいいですよ?」

「そうですね、近頃の若者は怖いですからね。私の様なオジサンはさっさと退散しますよ」

20代後半くらいの吉村がオジサンなら、誠一郎はオジイサンだろう。

吉村は屈託の無い笑みを浮かべ、誠一郎の後ろについて歩いた。だがその笑顔をすぐに消すと、代わりに凶悪な犬歯を現した。

「ご近所突き合い、丸山田 誠一郎」

吉村の右手が誠一郎の首を掴み、芝生の上に投げつける。

「想像以上に重いですね、丸山田さん。一体何kgあるんです、ダイエットをお勧めしますよ?」

突然の出来事に誠一郎は戸惑う。目の前にはきれいな星空が広がっており、誠一郎を見下ろしていた。

「吉村さん……あれ? なんで芝生で寝てるんだろう、ご一緒にどうですか? 芝生で星空を見上げるのもオツなもんですよ」

誠一郎を包む脂肪の鎧が衝撃を100%カットしたようで、ダメージはやはり皆無だった。

「丸山田さん……面白い人ですね。ヴァンパイアハンターでさえなければ、酒でも一緒にやりたいところなんですが……ヴァンパイアは『親』の命令には逆らえないんですよ」

吉村は深くため息を付くと、目を閉じた。

「この身になって『30年』……私も、数々の駆け出しヴァンパイアハンターを手にかけてきましたが、ご近所さんを手にかけるのは初めてのことなんです」

「吉村さん……冗談でしょう?」

吉村はアニメの見すぎなのだろうか、ちゅうに病という単語を思

い出す前に、吉村の犬歯……いいや、牙が闇夜の中で白く光った事で、ようやく理解できた。

吉村はヴァンパイア――。

朝、ゴミを捨てに行くのとまたま吉村と出会い、話す機会があったのだが、聞き上手で色々と世間話もしたし、今時の若者にしては珍しく、礼儀正しく好感を持てた。

……日は浅いとはいえ、吉村は顔なじみだ。見知らぬ人間ならいざ知らず、知り合いと戦えるのか？

それにおそらく、吉村はナビに表示されていたEランクだ。だとすれば今の自分のかなう相手ではない、春川を呼ばなくては……。

「だから丸山田さん、あなたにはチャンスを与えたい。ヴァンパイアハンターになったばかりのあなたなら、もう一度ヴァンパイアになれるチャンスがある。私に噛まれ、私の子になるのです。そうすればあなたの命は助けられる。私の『親』も本当はそれを望んでいます」

吉村は優しく誠一郎に手を差し伸べた。

「マルちゃん、伏せろ！」

吉村が手を差し伸べたままのポーズで、銀色の槍に貫かれている。後ろを見れば、春川がステーキを構え、勝ち誇った笑みを浮べていた。

「お仲間ですか……いい、突きですね。これほどの杭打ち士ベネトレイターに出会

ったのは……始めて……です」

「それじゃ、これ以上の打ち手にや会うことはねえだろ。これで終わりだかな！」

春川がステーキを空に向け、火薬が炸裂する。

吉村は煙に包まれ地面に叩き付けられた。

「よっしゃあ、ボーナスゲット！ こりゃ日曜のデートは派手にイケそうだな。るーちゃん、待っててね！ 夜は君と二人で……キヤハハ」

春川の馬鹿笑いが周囲にこだまする。

「あ、ようやくアップデート終わったのか」

VHナビが最新状態になったので、起動してみる。

「このスーツ……気に入ってたんですがね。キレイに穴あいちやってますよ、参りましたね……はは」

吉村の腹に空いた大きな穴はみるみる塞がっていき、穴の空いたジャケットとワイシャツ以外は外傷と呼べるものは何もなかった。

誠一郎がVHナビに目をやると、このマークが大きく表示されていた。

ピンチを超ピンチに変える男、丸山田 誠一郎

ナビの誤表示……おそらく春川ナビは最新ではなかったのだろう。最新バージョンにアップデートされた事で、吉村の能力が正常に表示されたのだ。

Ｃランク……そう、３０年以上のキャリアを持つヴァンパイア。

「やっぱあの展開は無いっしょ！ 最近のドラマにありがちなパターンだね。るーちゃんはどんなドラマみてるの？」

春川はまたもや彼女と電話している様だ。

吉村は通話中の春川の背中に近づき、肩を掴む^{つか}。

春川は振り向かず、うつとうしそくにその手を払いのけた。

「マルちゃん、今通話中！ もう二度とちくわあげませんよ！ あーごめんごめん。え？ 女じゃないよー、後ろにいるのは太ってマヌケなおっさん。信じてよーそこでブヒブヒ言ってるんだから。え、家のお父さんに似てる？ ご冗談を！ るーちゃんのお父さんならきつと苦みばしったイイ男でしょ、その肥満戦士ピッグマンと一緒にしたら、お父さん草葉の陰で泣いちゃうよ？」

本人を目の前にしてえらい言い様だった。というか、誠一郎はまだ死んでいない。

吉村はいい加減頭にきたのか、春川の背中を蹴り飛ばした。

春川はうつぶせになって倒れるが、^{たくま}遅しくも携帯は離さず未だ通話中だった。

「痛ってええええええ！　ちよ、若くてカワイイ女の子に蹴られるならともかく！　あ、いや、るーちゃん、だから女じゃないって！　ヘンなプレイとかしてないから信じてよ！　……切れちゃった。んもう、バカマルコちゃん！　るーちゃん怒って切っちゃったじゃないか！　どーしてくれるん——」

振り向いた春川に吉村の拳が振り落ろされた。

「まったく最近の若者は……ヴァンパイアといえど私は年長者ですよ？　人を無視して延々ラブコールとは……日本の未来は暗いですね、ヴァンパイアの気にする事ではありませんが」

「親父にも殴られたこと無いのに……！　暴力反対！」

人の腹に風穴空けといて、今更暴力反対はないだろう。

涙目で吉村を見上げる春川には、さっきのカッコイイ面影は^{みじん}微塵もなかった。

「せっかく稀代の杭打ち士^{ベネトレイター}に出会えたと思ったのに。残念でなりませんよ、私が手を下すまでも無い。おいでなさい、かわいい子供達！　……そのバカを始末しなさい」

気が付けば先程のノーランクヴァンパイア達が、春川達を囲んでいた。

「あれ？　なんで？　ちゃんと聖水かけたのに……」

誠一郎は聖水のペットボトルを取り出し、蓋^{ふた}を開けて匂いをかいでみた。

まさか……。

中身を口に含み、ごくりと飲み干す。

「おいしい……」

すっきりとした味わいと清涼感が、誠一郎の鼻孔を突き抜けた。

ステーキよりステーキ、丸山田 誠一郎

「聖水とお茶、間違えちゃったみたい……ごめんよ、春川くん」

申し訳なさそうに謝る誠一郎に、吉村はこらえきれず笑い出した。

「ははは！ 丸山田さん、やはりあなたは面白い人だ」

「マルちゃん、冗談は顔とそれ以外だけにしてよね……」

要するにそれは、誠一郎の存在そのものが冗談という事だろう。

「どどどどど、どうしよう？」

「仕方ねえな……やるか！」

春川は急に真剣な面持ちになり、ヴァンパイアに向かって走り出した。姿勢を低くし、アッパーを繰り出す——かと思いきや、そのままの体勢でヴァンパイアの隙間を縫^ぬって猛ダッシュし、逃げた。

「早いよ春川くん、待ってくれ！」

誠一郎もそれに続くため、目の前のヴァンパイア達を轢^ひき逃げした後を追う。

二人はトイレの脇にある茂みに身を隠し、なんとか逃げる事が出来た。

「まずいぞこりゃ……聖水無いといくら倒してもキリが無い」

「春川くん、持ってきていないのかい？」

「ステーキ担いだら、それ以外ダルくて何も持てないのよ」

春川は当然だろ、と言わんばかりの顔をしている。

「そうだ！　なんとか聖水をここで調達できないかな？　君、杭打ち準一級なんだろ！　なら、他のだって」

「あーだめだめ。オレ、他のに一切興味なかったから勉強してないの。杭打ち以外全部5級なんだわ、それに聖水の作りかたとか忘れちった」

てへ、と舌を出した春川の顔面に、野良犬のフンを枝に突き刺し、そのまま放り投げてやろうかと思ったが、脳内シミュレーションのみにとどめておいた。というか、原因は誠一郎にあるのだが。

「まあ、安心しろよ。ことは一度やりあった経験があるんだ。その経験があればなんとかなるって！」

「本当かい！？」

「Cっていつでも、Cカップの女の子だけどね！」

てへ、と舌を出した春川の顔面に、野良犬のフンを枝に突き刺し、そのまま放り投げてやった。

「危ねっ！　このビューティフルストロングな顔面にそんなもん投げるなよ！」

惜しい。すんでのところでかわされ、ビューティフルストロングな顔面は無事だった。

「ま、聖水無くたって、とりあえずオレが奴らを戦闘不能にしてる間に、届けてもらうなり、マルちゃんが取りに行くなりすればいいさ、ってことでステーキ返して」

差し出された右手は何を求めているのだろう。誠一郎はとりあえず、春川から貰ったちくわを、右手に一本乗せてみた。

「マルちゃん、ノリ突っ込みしてあげたいのヤマヤマなんだけどね……。オレのステーキ、どこやったの！ 食べたの！？ おいしかったの！？」

春川は語気を荒げ、誠一郎に詰め寄った。

そもそも、食べておいしいのなら誠一郎がとくに食べている。

「お探し物は、これですか？」

声のした方向に目をやると、吉村がステーキを携え公園の明かりの下に立っていた。

アニメは文化、丸山田 誠一郎

「最近の杭は進化したんですね……なるほど、多くの兄弟や子供達がやられてしまうワケだ。どれ、あなたで試してみましよう、いい音で弾けてくださいよ？」

「いや、オレ、貫くのは好きだけど、貫かれるのは趣味じゃないんで！ マルちゃんはそのへん、オールマイティーだからお先に召し上げれ！」

と言って、春川は誠一郎を前に突き出した。

「あなた、あれですね。『トラエモン』に出てくるノブタくんそっくりですよ、その行動パターンとか」

トラエモンは毎週金曜午後7時から、夕日テレビで放映されている国民的アニメだ。

人類滅亡の鍵を握る少年『ノブ ノブタ』を護衛するため、ノブタの子孫が220世紀から現代日本に送り込んだ、愛と平和のトラ型殺戮ロボット。それがトラエモンである。

サングラスを掛け、1次元ポケットから飛び出す、数々の必殺^{ジェノサイド}道具^{ドウェポン}を駆使し、イジメっ子のシャイヤンやシズルちゃんからノブタを護衛している。

ちなみに、毎回ノブタが道具の使い道を間違えて、首都圏が壊滅するのだが、次の週には完全に元通りになっており、架空世界とはいえ、その科学力には驚かされる。

「オレも地デジ録画して、12人の姉ちゃんと毎週見てるぜ、シズルちゃんの入浴シーンは名物だよな」

色々突っ込むところなのだろうが、あえて無視した。

「それだけではありません、日曜18時からミニまる子ちゃんとホタテさんも必見です。私、国民的アニメに目が無いんですよ、フフ」

いつの間にかアニメ談義に花が咲き、緊迫した空気がどこかへ飛んでしまった。

「さて、存分に語り合いましたし、もういいですね？」

やはり、吉村は見逃してはくれないようだ。

「ああ、いいぞ。そのままやっちゃってくれ」

少女の声がした。

「あなたは……」

吉村はトイレの屋根を険しい顔で見つめていた。

ずっと我慢していたのだろうか？

「吉村さん、我慢は体に毒ですよ。ほら、道開けますから、どうぞ」

「ヴァンパイアは排泄はいせつしないと午前中に講義しただろ、丸山田。」

楽しく学べるヴァンパイアの生態』を家に帰って読み返しとけ」

頭上を見上げると、近所の中学の制服に身を包み、プリンを買ったときに付いてくる、プラスチックのスプーンを口にくわえた少女――留子がいた。

「田中 留子……わざわざお前が出向くとはな……」

吉村は留子を睨むと、トイレの屋根に向かって大きく跳躍し、留子に向かってステーキを振り回した。

留子はギリギリのところでそれをかわすが、一步一步追い詰められ、やがて屋根の先端部分に差し掛かる。

だが留子は、嬉しそうに笑っていた。

「かわいかったあのボウヤが、えらく立派になったじゃないか。少しは私を満足させてくれよ？」

「オレなら絶対にトメちゃん満足させる自信あるけどね！ 股間満足度100%！ なんちゃって」

春川は『下のステーキ』を誇張し、セクシーにくねらせた。

刹那、銃声が鳴り響き、春川は股間を押さえてうずくまった。

もちろん、撃ったのは留子だ。

なかなか起き上がらないところを見ると、今度は急所に当たったのかもしれない。

「田中 留子と愉快的仲間達は相変わらずですか……彩華も元気でやっていますかね？」

「元氣さ、いつでもお前を消せるように剣の腕を磨いてる。藤内の奴、せめて自分の手で元旦那を楽しみにしてやりたいんだとさ」

トイレの個室は最後の砦、丸山田 誠一郎

「それを聞いて安心しましたよ、でもまずは田中 留子。あなたからです。30年前のあの時の様には行きませんよ？ 今日私は私も本気でいきます」

ステーキを足元に放り投げ、吉村は穴の空いたスーツとワイシャツを脱ぎ、ボディービルダーの様な逞しい肉体^{たくま}を現す。Dカップはありそうな大胸筋を震わせ、静かに目を閉じた。

「お前、男のクセにデカパイだな。激しくムカつくぞ」

留子は平らな胸を張り、二丁の銃を構え、デカパイに狙いをつける。

吉村は一体何をするつもりなのだろうか？

「師匠！ 今の内に攻撃したほうがいいんじゃないですか？」

「アホ！ それじゃ面白くない。何をする気か知らんが、待ってやるのがお約束だろ？」

周辺を包んでいた空気が変化し、吉村が閉じていた目を開いた。開かれた吉村の目は驚くほど冷たく、瞳孔は血に染まったように紅く変色していた。そこにはトラエモン愛好家の面影はすでにない。

負と呼べる全ての感情を詰め込んだように黒く変色した皮膚。禍々しくも数10cmはあるつかという、鋭い爪。それはすでにヒトと呼べるものではなかった。これがヴァンパイアの真の姿だとで

もいっのだろうか。

「吉村さん……あなた、本当に……」

本当にこんな化け物に勝てるのだろうか？ 誠一郎は一步後退あとずさりし、いつでも逃げれる体勢に移った。逃げるとしたら、トイレの個室だな。

などと考えている間に、吉村だったモノが吼えた。

誠一郎は心臓をわし掴みにされたように一步も動けない。今の吉村は誠一郎にとって……死の塊その物のように見えたからだ。誠一郎が気が付いた時にはすでに戦いは始まっていた。

先手を打つべく吉村が動き出す。俊敏な動きで留子の放った銃弾をかわし、爪を振りかざした。

留子はそれをかわすと、屋根の上から飛び降り、地上から吉村を撃つ。

放たれた銃弾は吉村の左胸に直撃したようだが、恐るべき速度で傷口が塞がり、致命傷にはならなかった。

「こいつの火力じゃラチがあかないな。対戦車ライフルでも、持ってくるべきだったか……」

再び吉村の爪が留子に襲い掛かる。留子は回避するべく体を動かそうとしたのだが、スカートが柵に引っかかり、一瞬動きを止めてしまう。

「クソ、こんなヒラヒラしたもん、穿^はくんじゃなかった！」

布の破ける音と、柵が砕ける音が公園に響いた。

未来の義理の息子？を守れ、丸山田 誠一郎

爪の直撃を回避したものの、留子のスカートは、見るも無残に引きちぎられ、あられもない格好であった。太腿ふともものあたりまでスカートが裂かれ、白くみずみずしい素肌が露出している。

「なかなかセクシーじゃないですか、ステキですよ留子さん。現代イマ風に言うなら『萌え』、ですかね？」

吉村の凶悪な顔から『萌え』という単語が飛び出て、誠一郎はそのギャップに吹きだしてしまった。

「このロリコン野郎……丸山田、お前もヘンな目で見てるんじゃない！ さっさと春川を叩き起こして援護させろ！」

「オレならもう起きてるぜ」

いつの間にかステーキを拾ってきた春川が隣に立っていた。

「あんなセクシーショット目の前にして、寝てるわけにはいかないっしょ？ てか、ヴァンパイアにしちゃファインプレーだよな。貫くのを少し、ためらっちゃいそうだぜ」

春川が戦線復帰したとはいえ、留子の手持ちの武器では火力不足が否めず、決定打にはならないだろう。頼みの綱は春川のステーキなのだが、Ｃランクヴァンパイアを相手に、たった１年足らずの戦闘経験で、うまく立ち回れるとは思えない。

やはりここは春川を援護しつつ、吉村にスキを作らせるしかない。

だが、果たしてうまくいくのだろうか？

いや、やるしかない。

「バカとバカは使いようか……おい春川！」

「あいよ！」

「こいつを倒したら、後で気持ちイイ事してやる」

ただし、私じゃなくて誠一郎が、だがな。クク、と心の中で留子は笑った。

「ちょっとちょっと！ オレ、全力でトバシちゃいますよ！」

留子は吉村に向き直り、再び引き金を引く。

春川はそれを合図に、吉村との間合いを一気に詰め、銀色の一閃を放つ。

さすがに二対一とあって、吉村も回避と防御に専念せざるを得なく、防戦を強いられた。吉村の凶悪な顔に、僅かだが焦^{わず}りが見え始めている。

「参りましたね、先程よりもキレのある鋭い突き……何が彼を変えたのです」

ずばりいうと、性欲であろうか。

「たまにはマジになつとかねえと、かつこ悪いまんま終わつちまい
そうだからな！」

春川の嵐の様な突きを吉村は紙一重でかわすが、絶妙のタイミングで入る留子の援護射撃が、吉村の足に命中し動きを止めた。その
スキを逃さず春川が大きく踏み込んだ。

「遠慮せずにオレに貫かれて良いんだぜ、ヨッシー？」

「遠慮しますよ、そう何度も食らいたくないのですね」

吉村の右肩を春川のステーキがかすめる。だが、そこに春川の大
きな誤算があつた。

大きく踏み込みすぎたせいで、春川と吉村の距離はお互いの吐息
がかかりあう程近く、留子が援護しようにも、一步間違えれば春川
に当たってしまう。

吉村の爪が春川のノーガードだった腹を捉えていた。

——このままでは春川が危ない。

誠一郎の中で今日一日の出来事が走馬灯の様に蘇った。ちくわを
くれた春川、公園をハム園と読んでしまう春川、ステーキを見事に
使いこなす春川、空気を読まず彼女と電話しまくる春川。

その春川が危ない——。

「うおおあああああああああ！」

気が付くと駆け出していた。イノシシの様に、いや、吼え叫ぶ雄々しき獅子の様に。情けない叫び声を上げながら。

「マルちゃん危ねーぞ！ やめとけて！」

春川を突き飛ばし、吉村を睨みつける。留子が何か叫んでいる気がした。お腹がなんだか熱い、胃もたれだろうか？

だが、そんな事はどうでもいい。誠一郎は意識を集中するとしばし目を閉じ。意を決し見開いた。

その瞳孔は血に染まったように紅く変色していた。

地獄門開く、丸山田 誠一郎

「丸山田さん……あなたは、やはり……」

吉村を右手で掴むと、そのままボーリングの玉を放り投げるようにトイレの壁まで引きづり、叩きつけた。その反動でトイレはあつけなく崩れ落ち、瓦礫の山と化す。

「おい、マルちゃんどうしちゃったのよ！」

春川の腕が誠一郎の肩を掴んだ。振り向いた誠一郎は、いつも通りの冴えない52歳の中年男であった。

「ああ、春川くん大丈夫だったかい？」

「あーうん、ごめんねー。そう、勘違いなの！ わかってくれた！
？ よかったよかった……んで――」

春川はまた彼女と電話していた。

「うん、またねー。悪い、マルちゃん何か言ってたっけ？ いや、リア充はつらいわよ。って、マルちゃんには関係ないか、キヤハハ」

トイレの壁に叩き付けるのは春川のほうがよかったかもしれない。

「やはりあなたは面白い人だ、丸山田さん。田中 留子があなたをヴァンパイアハンターに引き入れたのも頷ける」

瓦礫の中から吉村がむくりと起き上がり、ホコリをぽんぽんとは

たいた。

無傷――。

「ステーキで貫かれた上に、今の攻撃……。そろそろケリを付けな
いと、私もまずいですかね。録り貯めしているトラエモンもまだ見
ていないのに、まだ滅せられるわけにはいきませんよ」

ゆつくりと吉村がこちらへと歩いてくる。誠一郎はすぐに体勢を
整えようとするが、足に力が入らない。気が付けば小さな赤い池が
地面を濡らしており、その源泉というのが自分の4段腹だというの
だから、驚きのあまり声を出せず、その場にへたり込んでしまった。

「おい、マルちゃん。お漏らしか？ …… って真つ赤じゃん！ ト
マトの食いすぎとかじゃ…… ねえよな？」

「アホ！ さっきお前をかばった時だろう。すぐに丸山田を連れて
事務所に戻れ。後は私がなんとかする！」

だが、春川には留子の言葉が届いていない様子だった。

突然、この場の空気に場違いなメロディーが流れ、吉村は足を止
めた。

発信源は春川の携帯で、ディスプレイには『MY ANGEL
るーちゃん』と表示されている。

「もしもし、るーちゃん？ 悪い、今立て込んでるんだわ。ツレが
超絶ピンチでね。後で掛け直すから、それじゃね」

春川は携帯の電源をオフにし、胸ポケットにしまいこんだ。

「バカだぜ、マルちゃん。オレなんかかばって、こんな大怪我しやがってよ。ちよっちガマンしてくれよ。あいつブツ倒したら、すぐ手当てするからよ、それまでこれでもくわえてな」

ちくわを1本取り出し、地獄門の様な誠一郎の口に差し込んだ。

その時の春川の顔は暗闇でよく見えなかったが、唇を噛んでいたのだけは分かる。

「おい、春川！ お前聞いているのか！ 早く丸山田を連れて逃げろ！」

「トメちゃんの小鳥のさえずりみたいな声を、オレの耳が聞き逃すわけないっしょ。ヨッシー無傷っぽいけど、オレの肩への打ち込みと、トメちゃんの足への狙撃。それとマルちゃんのさっきの攻撃で、再生速度がガタ落ちだ。そうだろ、ヨッシー？」

吉村は凶星だったのか、返事を返す代わりに一步後ずさった。

春川は勝利を確信し、ステーキを構え一気に踏み込んだ。

「あのバカ野郎が……！」

春川を援護するため、留子は吉村に向かって、二つの銃口からたて続けに四発の銃弾を放った。

空になったマガジンを地面に捨てる音と、吉村が貫かれた音はほぼ同時に春川の耳に入る。

「捕まえたぜ！ ヴァンパイアのおっさん！」

吉村の背中に銀色の翼が生えたかのように、ステーキが深々と貫通していた。

「——！？」

「オレのモットーは地球と女の子に優しく、ヤローとヴァンパイアに厳しく、オレの仲間を傷つけた奴にはなお厳しく！ あんたにやトリプルで厳しく……行くぜ！」

激動の研修初日お疲れ様、丸山田 誠一郎

—— 終った。

吉村は再び大きな風穴を空けられ、地面に倒れこんでいる。起き上がる気配は、ない。

留子はお茶のペットボトルを懐から取り出し、吉村に向かって歩き出した。

だが、けたたましいサイレンの音が留子の足を止める。

「まずいな、タイムオーバーか。さすがにトイレがああじゃ、ここに長居し続けると面倒だ」

「そりゃこんだけドンパチャれば、流石に通報されちゃうよね……」

「だが、吉村を野放しにしておく事もできない。藤内には悪いが聖水をかけて——」

少し目を離れた瞬間、それが大きな失態だった。視界に3匹のノーランクヴァンパイア、吉村の子供達が目に入った。

二世世代間同士のヴァンパイアなら、その血を相手に捧げ、再生速度を回復させることが出来る。しかし、吉村の受けたダメージは余程深刻だったのか、一心不乱に子供達の血を飲み干してしまい、子供達は灰になって消えた。

迂闊すぎた…… ノーランクヴァンパイアの存在を忘れていたどこ

るか、あまつさえ、吉村の回復をも許してしまうとは。

吉村は灰になった我が子等を愛しそうに胸に抱いていた。吉村としても、それは不本意なことだったのだろう。

「ちよつとちよつとちよつと！ Cランクってのはどんだけチートなんだよ！」

春川は一步前が出るが、留子がそれを制する。

「行くぞ、春川。もう時間が無い、丸山田を連れて帰るんだ」

走り去る留子達の背中に吉村は呟いた。

「次の日曜……私達の父上が来日されます。それまで私は行動を起こすつもりはありません。今日は様子見のつもりだったので………つつい、はしゃぎすぎてしまいました。今度の日曜を楽しみにしててください、それでは………」

背後で何かが飛び立つ音が聞こえ、吉村の気配が消えた。

その後、無事に誠一郎を事務所に運び終えた2人は、誠一郎の手当てを藤内に任せ、春川はステーキの手入れを、留子は一人、食堂で考え事をしていた。

「『父上』……あいつが来るのか、それも今度の日曜に………」

吉村の親であり、留子が相対した最強の敵。

—— Aランクヴァンパイア。

留子は携帯を取り出すと電話をかけた。

「私だ、緊急事態が発生してな。すまんが至急、明日からこちらに来てくれないか？ ああ、そうだ、頼む。では、よろしくな」

今この戦力では心許こころもとない。かといって、大量の戦力を集めればその分、穴を開けてしまう。ならば、少数精鋭で行くしかない。

留子は通話を終わると、誠一郎の様子を見るため、医務室へ向かった。

鈍すぎるにも程がある、丸山田 誠一郎

「トメちゃん、えへへへ」

声のした方向には、不気味にニヤ付いた春川がいた。

「何だ気色悪い、ひねり潰すぞ」

「んもっ、あの時の約束……まさか忘れてないよね！？ オレの下のステーキもお手入れお願いシマスよ」

「約束？ ああ、気持ちイイ事か。ていうかお前、倒せて無いだろ？」

春川は地面に寝転び、ダダをこね始めた。

「やだやだやだやだ！ トメちゃんの？つき！ 二度と口きいてあげないからねっ！」

そのほうがむしろ助かるのだが、うつとうしいので留子は諦めた。空になっていた弾を詰め、引き金を引く。寝転がっていた春川のズボンに命中し、二つ目の穴ができた。

「どうだ？ 気持ちイイか？ 何なら、もう2、3発いつとくか？」

春川はズボンに開いた穴を見て、少し涙目になって叫んだ。

「ちよっとちよっとちよっと！ 本日二度目ですわよ！ トメちゃんのバカ！ いいもん、るーちゃんに癒してもらっもん」

春川は携帯を取り出そうとするが、なかなか見つからない。

「あれ？ あれ？ あれ？？」

「どっかに落としたんじゃないのか？」

「ちゃんと胸ポケットに入れておいたのに……どこいったんだ！？」

流行の女性アーティストの着メロで、誠一郎の意識は覚醒した。

幸い、傷はたいしたことがなく、藤内の調合した薬で傷はみるみる癒え、すぐにでも動けそうだった。

春川と違い、藤内は全ての検定の2級を取得しているらしく、薬品生成の腕の方も確かなようだ。

「うるさいなあ」

着メロは一向にやむ気配が無く、しかたなくその発生源である携帯を拾い上げてみた。ディスプレイには『MY ANGEL ーちゃん』と表示されている。

「これ、春川くんのじゃないか。しょうがないなあ」

代わりに出て、説明しておいてあげよう、誠一郎は思った。

『せんぱーい！ 電話出るの遅いですうゝ、もしかしてご飯食べてましたあ？』

どこかで聞いた声だ、だが、どこで聞いたのかは思い出せない。声からして、若い女の子だというのは解るが、前の会社の子だろうか？

「もしもし？」

『あれ？ これ、春川優人さんの番号ですよね？ 私、間違えちゃいました？』

先ほどの猫なで声と打って変り、別人の様な声で彼女はうつとうしそくに尋ねてきた。

「いや、春川君が部屋に電話を忘れていったみたいだから、代わりに取っただけなんだけど……」

しばしの沈黙。

『あなた、先輩の何なんですか！？ なんか今日は先輩の様子がおかしいと思ってたけど、急に蹴り飛ばされたり友達がピンチだからって勝手に切っちゃうし……まさか、浮気なの！？ 許せない、あんたなんか先輩は渡さないんだからっ！』

恐るべき勘違いをしているようだ。

「いや、僕、男だし、君の先輩に興味はないから……」

『男！？先輩、そんな趣味があつたんだ……でも、天使のような先輩なら、老若男女地球外生物問わず愛されちゃうから、仕方が無いわね……』

仕方が無いのか。

それよりも春川が天使というのなら、墮天使ルシフェルがぴったりのイメージだろう。

『とにかく、あなたは敵よ！あたしは丸山田 瑠奈！あなたの事は、絶対に許さないから！』

一方的に通話が終了した。

「まさか……」

瑠奈と同じ高校の制服を着ていた春川。

そして、今の電話の声。

極めつけは、最後に名乗った丸山田 瑠奈という名前。

——謎は全て解けた。

同姓同名のそっくりさんだ。

22時のハプニング、丸山田 誠一郎

突然、ノックもせず勢いよくドアを開け、春川が医務室に侵入してきた。何故か、匍匐前進ほふくぜんしんで誠一郎のベッドまで這いずりまわり、周囲を探索している。

「マルちゃんマルちゃん！ このへんにオレの携帯落ちてなかった？」

ベッドの下に潜り込んだのが、春川の声が誠一郎の真下から聞こえてくる。

「ああ、うん。ここにあるんだけど……」

ベッドを突き破った春川の手が、携帯を握り締めていた誠一郎の手をがっしりと掴む。

「みつけたあああああ！」

「痛い、痛いよ春川くん！」

誠一郎の手から携帯をもぎ取ると、ベッドの下で愛娘瑠奈と同姓同名の、声までそっくりさんに電話をかけた。

「やつほー！ るーちゃん、ご無沙汰！ 23分34秒ぶりだね！ え？ オレが浮気？ んなわけないっしょ！ きつと幻聴だよ、空耳だよ。そんなの気にしちゃだーめ！」

どうにも居辛い空気だったので、上着を着込み、部屋の外へ出た。

「おう、丸山田。もう大丈夫なのか？」

ドアを開けてすぐ留子が話しかけてきた。

「はあ、思ったより傷は大した事無いみたいで、もう帰っても大丈夫そうです」

「そうか、それじゃそろそろ帰るか。私も一応塾に行ってる事になっているんだが、そろそろ帰らないとまずい時間だろ？」

時計を見れば、午後十時をまわっている。

「でも師匠。その……その格好で帰るのはまずいんじゃない……」

吉村に裂かれたスカートはそのままだったので、今一緒に並んで帰ったら警官に職務質問され、誠一郎は社会的に死ぬだろう。

「国家権力なんざ怖がってどうするんだ。やばくなったら股間を蹴り上げて逃げればいいんだよ」

それでは余計に罪を重ねることになる。というか、誠一郎では足のリーチが短すぎて届かないのだが。

「田中さん、そうではなくて年頃の女の子的に、それはマズイんじゃないかとマルちゃんに心配してるんです」

藤内がフジタニの女子制服を抱え、階段を降りてきたところだった。

「まあ、お前が言うこともわかるが……なんでウチの制服なんだよ、他に無いのか？」

「後は春川くんが作った魔法少女の衣装と、スクール水着くらいしか……」

「なら、それでいいよ」

留子は渋々、フジタニの女子制服を受け取ると、その場で着替え始めた。

「ブーッ！」

突然のハプニングに誠一郎は微量の嬉しさと、気まずさがブレンドされた感情を口から吐き出した。決して先祖返りしたわけではない。

上着のボタンを外し終わった留子が訝しげに尋ねた。

「なんだ、ブタごっこならよそでやれ」

「いや、師匠ここで着替えなくても……」

「嫌だ、めんどくさい。お前がどっかいけ」

子供の様なやりとりの末、結局誠一郎は外で待つ事にしたのだった。

パーフェクト奥さんを持って幸せ、丸山田 誠一郎

ドでかい重箱を下駄箱の上に置き、腰を玄関の床に落ち着かせる。今日一日の疲労が全身に行き渡り、すぐにでも眠りこけてしまいそうだった。

留子はそんな誠一郎の膝に飛び乗り、さらに頭を踏み台にし、階段に飛び移ると、さっさと自分の部屋に消えてしまう。フジタニの制服姿が見つかると思わぬので、私服に着替えるためだ。

後に残された誠一郎は、とぼとぼリビングに向かう。

「オヤジ、おかえりー。残業？ エライじゃん。オヤジはやれば出来る子なんだから24時間働いてもイケルんじゃない？」

そういえば3年前、中間テストの成績があまり良くなかった瑠奈に、『瑠奈はやればできる子だから、大丈夫』。と、同じ事を娘に言ったのだが、それを逆に言われるとは。

テレビを見ると、トラエモンがシズルちゃんに向けて、8連ミサイルランチャーを放ったところだった。

「懐かしいな、トラエモンじゃないか」

「これ、学校の先輩に借りたDVDなんだ。なんかさー12人もお姉さんがいて、そのお姉さん達がトラエモンマニアなんだって」

「へえ、パパの仕事先にもバイトの子で、お姉さんが12人いるって言ってた子がいたなあ。その子もトラエモンを毎週見てるって言

つてたぞ」

「えー超偶然じゃん！ 13人姉弟って、はやってんのかな」

「はは、もしかしてアルバイトの子と、瑠奈の先輩は同一人物なのかもな」

「んなわけないでしょ」

丸山田家の人間は相当鈍いらしい。

リビングのドアの前で、ピンクのキャミソールと、ジーンズに着替えた留子は、深くため息を付いたのだった。

「あら、どうしたの、ららちゃん？ そんな所で突っ立ってないで、中に入ったら？」

美雪に急かされ、リビングに入ると誠一郎はテーブルに着き、大きなトンカツをブラックホールの様な口に、放り込んでいた。

共食いである。

「こんな時間まで塾に行ってるなんて、偉いのね。ご飯まだでしょ？ 誠一郎さんと一緒に召し上がってね」

美雪の運んでくれた料理は、どれもこれも懐かしい味がした。関西出身の美雪が作るみそ汁は、白みそ仕立ての薄味だ。わかめと豆腐が口の中で踊る。

少し柔らかめのご飯と、キツネ色の衣を纏^{まと}ったトンカツ。外はサ

ツクリ、中はジューシーで肉汁が溢れ出している。

十分にお金が取れるレベルだと、素直に留子は思った。同時に、『そりゃこれだけウマイ飯をたらふく食べばこうなるわな』、と誠一郎をチラ見した。

幸せそうにトンカツを頼張る誠一郎は、一瞬、天使の様に見えてしまう。これから誠一郎を待ち受ける事態を考えると、留子は少し罪悪感を覚え、箸を止めてしまった。

30年前に起こった、仲の良い夫婦を切り裂いた事件。一方はヴァンパイアとなり、もう一方はヴァンパイアハンターとなった。それが吉村と藤内なのだ。

今日の吉村の件は、いずれ藤内にも言わなければいけない事だろう。だが、事態は大きく変化しつつある。

吉村の親であり、藤内を噛んだヴァンパイア。通称『T』、現段階で確認されている唯一のAランクヴァンパイアだ。

その『T』が次の日曜、日本にやってくる。それに対する戦力として、春川と同期ではあるが、腕利きの二人をすでに手配している。だが、まだ不安は拭えない。

さてよ、そういえば……春川と瑠奈のデートも次の日曜だった。春川には悪いが、デートは諦めてもらうしかない……が。

瑠奈の横顔を見ると、また少し罪悪感が湧き出てくるのだった。

夜空を見上げる、丸山田 誠一郎

食事を終えた留子は、誠一郎をベランダに呼び出した。

「お前の家族、いいな」

「はい？」

留子は三日月を見上げ、唐突にそう切り出した。一筋の風がベランダを吹き抜け、留子の髪を揺らす。

「30年前にな……それは仲の良かった夫婦がいたんだよ。新婚ホヤホヤで……二人の人生これからって時に、ある事件が起こった」

食後のデザートのリンゴを食べる手を止め、誠一郎は黙って留子の話に耳を傾けた。

「ヴァンパイアに噛まれたんだ。一人はすでに手遅れで、そのままヴァンパイアになっちまった。もう一人は、ヴァンパイアハンターになって、二人は敵同士さ。つい一時間程前までは、まぎれもなく家族だったのに。それが、一瞬で裂かれたのさ」

吉村と藤内の事なのだろうか？

「もしお前の娘の瑠奈が、ヴァンパイアに噛まれたら、どうする？
そのまま殺せるか？ それとも、ヴァンパイアハンターにするか
？」

「え……？」

留子の質問に誠一郎は言葉に詰まる。

「今日みたいに吉村の様な知り合いが、実はヴァンパイアでしたとか、あるかもしれない。もしかすると、これから先……親友や家族をその手にかける事になるかもしれない」

「なんでそれを、教えてくれなかったんです？」

誠一郎の手からリンゴがどさりと零れ落ちる。留子の白く細い肩を掴み、詰め寄った。

かわいらしいピンクのキャミソールに身を包んだ留子の上半身。その白く細い肩に、誠一郎の太い指が深く食い込むが、痛みに顔を歪めるでもなく、幼い顔には似合わない、どこか達観した表情で誠一郎を見つめていた。

「最初に言っただろ？ あんまおススメしないって。それに、なりたいて言っただのお前だぞ？」

「師匠は……自分の家族を殺せといわれれば、殺せるんですか？」

「——殺せる」

留子は美しくも恐ろしい笑みを浮べて、こう言った。

「私は元人間現在バケモノ。——ヴァンパイアハンターだからな」

もしも、もしも瑠奈が噛まれたら、自分はどうするだろう。ヴァンパイアとして処理できるか？ かといって、ヴァンパイアハンタ

ーにするのか？

ヴァンパイアハンターになったとしても、瑠奈に待ち受けているのは、辛く恐ろしい日々ではないのか？

「そうならない為に、お前が家族を守ってやれ」

「え？」

「私には守る家族は無いが、お前にはあるんだからな」

今も留子は笑顔ではあるが、それは先ほどとは違い、慈愛に満ちた母の様な笑顔であった。誠一郎は留子の肩から手を離し、留子の次の言葉を待った。

「この街のヴァンパイアを全て殲滅^{せんめつ}するんだ。無論、私も、春川も、藤内も力を貸す。お前がヴァンパイアに噛まれたのは私の責任でもあるからな……。徹底的にシゴキ上げて、戦闘術のなんたるかを叩き込んでやる」

『ららちゃん、お風呂沸いたよー』

唐突に瑠奈の声が響き渡る。

「おっと、お呼びみたいだな。大丈夫、お前はやればできる子だ。私が保証してやる。だから、明日から覚悟しておけよ」

留子は”ららちゃんモード”に変化し、とたとたと階段を駆け下りていった。

誠一郎はリングを拾い上げ、一人呟いた。

「とんでもないところに再就職しちゃったな……」

夜空を見上げる誠一郎の背中からは、疲れ切っているものの、朝、家を出た時以上に家族を守る使命感で満ち溢れていた。

夢見る中年、丸山田 誠一郎（前書き）

登場人物紹介

まるやまだ せいいちろう
丸山田 誠一郎

主人公。聖水とお茶を間違えたり、娘の声を『娘のそっくりさんの声』と聞き間違える等のお茶目さん。

本人は気付いていないが、吉村との戦闘中にヴァンパイアと同じ紅い瞳を
一瞬垣間見せるなど、実は謎がある様子。

たなか とめこ
田中 留子

緑茶でプリンを食す、変わり者のヴァンパイアハンター。
ヴァンパイアハンターの資格制度を制定したのは彼女で、テキストなどを
研修生に高額で売りつけて懐を潤している。

はるかわ ゆうこ
春川 優人

杭打ちを専門とするヴァンパイアハンター。
なぜかいつも、ちくわを常備しておりマルちゃんの餌付けに成功している。

杭打ち検定準一級。それ以外は5級という、偏った実力の持ち主。

夢見る中年、丸山田 誠一郎

誠一郎は海を泳いでいた。

浮き輪いらずのお腹でぶかぶかと浮かんでいる様は、泳ぐと言うよりは流されている、と言ったほうが正しいだろう。しばし波に揺られていた誠一郎であったが、やがて小さな大陸が目の前に見えてくると、歓喜の声をあげた。

その大陸は、茶色で何層も重なっており、先端部分は白く脆もろそうであった。

誠一郎は早速、茶色く脆い大陸に上陸すると、おもむろに地面を引きちぎり、かじりだした。口の中一杯にチャーシューほうじゅんの芳醇な味わいが広がってゆく。

ふと、地平線の向こうに目をやると、メンマの島やネギのさんご礁がとんこつ醤油のスープの海に浮かんでいた。

海底には細く白い麺が見える。

「ここは天国だ」

誠一郎にとって、天国はお花畑ではなく、ラーメンの世界なのかもしれない。

「起きろ、マヌケ」

突如、足場のチャーシューの大地が崩れ去り、誠一郎はスープの

海に落ちた。誠一郎は精一杯もがくが、浮かび上がることはできない。

留子の白く細い足が腹に直撃し、誠一郎は天国から帰還した。

「よだねなんか垂らして幸せそうだな、おい？ ハンバーガーの山で遭難する夢でも見たか？」

目を覚ますとセーラー服姿の留子が、誠一郎のお腹の上であぐらをかいていた。

ハンバーガーの山……ラーメンの海も良かったが、そちらも十分魅力的だった。

「おはよう、『マルちゃん』」

ニコリとせず、留子が苛立たしげに朝の挨拶をする。

誠一郎は自室のベッドから崩れ落ち、パジャマ姿でお腹を出し、大の字で寝ていた。どうやら、ベッドで寝ていた誠一郎を留子が蹴り飛ばし、その上に軽く飛び乗ったようだ。上半身を起こし、時計を見れば、午前7時を回っている。

「ららちゃん、オヤジ起こしてくれた？」

ドアの隙間から瑠奈が顔を出し、誠一郎の上に乗ったままの留子に、目が釘付けになる。

誠一郎が上半身を起こした為、腹に乗ったままの留子を抱きかかえる格好になってしまった。

「ちょ、ヘンタイオヤジ！　ららちゃんに何してんの！？」

瑠奈は留子を誠一郎から救出すると、軽蔑した目で誠一郎を睨み、階段を下りていった。

「まあ、なんだ。気にするなよ、後で私からフォロー入れといてやるから、な？　ああ、ホラ。キャラメルがポケットに入ってた。これでも食べて元気だせ、ホラ！」

玄関の前で留子が少し気まずそうに、背中を伊勢海老の様に丸めた誠一郎をなぐさめた。

留子からキャラメルの包みを受け取ると、誠一郎はそれを口の中に思い切り放り込む。懐かしい味が誠一郎の味覚に訴えかける———と思いきや、勢い良く口に放り込みすぎたせいで、喉の奥に引っかかり、むせ込んだ。

「まあ、酢昆布でも……やめとくか」

瑠奈は朝食を食べるとさっさと家を出てしまい、結局、弁解する機会を得ることができなかった。

留子としても、自分が原因で親子関係をさらに険悪にしまった事に、少し責任を感じている様であった。

「おはようございます、丸山さん」

声のした方向を見ると、吉村が昨晚の事などまるで何事もなかったかのような顔で、びっちりとスーツを着込み、朝刊を小脇に抱え

て丸山田家の前に立っていた。

「瑠奈ちゃん、どうかしたんですか？　かなり機嫌が悪いようでしたけど……まさか、恋人ができて、丸山田さんがそれに何か言ったとか？」

「はは、瑠奈を嫁にやる気はないんです。恋人なんてできたら……相手の男を太陽系の外までブン殴ってやりますよ」

留子は心の中で、誠一郎にブン殴られる春川を想像した。

「あれ、でも吉村さん。あなた何でここに！？」

瑠奈の事で頭が一杯だった為、昨日の出来事を思い出すのに少し時間がかかってしまった。

「私達ヴァンパイアとヴァンパイアハンターの戦いは、夜だけです。互いの存在を夜以外で見かけても、不戦条約みたいなのがあるんですよ。これは、かなり昔からあるみたいですけどね。私達の戦いは闇で行われ、闇に消えていく……ただそれだけの事です。から。そうでしょう、田中　留子？」

留子は吉村の目を黙って見ていたが、急に何かに弾かれる様に、叫びだした。

「吉村のお兄ちゃん、またねー！　ほら、おじちゃん、早く行こうよ。このままじゃ遅刻しちゃうよっ！」

急に留子が”ららちゃんモード”に変化し、誠一郎の腕を引っ張り駆け出した。交差点の角を曲がった辺りで、振り向き誠一郎の肩

を抱くように引き寄せ、内緒話をするかのようにひそひそと話す。

「危なかったな、美雪が玄関から出てきて私達の正体がバレるところだった。このままダッシュで美雪を振り切るぞ」

遙か後方で美雪が『お弁当忘れてるわよー』とドでかい重箱を両手に持って玄関で叫んでいたのだが、二人はそれに気付かないまま走り去った。

立ち上られ、丸山田 誠一郎（前書き）

登場人物紹介

藤内 彩華 ふじうち あやか

30年前に起こった事件で夫はヴァンパイアになり、また同時に自身はヴァンパイアハンターとなった。マルちゃんと名付けたのは彼女であるが、他の最終候補の肥満戦士ビッグマンとデブを考案したのも彼女であった。

吉村 よしむら

誠一郎のご近所さんで、体格のいいスポーツマンタイプのイケメン。藤内の夫であったが、30年前にヴァンパイアとなった。

誠一郎の妻、美雪を見つめる視線がアツイ。

やがて……？

丸山田 美雪 まるやまだ みゆき

誠一郎の妻。

美雪はスタイルもいい上に、料理の腕もプロ級。

ただし、生活費のほとんどを誠一郎の食費に裂かれている為。

丸山田家の家計を支える為パートに出ている。

立ち上られ、丸山田 誠一郎

留子はあきれ返っていた。

誠一郎に剣術の訓練を課したのだが、的である力カシを斬り付けるどころか、逆に斬撃の瞬間に、剣をヘシ折ってしまったのだ。

銃を持たせてみても、練習用的ではなく、何故か留子の心臓めがけて弾が飛んでくるし、ステークを持たせれば、接近する前に疲れ果てて、その場で座り込んでしまう。

体術にしても、上段蹴りをやらせてみればギックリ腰になり、一時間は訓練を中止せざるを得なかった。もつとも、一時間でギックリ腰を回復してしまう誠一郎の回復力には驚かされるが。

薬品生成はまだやらせてはいないが、このままだと生成に失敗して、支部が丸ごと吹き飛ばされかねない。

「一億年に一人の逸材だよ、お前は」

留子は皮肉のつもりでそう言ったのだが、医務室のベッドで横たわる誠一郎は、それをお褒めの言葉と受け取り、『薬品生成頑張りますよ!』と大はしゃぎでベッドから飛び出した。

薬品生成で頑張られたら、間違えて反物質でも生成されて、この三合市が壊滅しかねない。

「丸山田、ちょっとおさらいも兼ねて、座学にしよう」

留子は苦笑いで、キラキラと少年の様に目を輝かせる誠一郎を、ベッドの上に落ち着かせた。

「そういえば師匠、昨日、吉村さんが春川くんの事を杭打ち士^{ペネトレーター}って呼んでいたんですけど、それってなんですか？」

「ああ、ステーキを持って前線で戦う者をそう言うんだ。他にも、藤内の様な剣を扱う者は剣術士^{スラッシャー}。私の様な、銃器を扱う者は銃士^{ガンナー}。体術をメインとする者を体術士^{グラップラー}。薬品生成を主に扱う者を学士^{ドクター}」

「じゃあ、私は何が向いていますかね!？」

キレイな目で留子を見つめる誠一郎は、多少後退した生え際からの反射光もあるとはいえ、お日様の様に眩しかった。

誠一郎に向いているといえば……^{フードファイター}大食い王とか、^{メタボリックシンドローム}肥満体型くらいしか、思い浮かばない。後は動^{ノロマ}く^{ノロマ}く^{ノロマ}くらいだろうか。

「お前の未来を決めるのはお前自身だ。自分に自信を持って前に突き進め。そうすれば、必ず道は見えてくる」

「はい! はい!! 師匠!!」

留子の言葉に感動したのか誠一郎の目はキレイを通り越して、黒く濁っていた。

「って、もう12時か。昼飯の時間だな……ちょうど株主優待券もあるし、ここに連れて行ってやるよ」

留子が差し出したのは、最近有名なハンバーガーのチェーン店『デスバーガー』のチケットだった。『死ぬほどウマイ』のキャッチコピーで一躍有名になり、連日満員で誠一郎もその味を未だ堪能していない。

「たまには私がおごつてやる。死ぬほど食っていいぞ」

留子は知らなかった。その言葉が破滅への引き金となる事を……。

俺の胃袋は宇宙だ、丸山田 誠一郎

デスバーガー三合店の前で、留子は息を呑んだ。嫌な汗が留子の髪を濡らし、汗でじわりと背中にブラウスが張り付く。

アルバイトの女子大生達が、こちらへ向けている視線が冷たい。

店内では、店長と目される男性が一心不乱に頭を下げまくっており、客はブツブツと文句を言いながら帰っていった。

そして、お昼時であるというのに『今日の営業は終了しました』というプレートがドアにかけられている。

「どうしたんですか師匠？ それにしても、チーズデスバーガーもチキンデスバーガーもどれも絶品でしたね！」

フライドポテトの袋をゴミ箱に捨てた誠一郎が、満足げな表情で、誠一郎の腹部と対照的に、やせ細った財布を呆然と見つめる留子に語りかけた。

空気と私の懷事情を読み、このボケ！ と留子は心の奥底でキレた。公衆の面前で汚い言葉を使いたくは無いので、ギロつと誠一郎を睨みつける。

「あ、すみません……師匠の事も考えずに……」

解っていればまだいいのだ、留子は少し心を落ち着かせた。

「プリンパイ、23個残ってたんですけど、全部食べちゃいました」

天使の様に誠一郎は幸せそうな笑みを浮べたが、留子は悪魔の様な笑みを誠一郎に返した。

留子は滅多に見せない気弱な表情で、デスバーガー三合店を誠一郎と共に立ち去り、駅前のバス停のベンチに前のめりになって倒れこんだ。

店の全食料を喰らい尽くした誠一郎……やはりこいつに向いてる
フードファイター
のは大食い王だろう。

ブラウスの胸ポケットに強引にねじこんだ領収書を取り出し、仰向けになってそれを両手で天に掲げる。そこには、ファーストフードでランチした金額とは、とても思えないような額が記載されていた。中古の原付が一台買えるのではないか？

株主優待券を使ったにもかかわらず、誠一郎の飼育費がこれだけの金額になるとは夢にも思わなかった。領収書の中身を適当に備品代とかにして、なんとか経費で落としてしまおう。後で藤内に何か言われるかもしれないが……。

「あれ、師匠の携帯。鳴ってますよ？」

ショックすぎて気が付かなかったが、留子の携帯は着信中であった。

「ああ、私だ。ん？ 道に迷った？ そうか、わかった。人を寄越すからそこで待ってる。場所は……たこ焼き屋イカちゃんの前か、わかった」

たこ焼きという単語に誠一郎の胃袋が反応する。

「新しいヴァンパイアハンターが、今日うちに来ることになったんだが、どうも道に迷ってしまったらしい。イカちゃんの前で待ってるらしいから、お前行ってきてくれないか？」

「喜んで！」

誠一郎は、新しい仲間ではなく、たこ焼きを胃袋に迎えるため走り出した。

何で今の突進力を、ステーキの実技の時に活かせないのか、と留子はすでに小さくなった誠一郎の背中を視界の端に捉え、大きくため息をつく。

イカちゃんは大玉のたこ焼きで、少々値が張るがふんわりした生地と、コクのあるオリジナルソースと、鮮度抜群のタコを使っているので、誠一郎の中では100点中89点の高評価だった。

「マスター、いつもの頼むよ！」

「おう、セイちゃんやないか！ 昼飯時やのにたこ焼き？ オタクも好きやね」

いつものやりとりの末、イカちゃん特製たこ焼きを受け取り、早速誠一郎は至福のときを迎える——はずだった。

「うん、これは……まあまあだね。僕の口には合わないけど」

爪楊枝の先には、すでに愛しいたこ焼きはおらず、高級そうなス

「ッを着込んだ男が口をもぐもぐと動かしている。

「丸山田くん、君は相変わらずだねえ」

たこ焼きを盗んだ犯人は誠一郎も良く知る人物であった。

「渡辺部長……」

誠一郎をリストラした元上司であり、同期の渡辺わたなべ 義久よしひさ。

「また同じ職場になるだなんて、今度も僕にリストラさせないよう
に、頑張ってくれたまえよ？」

もう一人の50代参戦、丸山田 誠一郎

同じ職場……と言うことは、渡辺が留子の言う、ヴァンパイアハンターなのか。

「ああ、君は何も知らないんだったねえ。僕は1年前、取引先との打ち合わせの帰りに、ヴァンパイアに噛まれてしまってたね。その時、田中氏に助けられて、ヴァンパイアハンターになったんだよ。いや、あの時は携帯を踏み潰されて大変だったよ」

まさか、渡辺もギャバ嬢の電話番号や、エッチなメールマガジンをその日失ったのだろうか？ 途端に誠一郎は渡辺に近しいものを感じ、同情の思いをよせた。

「大事な取引先の電話番号や、業務メールが記憶されてたのに。でも番号はちゃんと頭に入っていたし、メールの内容も思い出せたから、問題なかったんだけどね」

どうやら誠一郎の推理は外れたようだ。

渡辺は黒く、ふさふさとした髪をかき上げた。

誠一郎より年が4つ上なので、56歳のはずなのだが、細身の体と清潔感のあるオールバックの髪型の渡辺は、苦味ばしったイイ男と呼ぶに相応しい。

「さあ、それじゃ丸山田くん。案内してくれたまえ。いや、マルちゃんって言ったほうがいいのかな？」

嫌味で彩られた笑顔で渡辺は誠一郎に微笑み、アゴで合図をする
と、誠一郎を先頭に歩き出した。

歩き始めて5分ほどして、人気の無い裏通りに差し掛かった時、
一組の男女とすれ違った。男女といっても、車椅子に乗った初老の
男とそれを後ろから押す、小学校高学年くらいの女の子だ。

銀色の髪を後ろに束ね、キレイに整えられたヒゲは、まさしく老
紳士と呼ぶにふさわしい。澄んだ琥珀色の瞳は、前を見据え、意思
の強さを表しているかのようにだった。

女の子のほうは、長い金髪をサイドテールに結んでおり、顔の左
側で歩く度にぴよぴよこと髪が動く様子は、不思議なかわいらし
さがあった。

海外旅行中の白人のおじいちゃんと孫娘……そんな感じだろうか？

昔は瑠奈にも、あの女の子の様に無邪気でかわいらしい時期があ
ったものだ。だが、高校生ともなれば難しい時期なので、親子の距
離は今のが普通なのかもしれない。

「すみません、ちょっとよろしいですか？」

老人が車椅子を止め、流暢な日本語で語りかけてきた。まさか英
国風老紳士から、日本語が飛び出すとは夢にも思わなかったので、
誠一郎は『イングリッシュ、ノーサンキュー！ デイス イズ ア
ペン！』と言って、渡辺を指差した。

ちなみに、渡辺はペンではない。

「おお、ではペンさんとやら。このあたりに、ベリーデリシヤなジャパニーズフード。TAKOYAKIのお店を知りませんか？」

おそらく、イカちゃんの事であろう。

「それならば、ここをまっすぐに行つた所にありますよ」

ペンさんが優しく丁寧に老人に道を教えた。

「ありがとう、ペンさん。それにしても、最近の日本人の名前は変わつとりますなあ。しかしペン……いい名前だ。ひ孫ができたらぜひ、あなたと同じ名前を付けたいものだ」

「はは、それは光栄ですねえ」

渡辺は品の良い涼しい笑みを浮べているが、内心、誠一郎の語学力のなさに腹を抱えて笑い転げそうだった。

「お爺ちゃん、早く、行きましょう。TAKOYAKIが逃げちゃうわ！」

「これ、エリー。そんな早くおさんでくれ！ 危ないじゃないか。それではお二方、ごきげんよう」

エリーと呼ばれた女の子は、元気よく車椅子を押し出し、あつという間に誠一郎達の視界から消えたのだった。

「気になりますねえ、さっきの女の子」

渡辺はイカちゃんの方に体を向け、腕組をし何やら思索してい

る。56歳を過ぎた渡辺は今でも独り身である。今の発言と照らし
合わせると……渡辺はロリコンなのではないか、と誠一郎は閃いた。

趣味は人それぞれ、丸山田 誠一郎

「渡辺部長、ロリコンだろうとなんだろうと、それは個人の趣味だ
と思います」

「はい？」

誠一郎はストレートに思いを打ち明けた。

「確かにあの女の子はかわいらしかった……同じ男としてそれは解
ります！ でもせめて！ あと10年は待ってあげてください！
その……まだ早いと思うんです」

「丸山田くん、君は相変わらずバカだねえ」

渡辺は嫌味一杯に微笑むと、誠一郎に詰めより肩をすくませた。

「へ？」

「違うよ、あの女の子、どこかで見たことがあるんだ。それも最近
にね」

渡辺はそつち系の雑誌でも購読していたのだろうか。というか、
エリート社員のウラの顔を知った気がして誠一郎は少し引いた。

「ダメだな、思い出せない。いつまでも考えても仕方ないねえ。丸
山田くん、引き続き案内頼むよ」

「は、はあ」

誠一郎達がその場を立ち去った後、老人と少女は無事にイカちゃんにたどり着き、目当ての物を手にいれ公園のベンチで舌鼓をうっていた。

「これがTAKOYAKIなのね、不思議なテイストだね。やつぱりお父様がお生まれになった国、日本。とってもワンダフルね！あなたもそう思わない、アーノルド？」

少女はベンチから、車椅子に腰掛けたままの老人に爪楊枝の先をちらつかせ、尋ねた。夏の日差しにも負けない無邪気な笑顔は、年相応の少女といえるが、どこか老人に対して威圧的な様に見える。

「自分もそう思います、お姉さま」

老人は表情を変えずにそう答える。

「ところでこの格好、どうかしら？ 日本の文化MOEを意識してみたんだけど、どう、萌える？ 萌えるなら萌えて良いわよ。萌えないならあんたの顔面が燃えるけど」

ふんだんにフリルが使われているピンク色のワンピースに身を包み、少女はベンチの上でワンポーズとって見せる。その趣味をお持ちの大きなお友達が目撃したら、まさしくシャッターチャンスであろう。

「萌えます、お姉さま」

老人は無表情のまま虚空を見つめ、壊れたロボットののように、口から音を発した。

少女はその反応がすでに予測済みだったのか、すぐにベンチに座りなおし、またたき焼きに手を出した。

「……もういいわ。それより、お父様の生まれた土地。お父様の吸っていた空気。ああ……まるでお父様と一体になった気分。お父様を全身に感じるわ、あなたもそう思わない、アーノルド？」

少女はベンチに腰掛けたまま両手を広げ、恍惚の笑みを浮かべる……が、それとは対照的に、老人は相変わらず車椅子に座ったまま、虚空を見つめ、無表情であった。

「自分もそう思います、お姉さま」

また同じ様に、そう答えた。

「あいつかわらず、つまらないヤツね、お前。弟でもなければ、血を全部抜いちゃうとこだよ？ 自然を装うために、おじいちゃんや孫娘やってるけど全然楽しく無いわ。……まあ、いいわ。これもいつもの事だし。それより、ミツヒコの家この辺りなんでしょう。突然おしかけたりしたら、驚くかしら？」

少女は爪楊枝を口にくわえ、行儀悪く足をブラブラとバタつかせているが、老人はそれを咎めようとはしない。なぜならば二人の関係は姉と弟だからだ。

「事前に連絡は入れておきました。もうすぐこちらに来るか……」

二人が話している間に、公園の前に一台の車が停まり、中からスーツをビッチリと着込んだ、20代半ばのスポーツマンタイプの男

が出てきた。

——吉村である。

「ミツヒコだわ！」

少女は吉村に気付くと駆け寄り、吉村の胸に飛び込んだ。

老人も車椅子を車の方へ走らせる。

「お久しぶりね！ ミツヒコ！ ちゃんと血は搦^{くわ}ってる？ あなたまだ子供なんだから、もっと大きくならないとね」

「エリーお姉さま、それにアーノルドお兄さま。お久しぶりです……10年振りですかね？」

エリーは吉村から離れると、後ろでに腕を組み、嬉しそうに公園の時計の下までスキップして、吉村に振り向いた。

「ごめんね、ミツヒコ。急に押しかけちゃって……あなたの顔を見に来たというのも、理由の一つなんだけど、お父様をお願いされちゃったの」

「理由はだいたい察しがつきますが……『小泉』の件ですね？」

「ミツヒコは偉いのね。バカで無口なアーノルドとは大違い。あなたは、私の自慢の弟よ」

エリーはジロっとアーノルドに目を向けたが、すぐに吉村に視線を戻す。

「勢力の統一……それなくして私達の存続はありえないわ」

口の爪楊枝を右手でつまみ、それを後ろの時計に向かってエリーは放った。時計に爪楊枝が命中し、ガラスを突き破り、針の中心を深く射抜く。

「私達『丁』に逆らう他のヴァンパイア勢力を完全に叩き潰しちゃいましょう」

エリーは紅く染まった瞳のまま、吉村に微笑んだ。

人生イロイロヴァンパイアもイロイロ、丸山田 誠一郎

誠一郎と渡辺は協会の事務所に到着すると、早速留子の下へ向かった。

留子は渡辺と二人きりで話があるとの事なので、誠一郎はテキストを読み、大人しく講義室で自習する事にした。

『楽しく学べるヴァンパイアの生態』を開き、パラパラとページをめくってみる。少し先の部分を予習しておこうと思い、テキストの25ページを開いた。

” 3章 ヲヴァンパイアの家系について ヲヴァンパイアは子を作り、その子がまた子を作ります。そうして段々と形成されていくのが、ヴァンパイアの家系です。ヴァンパイア最大の勢力は『T』と呼ばれる家系で、これは家長であるAランクヴァンパイア、『T』の名を冠しています。

『T』は、三人の強力な子供達を中心に、全世界に勢力を伸ばしつつあります。

アジア最大の勢力で、日本に拠点を置く『小泉家』や、中国は上海の『シェン家』なども主だったものですが、彼らは決して協力しあう事は無く、勢力争いを絶えず続けており、ヴァンパイアも一枚岩ではないようです。”

突然テキストが宙に浮き、誠一郎はその行方を追った。

「丸山田くん、お勉強ですか？ いやあ、感心感心。少しでも、食

欲以外に取り柄を持たないとね」

渡辺がテキストを取り上げ、バカにした口調で誠一郎を見下していた。

「返してください、渡辺部長！」

「まあ、そうカリカリしないしない。頑張る君にご褒美を持ってきたんだから」

テキストを誠一郎の机の上に放り投げ、渡辺は懷からビーフジャーキーの袋を取り出し、誠一郎に手渡した。

「それでも食べて、研修頑張るなさい。私は少し会社に戻らないといけないので、また後でね」

それだけ言って渡辺は立ち去っていった。

少し腹が立っていたが、少し腹も減っていたので、誠一郎はビーフジャーキーを1つ口にくわえると、さっきまでの気分が180度回転し、幸福感に包まれる。今まで食べたどのビーフジャーキーよりも、おいしい。

「丸山田、もう1回射撃の訓練だ。準備して射撃場に来い、私も後からすぐに行く」

講義室のドアを開け、留子が顔を出した。

誠一郎は慌てて席を立ち、講義室を飛び出すと後に残されたのは、留子とビーフジャーキーの袋であった。

留子はビーフジャーキーの袋を手に取り呟いた。

「何だアイツ？ ペットでも飼うつもりなのか？」

ビーフジャーキーのパッケージには『おいしいワンちゃんのエサ
く大型犬用く』と記載されていた。

やればできる子、丸山田 誠一郎

留子をあきれ返っていた。誠一郎に射撃の訓練を課したのだが、練習用の的全ての中心部に穴がぽっかりと空き、全弾が命中していた。

「なんだこりゃ」

それが留子の素直な感想だった。

的を狙わせて留子に弾が来るなら、逆の発想で『私を狙ってみろ』と言って留子を狙わせたら、誠一郎は正確な射撃を披露してみた。そして今、ビッグデスバーガーの写真を貼り付けた力カシを、誠一郎のステーキが貫いた所だった。まさしく神速の突きである。

「春川の言うとおり、本当に顔とそれ以外も冗談なのか、あいつは……」

だが、これで誠一郎の操縦方法はわかった。うまくすれば、遠近両方こなせるヴァンパイアハンターになるかもしれない。かなり特殊な扱いをしなければならぬが……。

「今日はここまで、だな」

午後5時のチャイムが鳴り、二日目の研修が終了した。

「よ、トメちゃん。本日もご機嫌麗しゅう」

春川が颯爽と演習場にあらわれ、一瞬で留子との距離を詰めると、

留子の右手の甲にキスをした。

「ぶっ！」

——が、キスの瞬間に留子の右手の甲が春川の口を直撃し、春川は盛大に空中を舞い、地面に墜落する。

「お前は地面とキスでもしてろ」

留子は消毒用アルコールで手の甲を拭くと、さつさとドアを開け、私設ゲームセンターに消えた。

「春川くん、大丈夫かい？」

誠一郎は春川に駆け寄り、手を差し伸べた。

「あーマルちゃんじゃん。オレ、てっきりタヌキの置物かと思ってたよ。いるならいるって、言つてよね……あたた」

春川は誠一郎の手を借り、立ち上がると、口元をさすりながら、誠一郎の顔を見て言った。

「今日はこれからどーすんのかな？ 今日からブチョーとインコちゃんがかこち来るって聞いてさ。ガッコ終わって速攻飛んで来たのに」

ブチョーというのは、おそらく渡辺の事であろう。インコちゃんというのは、また別のヴァンパイアハンターであろうか？

「オレ、ちょっち聞いてくるわ」

春川はさつき盛大に吹っ飛ばれたのに、元気に飛び起きるとさつさとドアの向こうに消え、ゲームセンターで格ゲープレイ中の留子を見つけると、春川は駆け出した。

「トメちゃん、今日は何するの？ マルちゃんの散歩？ それともマルちゃんの調教？」

「んー。ああ、春川か。今日は丸山田は藤内と組ませる事にした。昨日みたいに聖水忘れて、パニックられても困るしな」

留子はゲーム画面でキャラクターを選択し終わると、春川の方に顔を向けた。

「えーじゃあ、オレはどうすんの？ 腕立て1万回？ でも、トメちゃんの上でやっていいなら100万回やっちゃうけどね！」

てへ、と舌を出した春川に留子は気にもせず、話を続ける。

「お前、杭打ち検定1級取る気は無いか？」

二人の夜、丸山田 誠一郎

杭打ち検定1級は、超難関の狭き門だった。そもそも扱いが難しく、人を選ぶ杭打ちで2級以上を取得している者は少ない。

大抵のヴァンパイアハンターは、剣術か体術を接近戦のメインとして覚え、補助的に銃器や薬品生成を覚えるのが一般的だった。というか、過去に杭打ち検定1級を取得した者は未だいないのだ。

「お前は杭打ちの才能だけはあるからな。やるっていうなら、手取り足取り懇切丁寧に教えてやる、個人授業でな」

個人授業……その素晴らしい四文字の言葉に、春川は心を躍らせた。

「ヤリマスヤリマス！ でも、その後は保険体育も個人授業してほしいかな！ 人体の構造とか！」

『人体というか、トメちゃんのを』と言つつもりだったが、携帯から電子音が鳴り、春川は口を止めた。

春川と留子がVHナビを立ち上げると、Dのマークがそれぞれ離れた所に表示されていた。Dランクが二匹……今日は中々の上客の様だ。

「今日も来たか……春川。印藤はまだ来てないんだっただな？」

「あーインコちゃん、まだ来てなかったよー。ブチヨーもまだみただし」

「丸山田と藤内を食堂に連れて来い、渡辺はもう5分もすればここに来るはずだ。印藤にはこのまま直接現地に行ってもらうか」

「あいよ！」

春川は誠一郎達を呼びに行くため、演習場に向かって走った。

「吉村以外の勢力……『小泉家』の奴らか。元気な奴らだな、この前あれだけ痛め付けてやったのに」

留子はVHナビを終了させ、食堂に向かった。

——10分後。

食堂には、誠一郎、春川、藤内、そしてついさっき戻ってきた渡辺と留子を合わせた5人が一つのテーブルに着いていた。

「今回はDランクヴァンパイアが二匹だ。実力的にいつてお前達ならそう苦戦する事も無いだろう。今回は丸山田、藤内。渡辺、印藤の2チームでそれぞれ対処してもらう」

誠一郎は内心、ほっとした。春川の腕は認めるが、昨日の『愛娘瑠奈の声までそっくりさんな彼女』と春川のラブコールは、聞いていて気持ちのいいものではなかったからだ。

春川の彼女が、電話の向こうでバカみたいに笑っているのを聞いて、きつと父親も苦勞しているに違いない、と同情していた。だが、藤内ならばそんな事は無い。

「田中さん、僕ならば一人で十分ですよ。印藤くんを藤内くん達に付けて上げてください。こんな大きなお荷物を抱えてちゃ、いくら藤内くんでも厳しいでしょう?」

と、渡辺はニヤリと憎らしい笑顔を誠一郎に向け、爽やかな笑顔を藤内に向けた。

(春川くん、渡辺部長はどんな資格を持ってるんだい?)

渡辺の自信満々な態度が気になったので、隣の春川にひそひそ声で聞いてみた。

(あー。確か、体術の4級と剣術の4級。それ以外5級じゃなかったっけ? キャリアはオレとかわんねーよ)

なんだ、大したことはないではないか。

「まあ、いいだろう。ただし、言ったからには結果を出すことだな。危ないと思ったら連絡を寄越せよ?」

「ほうれんそうは社会人の基本ですからね、任せてください。それよりも僕、マルちゃんの事が心配でなりませんよ。今度は聖水どころか討伐任務すら忘れて、お家でお腹一杯ご飯を食べているような気がしてねえ」

「大丈夫です。マルちゃん、今日は訓練で大活躍だったみたいですし、いざとなれば私がマルちゃんの盾になって守りますから。行きましょう、マルちゃん」

ニコッと眩しい笑顔のまま藤内は、皆に一礼すると先に外に出て

行った。

誠一郎も後を追いつ、外に出るとVHナビを起動し確認する。反応のあった場所の一つを確認すると、誠一郎は絶句した。

目標のヴァンパイアがいる地点は、大人の男女が二人で入っているホテルがいっぱいある場所だったからだ。

「マルちゃん、行きましょう」

笑顔の藤内に腕を引っ張られ、誠一郎は走り出した。

夜の蝶にご用心、丸山田 誠一郎

三合市は山に囲まれており、まだまだ未開発の土地がある。その山の方に足を運ぶと、ピンク色のハデなホテルや、きらびやかなネオンがこうこうと輝き、そこだけまるで異世界のような感じがした。

『天然温泉』の看板を掲げた建物の前で、誠一郎達は足を止めた。キヨロキヨロと360度フルに首を回転させ、周囲を警戒する。決してヴァンパイアを探しているわけではない。

藤内の様な、若くてキレイなオネーチャンと、こんな場所にいるのが、知り合いにでもバレたらことだからだ。それが美雪の耳にでも入るものなら、おそらく丸山田家は崩壊するのではないか。

幸い、周囲には誠一郎と藤内しかないようなので、今のところは安心のようだが。

「このホテルの中みたいですわね、さあ、行きましょう、マルちゃん」
行くんですか？ と口に出す前に、甲高い声が誠一郎の背中に刺さった。

「セイちゃあああん！」

後ろを振り返ると、以前、仲良くなつて電話番号を交換した『キヤバ嬢ハルヒちゃん』が手を振っていた。

誠一郎に駆け寄ると、誠一郎の左手を両手で抱え、ピンクのワンピースから露出している肌を甘えるように擦り付けてくると、香水

のいい匂いが誠一郎の鼻をくすぐった。

こんなところ誰かに見られたら、ヤバイ。

「もう、どないしたん？ 一度も電話かけてくれへんし、お店にも顔出してくれへんし。うち、めっちゃ心配したんやで？ ンゝあれゝ何なん、そのコ？ 別の店のコなん？」

邪魔者をみつけて、ハルヒちゃんの機嫌は急に悪くなった。藤内を見るハルヒちゃんの顔が怖い。

だが、藤内はそれに臆することなく、ハルヒちゃんに近づいていく。

急に左手にかかっていた体重が消え、誠一郎は何が起こったのか一瞬解らなかった。

「見つけました」

気が付くと、藤内が剣を抜き、ハルヒちゃんの腹を貫いていた。

「ちょちょっと藤内さん、ハルヒちゃんになんてこと！」

「ナビを見てください、目標です」

VHナビを見ると、すぐ目の前にDの反応があった。キャバ嬢のヴァンパイアなんて信じられないが、実際に目の前に反応がある以上、認めざるを得ないのだろう。

誠一郎は、今度からは入るお店をちゃんと選ぼう、と思った。

ハルヒちゃんは紅い眼で誠一郎を睨み、誠一郎になにやら恨みの言葉を叫んでいるではないか。

誠一郎は恐ろしくなつて藤内の影に隠れるが、その巨体が藤内の華奢な体で隠れるはずも無く、横にはみ出した脂肪がブルブルと震えている。

藤内が止めを刺す為、間合いを詰めようとするが、ハルヒちゃんは誠一郎達を飛び越えてすり抜けると、風通しの良くなったワンピースを来たまま、山の方へと逃げていった。

器用に不器用、丸山田 誠一郎

「追いますよ、マルちゃん」

藤内は誠一郎の腕を掴み、外灯などほとんど無い薄明かりの中を駆けていった。やがて一本の電柱の前で少女が正座しているのが目に入り、誠一郎と藤内はそこで足を止める。

「あれ、あの女の子は……確か」

昼間出会った少女、エリーと呼ばれていた少女だ。

誠一郎はこんな所にか弱い少女を一人にすべきではないと思い、保護しようと近づいたが、藤内に右手で制され、それ以上進むことはなかった。

なぜなら藤内の目線の先には、少女の横でぐちゃぐちゃに引き裂かれ、赤に染まったハルヒちゃんのワンピースが捨てられていたからだ。

「こんばんは、ヴァンパイアハンターさん。コイズミのクソガキは先にいただいちゃったわ。にしても、クソまずいわよね。コイズミの血って」

口の周りには赤い糸の様な物が、エリーの胸元まで垂れ下がっており、それが本来の着ていた服の色を真っ赤に染め上げていた。ふんだんにフリルが使われているエリーのかわいらしいワンピースも、すでに昼間の様な面影はどこにもない。

「田中さんから聞いてはいました、『T』が動くかもしれない。でも、ここに来た目的は何なんです？」

藤内は銀色の剣の切っ先をエリーに向けて突きつけるが、エリーは表情を変えることなく、舌なめずりをして口の周りの血を舐めると立ち上がり、紅い瞳を現した。

それはまるで闇に浮かぶ、2つの紅い宝石のようで、魅入られたかのように誠一郎は目を放すことができない。

「お父様が来る前のお掃除よ。コイズミをぶっ潰して、お父様に頭をナデナデしてもらうの。ご褒美にかわいいブタのぬいぐるみでも買ってもらおうかしら。安心して、お父様から潰せと言われたのはコイズミだけだから。ガキンチョはお家に帰ってJ I D A I G E K Iでも見て、クソして寝なさい」

藤内の剣を握る手が、誠一郎にはより強く握り直したように見えた。

「マルちゃん、彼女は長女エリー……見た目は可憐な女の子ですが、Bランクヴァンパイアです。おそらく、さっきのヴァンパイアを葬ったのも彼女でしょう。決して気を許さないでください」

信じられないとは思ったが、留子の様な10代前半の姿のままヴァンパイアハンターになり、100歳を超える者もいるのだ。何より、エリーの紅く邪気に満ちた瞳が人外存在であることを証明していた。

誠一郎は覚悟を決めると、懐から拳銃を取り出し、いつでも撃てるようにスタンバイする。

「何？ やるっていつの？ せつかく見逃してやるって言ってるのに」

「マルちゃん、援護よろしくお願いします！」

藤内は剣を右肩辺りにまで両手で水平に持ち上げ、腰を落とし構えなおした。剣術検定基礎中の基礎の構え、『疾風はやての構え』だ。疾風の構えは、初手にて瞬速で突きを繰り出し、相手の出鼻をくじく攻めの構えである。

藤内は早々に勝負を付けるつもりなのだ。

藤内が疾はしる——その動きは洗練されていて、優雅に舞っているようにも見える。さらに流れるように、銀色の光が次々とエリーを襲うが、エリーは戦う気は無いのか鬼ごっここの様に逃げ回っているばかりだった。

誠一郎は銃を構え、狙いをエリー……ではなく、藤内につけた。昼間の要領でいくなら、エリーではなく、藤内を撃つつもりで引き金を引けば、当たるはず。

銀の刃を垂直に跳躍してかわしたエリー、そのタイミングを見計らって、藤内に向けて弾丸を放つ。

だが——。

弾は藤内の剣に命中し、へし折れてしまう。それを見たエリーが上空で腹を抱えて笑い出した。

「これが、日本のB O K Eなの？　ぶはははは！　自分の味方に向かつて撃つだなんて！」

藤内の顔は笑っているが、その視線は冷たい。

「マルちゃん、冗談は顔とそれ以外だけにしてくださいね」

赤い衝撃、丸山田 誠一郎

丸腰になった藤内は、拳銃を取り出し、エリーに狙いを絞る。

誠一郎もまた、拳銃を構えるが藤内に左手で制された。たった一言『邪魔です』と。

誠一郎は仕方なく、少し離れた電柱の影に移動し、ちくわをくわえて事の成り行きを見守ることにした。

「やっぱり、ダメなのかな……僕は……」

なんとなく、ちくわの袋に向かって語りかけるが、ちくわの袋は何も返してくれない。最後のちくわを取り出し、口に運ぼうとしたのだが、誠一郎の口は空を切った。

「お久しぶり、かわいいブタのおじさん。私、おじさんの事気に入っちゃった、このぶよぶよしたお腹、触りだしたら止まらないわね」

エリーは右手で誠一郎のお腹をさわさわと撫でていく。

誠一郎が抵抗出来ないところを見ると、けっこう気持ちいいのかもしれない。

「ちょっと、何をするんだい、やめてくれ！ 藤内さん、助けてー！」

誠一郎は情け無い声を上げて藤内に助けを求めてみたが、返事が無い。

「ああ、そこで寝てるわよー。やっぱ、剣が無いと何もできないのかしら？」

エリーがあごでしゃくった方向に目をやると、藤内はぐったりと倒れこんでいた。

万事休す……誠一郎はこのままエリーのおもちゃにされて、なぶり殺しにされるのだろうか？

誠一郎は目をつむり、覚悟した。若くてカワイイ女の子におもちゃにされるなら、いいか、と。

その一方で、ちょっと若すぎるんじゃないか？ などと誠一郎の頭の中で議論が始まっていた。議論は終了し、誠一郎の中で答えが出たのだが、結局その議論はムダに終わるのだった。

「ああ、ウゼーウゼー。なんで俺の担当区域が隣町の三合になるわけ？」

その声と共に、目の前にいたエリーが左方向に垂直移動した。さっきまでエリーに触られていたお腹が少し痛い。

どうやら、エリーが移動したのではなく、先ほどの声の主に誠一郎が蹴られて吹っ飛んだらしい、新しい敵だろうか？

藤内は起き上がり、蹴りを放った人物に向けて叫んだ。

「印藤さん、その人はヴァンパイアじゃありません、目標は目の前の女の子です！」

「ああ？ こっちの少女かよ……てか、俺好みでやり辛いじゃん。
あー、おっさん、蹴り入れて悪かったな！」

制服のスカートを翻し、左右に結った赤く長い髪を揺らして彼女はこう言った。

「一応自己ショーカイしとくか。印藤 いんどう 加奈子 かなこ。高1。趣味はゲーム。一応、ドクター 学士。まあテケトーによろしく」

誠一郎は、若くてカワイイ女の子に蹴られたなら、別にいいか、と思った。

廃人なんかには負けるな、丸山田 誠一郎

昆虫の触覚の様な左右に伸びた長い髪と、瑠奈や春川と同じ、近所の県立高校の制服に身を包んだ少女が、留子や渡辺が言っていた印藤のようだ。

白い半袖のブラウスは、だらしくスカートの上にはみ出ており、ボタンも上から3つほど外して、胸元がちらほら見え隠れしている。スカートにしても、丈は30CMくらいで、非常に嬉しい状態だった。

瑠奈と同じ高校1年生というが、もしかしたら、瑠奈の友達なのかもしれない。

ギロリと鋭い視線を向けられて、誠一郎はチビリかけた。切れ長の瞳はその視線だけで、生物に何らかの精神的ダメージを与えることが出来るだろう。

実際、印藤に睨まれた誠一郎は、蛇に睨まれた蛙ならぬ、蛇に睨まれた豚だった。食物連鎖を無視して、豚すらも丸呑みしかねない。

「やつべえ、このおっさんの腹、マジ蹴り甲斐^{がい}ありすぎ！ サンドバッグみてえ、後でもう一回蹴らせるよな」

それにしても、この口の悪さはどうだろうか。せめて、『サンドバッグみたいに蹴り甲斐のあるお腹ですね、後でもう一度蹴らせもらってもいいですか？ キヤハ』くらいは言えないのだろうか？

蹴られるのは一向に構わないのだが、と誠一郎は若者の年長者に

対する扱いに鼻息を荒くした。

「うるさいガキね、そのおもちゃは私の物よ、横取りするっていうのなら、その長い髪の毛全部引っこ抜いて、ホウキにしてプレゼントしてあげるわ。まあ、ジャパニーズD O G E Z Aで許してやつてもいいけど?」

エリーは印藤を見上げ、紅い瞳で睨みつけた。

「わは! この幼女Bランクなのかよ。てことは、見た目+40歳だから50くらいのババア? マジ引くわあ」

VHナビを見た印藤が驚きの声を上げるが、その言葉に反応したエリーの額に、血管が浮いて出てきたのが、遠目からでも誠一郎には解った。

「このガキ……乳臭い分際で……」

印藤はウサギのストラップの付いた学生カバンから、ボールの様な物を取り出し、エリーの足元に放り投げた。

——瞬間、エリーの足元でボールが弾け、中から液体状の物がエリーの全身を濡らした。

「^{ドクター}学士ってネットゲでいうと、バッファードデバッファードを兼ねてんだよね。その中身、聖水の濃度を倍にしたヤツなんだけど、聖水爆弾でどこ?」

聖水爆弾をまともに浴び、エリーは少し弱ったように見える。

「彩華あゝ予備の剣一応持つてるから、貸したげる」

印藤は藤内に向けて剣を放り投げると、藤内はそれを受け取り、銀の刃を引き抜いた。

「今日、ネトゲのイベント初日なんだよね、さっさと終わらせちゃつてくれる？ 廃人ニート共に先こされたら、ヤダし」

「もちろんです」

と、藤内は笑顔で答え、『レア武器一個が交換条件ですけどね』と、付け加えた。

目にはアントシアニン、丸山田 誠一郎

藤内は闇に紛れると、闇から闇へと身を移し、次第にエリーとの距離を詰めていった。

誠一郎は藤内の姿を目で追う事は敵わず、藤内が闇の中、風を切って進んでいるのだと言うことくらいしか認識できない。

エリーは依然ずぶ濡れのままで、肩で息をしながら、闇から迫る銀の牙を警戒し続けていた。

聖水爆弾の効果は絶大らしい。

「初めて使ったんだけど、ちゃんと効果でてるみてーね。よかったわ」

と、印藤は懷から携帯を取り出しブラウザゲームを始めた。戦いそのものにはまったく興味が無いらしい。

「えーと、加奈子ちゃん？ 藤内さん戦ってるけど、放っておいていいの？」

またギロリと鋭い視線を向けられて、誠一郎はチビリかけた。いや、半分チビったのかもしれない。

「ウゼーウゼー、俺は今ゲームしてるの、見て分かれよ。目ん玉くりぬいて豚のエサにすんぞ？ あ？」

最近の女子高生は怖い、と誠一郎はお腹の脂肪をブルブル震わせ

怯えた。

大人しく黙っていればかわいらしいのに、まったくもったいない。

ふと、藤内の方に目を戻すと、銀色の光が一瞬光ったのが見えた。

エリーはそれを右手で防御したようだが、剣を弾くほどの硬い皮膚を有しているのだろうか？

そんな事を考えているうちに、銀色の光が1度、2度、3度とエリーの体の回りで煌いた。それに合わせて、エリーのワンピースもところどころに、切れ目が入り、細かい切り傷が大量にできている。

あまりの高速に誠一郎は目を回してしまい、『帰ったらブルーベリーを大量に食べて、アントシアニンを摂取しよう』、と心に決めたのだった。

「こそこそセコイ女ね、さっさと私を殺して御覧なさいよ？」

エリーは傷つきながらも、未だ余裕の表情であった。

「彩華まだあ？　たいくつで死にそーなんすけど？　ババア幼女もそう言っただし、さっさとやっちゃえば？」

携帯を高速で操作しながら印藤は、藤内に向けて不満を漏らした。

なら手伝ってやれよと思うが、これ以上睨まれたくないので、誠一郎は口を貝の様に閉じた。

「誰が、ババア幼女だ!？」

エリーがブチ切れて印藤に注意がそれた瞬間を、藤内は見逃さなかった。藤内の冷たい視線と銀色の牙がエリーを薙^ないだ。

「あ……あ……」

真一文字にピンクのワンピースが裂かれ、エリーは崩れ落ちる。まるで、西洋人形の様にエリーは倒れたまま動かない。これで、勝負は付いたのだろうか？

誰か忘れてませんか、丸山田 誠一郎

その頃、同じ時間、違う場所で渡辺 義久も戦いを繰り広げていた。

VHナビに従い現場にやってきた渡辺を出迎えたのは、大量のEランクヴァンパイアの群れだった。

夜の廃材置き場に似つかわしくない、スーツ姿の男と紅い瞳の少年達。一見すると、不良グループにからまれた運の悪いあわれなおっさんと錯覚するが、鋭く研ぎ澄まされた瞳と、口元の薄笑いは『搾取する側』の証とも言える。

その薄笑いが気に入らなかったのか、少年ヴァンパイアの一人が罵声を浴びせた。

「おいおい、こんなおっさん寄越すなんて、ヴァンパイアハンターも人手不足かあ？ 加齢臭がして臭くてたまらねーぜ」

すると、ぎやはははと下品な笑いの大合唱が始まった。

10代後半の少年達がEランクと言う事は、それでも20代半ばの精神年齢であろうか。

渡辺が嫌いなものは、この世に二つある。

一つは、甘い物……そしてもう一つは――。

「^{しつけ}躾のなつてない子供は嫌いなんですよねえ、僕は」

両腕にはめた銀色のグローブを握りしめ、渡辺は構えをとった。その気迫は、ヴァンパイアの少年達を一步後ずさりさせ、思わず防御の姿勢へと転換させる。

「なめてんじゃねえぞ、ジジイ！」

ヴァンパイアの一人が、飛び出した。

華麗。という言葉形容するならば、今の渡辺の動きがまさにそうなのだろう。相手の動きを見極め、その一手先を読み、的確な打撃を急所に叩き込む――。

渡辺の華麗蹴^{かれいしゅう}をみぞおちにもらい、廃材の山に体ごと突っ込んだまま、ヴァンパイアの少年は動かなくなった。

渡辺は体術士としての訓練は毎日かかせていない。検定こそ今は4級であるが、彼の實力は2級クラスであった。

検定を受けない理由はたった一つ。

「僕は会社勤めで忙しい身なんです、手早く皆仲良く一緒に遊んであげますよ？」

ヴァンパイアといえど、元は人間の若者。彼らの様な荒々しい若者の扱いには慣れている。

次々に襲い掛かるヴァンパイアの少年達にそれぞれ、心ばかりの挨拶をボディランゲージで返していく。

二十数回目の挨拶が終わる頃には、すでにカタはついていた。

「やるわね、オジサマ」

VHナビにDランクの反応があり、目の前の人物が当初の目標であつた事を再確認する。

廃材の山の上から降り立つと、白く無造作に伸びた長い髪を鬱陶うつとうしそうに振り払い、薄い目が渡辺を捉えた。

「あたしは小泉家当主の右腕、小泉こいずみ 大吾郎だいごろうっていうの、ヨロシクねダンディーなオジサマ」

うふっ、と大吾郎のウィンクに渡辺は目を背けた。

革ジャンから見え隠れしている胸毛といい、そっち系のようだ。

「あらあら、照れちゃってカワイイ。あたしの胸の奥で眠らせてあ・げ・る。んふっ」

目を合わせたくない。

大吾郎は革ジャンを脱ぎ捨て、体を黒く変異させると、口からは汚らしくもよだれを垂らした。

だが、渡辺はそれに臆することなく構えなおす。

「やれやれ、困りましたねえ」

渡辺が好きなものは、この世に二つある。

一つは、辛い物……そしてもう一つは――。

「弱いものいじめが大好きなんですよねえ、僕は」

一つの結末、丸山田 誠一郎

渡辺は一直線に大吾郎の胸に右の拳を打ち込んだ。大吾郎の黒い皮膚は、銀のグローブが触れるその瞬間に、爛^{ただ}れて煙を上げる。今度は、左の拳を胃袋めがけて放ち、右上段蹴りで顔面を鮮やかに切り裂いた。

大吾郎は弧を描くように、打ちのめした少年ヴァンパイアの山に突っ込んだ。

やはり、大したことが無い。まだ、多少殴り足りない感はあるが、早々にケリを着けて家に帰ってバーボンでも開けよう。そう考えていた渡辺だったが、すぐにその考えを改めざるをえなくなった。

「積極的なオジサマは大好物なの、あたし」

大吾郎が再び立ち上がり、無様な顔をさらけ出した。

「お食事の時間、忘れてたわ」

すると大吾郎は、少年ヴァンパイアを一人むんずとつまみ上げ、汚い口からのぞく鋭い牙で血を吸^{いのち}い取った。

「自分の子供を……ヴァンパイアは血のつながりを重要視しているのではないのですか？」

3人目の少年が灰になったところで、大吾郎は口についた紅い命の雫を舐めまわし答える。

「それは『丁』の話よ、あいつらイイ子ちゃんだから、家族の間で血のやりとりはしないけど小泉は違うの。子は親のためにあり、血は親のためにあるのよ」

ゲフッ、と一つ大きなゲップをして大吾郎は腹をさすり、満足げな表情で灰となって変わり果てた少年達を踏みつけた。

「ご馳走様、んぐ——」

最後の『んぐ』とは、本来『うふ』と発音されるべき言葉であった。正しく発音できなかったのは、渡辺が大吾郎の顔面に力カトを落としたからである。

正直、彼らの倫理観や食料事情など、どうでもいい。そもそもヴァンパイアに同情する感情など、渡辺は持ち合わせてはいない。

奴らには存在する意味も、意義もない。

ヴァンパイアを討伐して、報酬がもらえようとも、そんなはした金はどうだっていい。ただ、弱者をこの拳でいたぶる事ができればそれでいいのだ。

すでに動かなくなつた大吾郎に聖水をかけると、渡辺はまた口元に薄く笑いをつくり廃材置き場を後にしようとした。だが、きりきりきりつと何かをこする音が聞こえ、渡辺はふと足を止める。

これまた廃材置き場に似つかわしくない、車椅子の老紳士の姿が、不気味なまでにゆっくりとした速度で渡辺に迫ってくるではないか。

「おや、あなたは昼間の——」

言い終わる前に渡辺は地面に膝をついた。

老人……アーノルドと呼ばれ、昼間出会った時に感じた存在感はそこになく、空虚な人形のように、虚空を見つめ、渡辺の体をアーノルドの四本の黒い腕が貫いていた。

背中から伸びたそれは、悪魔が羽を伸ばしたかのように、どす黒く、禍々しい黒一色の腕で、渡辺とは4メートル程の距離があったにもかかわらず、その距離をもとせずまるで伸縮自在のムチのように振り回す。

廃材置き場に月明かりで映し出された二つの人影は、片方の影がコンマ何秒という僅かな時間で奇妙に変形し、もう片方の影を紙人形の様に弄ぶ。やがて渡辺は赤い池の上に崩れ落ち、微動だにしなくなつた。

アーノルドはそれを確認すると、背中から伸びていた腕を巻尺のように素早く背中へと引き戻し、まるで何も生えていなかったの様に元に戻ると、再び車椅子をこぎ出し、深い闇の中へと消えて行った。

廃人様は依然お元気です、丸山田 誠一郎

人の世にヴァンパイアという人外が存在が現れて、どれくらいの年月が過ぎただろうか。闇で生まれ、また闇に消えてゆく、時には同胞の血肉となり、またある時には彼らを狩る者に命を奪われて。

Aランク以上のヴァンパイアが認定されていないのは、多くのヴァンパイアが、50年の歳月を経る前に滅せられるからである。

ヴァンパイアは絶滅危惧種なのだ。

組織として動くヴァンパイアハンターに対し、ヴァンパイアは血の繋がりを重要視し、他の家系とはかわろうとしない。軍隊と不良グループの差だと思えばいいだろう。

『T』はその現状を憂い、ヴァンパイア勢力の統一を果たそうとしている。だが、小泉家はそれに反対したので、他の家系への見せしめとして潰す事になった。それに派遣されたのが、エリーとアーノルドである。

愛する父からのお願いは絶対であった。人として生を受けた時には親と呼べる者はおらず、名前ではなく番号で呼ばれるだけの人形。同世代の少年少女達は周りにいたが、友と呼べる者はおらず、人として生きる意味も見出せなかった。

そんなエリーに家族をもたらしたくれた父。その父の期待を裏切るわけにはいかない。

本来ならば、この姿は誰にも見せたくはなかった。弟達にも、ヴ

アンパイアハンターにすら、見られたくない。彼女が本来の力を使うことを躊躇^{ためら}わなければ、こんな醜態をさらすことは無かっただろう。

肉体の組成変異。

Cランク以上のヴァンパイアは、肉体を望む形に作り変えることができる。吉村は戦闘特化させた姿形に、アーノルドはトリッキーな動きが可能な四本の黒い手。

「レア武器1個は訂正させてもらっていいですか？」

藤内の首筋に一筋汗が流れ、ブラウスの襟^{えり}を濡らす。印藤も携帯から目を放し、鋭い視線をそれに注いだ。誠一郎はというと、泡を吹いて倒れていた。

小さな少女には不釣り合いな程、巨大な右手。握りこぶしは学習機ほどの大きさになるかもしれない。ワンピースの肩口から生え出たそれは、掌に位置する部分に巨大な瞳を持ち、不気味にもそれがぎよろぎよろと闇の中で蠢^{うごめ}いていた。

「お父様の為……そう、お父様の為なら……」

巨大な右手を振り上げたエリーが藤内に向けてジャンケンのパ―の状態で大きく振り下ろした。

藤内はそれを後方にジャンプしてかわすが、エリーの右手はアスファルトに衝撃を伝え、地面にヒビを入れた。地面の振動に巻き込まれ、藤内は頭から倒れてしまい、目を閉じ気絶してしまう。

そこを攻撃しようとエリーの右手が藤内の体に覆いかぶさろうとするが、エリーの右手にボールが投げつけられ、弾けると液体状の物が巨大な右手を濡らした。

「彩華、大丈夫かよ！」

だが、印藤の聖水爆弾も効果はなく、右手は何のダメージも受けていない。

それもそうか、と印藤は思った。ボスキャラ相手にデバフは普通かからない。

印藤は学生カバンから栄養ドリンクの瓶を取り出して、飲み干した。

「^{ドクター}学士ってネトゲでいうと、バッファードとデバッファードを兼ねてんだよね。ネトゲ廃人なめんじゃないやねぞ、チート幼女」

空になった栄養ドリンクを握りつぶして、学生カバンを地面におろすと印藤は嫌味に笑った。

ペットボトルはゴミ箱に、丸山田 誠一郎

印藤の瞳に映るのは、時間が凝縮されたスローモーションの世界。

自分専用につった反応強化薬『フレンジーFrénzy』は、普段は栄養ドリンクの瓶に忍ばせており、飲めば弾丸すら箸でつかめる程の超反応を発揮できる。普段は使わないように務めているが、緊急時の場合はやむをえず服用している。

表立つて使わない理由は、リキャスト再生成に恐ろしく時間が掛かることと、この薬自体、ヴァンパイアハンター協会にとって未認可の危険薬物であったからだ。

「目にはアントシアン、歯にはキシリトール、チートにはチートつてな」

印藤の鋭い目がさらに鋭く光り、誠一郎がそれを見たら、失禁レベルではすまないぐらいのオーラを放っていた。

エリーの右手は藤内から、印藤へと優先順位を変える。

『この女は危険』

ヴァンパイアとしての本能的な直感とでもいうべきものが、エリーに働いた。先程と同じ様に、力任せに右手を印藤に向かって叩きつける。だが、ひび割れた地面の上に彼女の姿はすでに無い。

突然背中に印藤の蹴りを受け、小さな少女に巨大な右手という、エリーのアンバランスな体が地面を転がった。だが、そのまま転が

せてあげるほど印藤は優しくはなく、サッカーボールをセンターリングするかのようになりの体を上空に蹴り上げる。

印藤はさらに追い討ちをかけるべく、勢い良くジャンプし、エリーを追い越して上空に舞い上がった。半月を背に、印藤は懐から小型の拳銃を取り出し、素早い動きでマガジンをセットすると、エリーの体を左手でがっしりとつかみ、心臓に向けて銃身ごと殴りつけた。

二人はそのままの姿勢で地面に墜落し、地上への帰還を果たすと同時に、印藤の右手の拳銃は零距离で全弾を発射する。発砲の音と同時に、エリーの体が面白いように何度も波打つ。

エリーが動かなくなつたのを確認すると、印藤はおろした学生力バンの元に向かい、中からゼロカロリーコーラを取り出し、一気飲みした。

目の前に横たわる自分の仕事ぶりに何度も満足気に頷いて、『俺 T U E E E 』と呟いた。

田中 留子が印藤の危険薬物所持を見抜きながら黙って泳がせておいたのは、彼女の薬物に関する才能と戦闘時における生存本能に魅力を感じたからである。勝つためならば、なんでもする……それは逆に言えば、型にはまらない動きをする事で相手の意表をつくことが出来る。

拳銃をハンマー代わりに使ったり、ヴァンパイアをステーキの落とし穴にはめたりと、彼女の行動はどこか幼稚じみていて、先を読めない。御する事は難しいであろうが、こういったイレギュラーは戦力として重宝するであろう。何より、留子のゲームの師匠である

印藤に口が出せなかった、というのも僅かではある。

「ああ？　まだやんの？」

右手を支えにして立ち上がったエリーの目はまだまだ紅く、生気に満ちていた。

印藤が空になったコーラのペットボトルをエリーに投げつけると、右手の掌の瞳が口に変化し、ペットボトルをおいしそうにグシャグシャと貪る。『ゴミ箱いらねーな』と印藤が呟いた瞬間、エリーの左手にも変化が起こった。

左右対称の巨大なねずみ色の手は、そのプレッシャーも二倍に感じさせる。

「おいおい、二段階変身は日曜朝8時の特権じゃねーのかよ」

ゲームは1日1時間まで、丸山田 誠一郎

印藤のぼやきが終わるか終わらないかの一瞬に、エリーは左右の手で蚊を両手で潰す様に印藤を襲う。

「ちょこまかとうるさい蚊ね。蚊取り線香でも持ってこればよかったかしら」

と、エリーは上空に回避した印藤に向けて言った。

「ちくちくやってるだけじゃラチあかねーな。その分、倒したときの経験値とドロップが期待できそーだけど」

巨大化した右手と左手で地面を殴りつけエリーが跳躍し、印藤の眼前に迫る。

「よくも私に何度も屈辱を与えてくれたわね、お前は特別に挽き肉にして、ハンバーグを作ってパンズに挟んでやるわ」

「できれば、チーズも挟んでくれね？ 俺、チーズバーガー派だから」

印藤は舌なめずりをして、余裕しゃくしゃくに笑ってみせた。印藤がエリーの怒りを引き出すと、彼女をミンチにするが為に、エリーの右手が印藤に迫る。しかし、空中なので体を自由に動かして避けることはできない。

そこで印藤は左から迫るエリーの右手を、サマーソルトキックの要領で蹴り付け、難を逃れた。着地した瞬間、印藤の圧縮していた

時間が元に戻る。

——Frenzyの効果が切れたのだ。

「やべつ。Frenzy切れた……ゲロやばいな、こいつは……Zealot^{ジロット}で手早くぶつ殺した方がよかったか？」

印藤 加奈子には『加奈子ちゃんルール』というものがある。

『ゲームは1日8時間まで。大好きな9つ年上の兄に金をたかるのは一月5万まで。強化薬^{バブ}を使うのは1日1回まで』という内容だ。このルールに従うのであれば、もう強化薬は使えない。

よしんば、Frenzyに続きZealotまで使ってしまったら、印藤の肉体は崩壊する可能性がある。

ちなみに、フレンジーとジロットというのは、印藤が絶賛廃人プレイ中のネットゲに実在する強化スキルの名称である。

足元に黒い影ができて、印藤は右に飛びのいた。あいかわらず地面にボコボコと穴を開けて地球環境によろしくない。

そういえば以前、中学時代に付き合っていた彼氏が『地球と女の子に優しく、ヴァンパイアには厳しい奴』だったな、と印藤はふと思いつく。

『オレはギネスに乗るんだ！』と言って9マタを掛けていたらしいのだが、それが原因で別れたワケではない。

「どうしたの、えらくノロマになっちゃって……お姉さん悲しいわ」

エリーの安い挑発的な言葉に、甘い日々の思い出から戦闘へと思考をシフトし直す。

「本当に悲しいなら、さっさとくたばってくんね？」

あいかわらず口の減らない印藤に、エリーはまたキレた。

「あの巨大なハンマーみてーな左右の拳が直撃すれば、HPは0になるだろうなー。近くの村に運ばれて所持金半分になって助かるなら、いいんだけど」

しかしエリーはすぐに攻撃に移らず、印藤に背を向けた。

「あん？ トイレか？」

エリーは印藤の言葉を見殺し、4メートル程の大木を引き抜き装備した。

「逃げるっていうコマンドあったら、俺迷わずそれ選択するわ」

逆転の要は、丸山田 誠一郎

大木を天へ掲げ、エリーは晒^{わら}った。

印藤はエリーの大木を振り下ろす瞬間を見極めて、回避運動を試みようとするが、早すぎて目が追いつかない。

エリーが大木を振り下ろす——しかし、印藤に大木が直撃するのではなく、真つ二つになって大木の間部分から先が、地面に大きな音を立て落ちた。

「誰か忘れてませんか？」

藤内の斬撃で真つ二つになった大木の片割れを投げ捨て、エリーは舌打ちをした。藤内は印藤の横に並び、剣を構え、エリーと対峙する。

「さんきゅ、彩華。レア武器2個にしとくわ」

「3個でお願いします」

即座に訂正する藤内に、印藤はバツの悪そうに笑う。

「彩華、イイ考えがあるんだけど、ちょっと時間稼いでくんない？」

「あれを相手にですか？」

相変わらずアンバランスな両腕を引きずり、エリーがゆっくりとこちらに向かって歩いてきている。

「彩華ってタンク得意じゃん？ ネットゲでも壁役なんだし、適当に挑発^{ヘイト}かまして逃げ回ってくれるだけいいから、な？」

「——3分ですませてください」

「あいあい、そんじゃー頼むわ」

藤内は一步前に出ると、左足を前に出し、重心を前へと移動させる。両手で握った剣は、胸の辺りで水平に構え、いつでも斬撃を繰り出せるようにする。攻撃は最大の防御……『烈火の構え』にてエリーと相対し、手痛いカウンターを喰らわせるつもりであった。

——もはや、逃げも隠れもしない。

一方の印藤は、学生カバンの元へ赴き、中からポケットウイスキーの瓶を取り出した。瓶の中で揺らぐ無色透明な液体の正体はZeaalot。服用すれば、ヴァンパイアハンター^{スベック}の能力の限界に近い腕力を発揮できる。しかし、『加奈子ちゃんルール』に従いこれを印藤自身が使うことはない。

ではどうするか？

答えは、目の前で未だ泡を吹いている中年親父にあった。

「オラ、起きろ！」

印藤は多少優しくも誠一郎のお腹を蹴り付けた。

「うーん、あれ？ 君は確か……」

「おは」

目を覚ませば、自分の腹の上に女子高生のスカートの中からのぞくキレイな生足が乗っていて、一瞬何がなんだか解らなくなる。しばらく、呆然としていた誠一郎であつたが、すぐに恐怖が蘇り、ガタガタと震えだした。

「あいつをぶつ殺す方法が一つだけある、だから手え貸せ」

「え、えええ？」

その時、印藤の携帯から往年のアニソンが流れ出し、ぴかぴかと点滅した。

「ん？ 親父からか……ウゼーウゼー。でも、流石にでとかなないと後で説教くらいそうだしなあ」

一瞬躊躇した印藤だったが、すぐに通話ボタンを押し、電話にでた。

きつと父親もこの不良娘に相当手を焼かされているに違いない、同じ年頃の娘を持つ父親として誠一郎は同情した。

「もしもしパパあ？ 大丈夫だよーすぐ帰るから。うん、加奈子ちよつとね、お友達の相談に乗ってたんだあ。えらいでしょ？ えへへ」

誠一郎は目が点になった。高くて愛らしい声、さっきまでの低くて恐ろしい声は一体どこへいったのだらうか？

「うん、うん、解ってるう。加奈子もパパの事愛してるよ、だから、まってるね」

通話が終了したようだ。

「トイレットペーパーで首吊って死ね、クソオヤジ」

誠一郎はまた目が点になった。低くて恐ろしい声、さっきまでの高くて愛らしい声は一体どこへいったのだろうか？

「さあて、お前にはやってもらう事が山ほどある」

「え？」

「そうだな、まずは……全部脱げ」

「はい？」

印藤はまるで悪代官の様な目つきになると、誠一郎のズボンのベルトに手をかけ、強引に外した。

鑑賞料5000円になります、丸山田 誠一郎

ワイシャツも、黒のスラックスも全て印藤に剥ぎ取られ、誠一郎は白い半そでの肌着とトランクスに革靴という、どこに出しても恥ずかしくない不審者になった。

「加奈子ちゃん、ぼくをどうするつもりだい!？」

「安心しろよ、焼いてチャーシューにして食おうってわけじゃないんだから」

印藤は誠一郎の特注サイズの服を肩に担ぎ、歩き出した。誠一郎も印藤の後ろを離れまいと、汗をかきながら後を追う。まるでその光景は、暗闇で女子高生が変態親父にストーキングされているかのようだった。

「おい、デブ」

「へ？」

「だから、お前だよデブ」

『ひどい、せめて肥満戦士ビッグマンと呼んで欲しい!』、と誠一郎は思った。

「これを拾え」

印藤の足元には、誠一郎が銃弾でへし折った藤内の剣の刃があった。

これをどうするつもりなのだろうか？

かがみこみ、印藤の足元にある刃を慎重に拾い上げて誠一郎は立ち上がるうとする。顔を上げた誠一郎の目線の先には、印藤の短く詰められたスカートと、かぶりつきたくなるような太ももが目の前にあった。

最近の女子高生はけしからん！

と思いつつ見入っていると、唐突に太ももが動き、『鑑賞料5000円になります』というセリフと膝が飛んできた。払う気はないが、それならもう少し眺めておけばよかった思い、アゴを抑えつつ先を歩く印藤の後を追う。

印藤は切断された木の前で腕組をして、しばし考え込んでいた。それは、先ほどエリーが引き抜いた木で、藤内が切断した片割れだ。誠一郎が追いついたのを確認すると印藤は口を開いた。

「さて、それじゃここにある材料で即席ステーキを作る。作り方は簡単だ。刃をしっかりとお前の服で木にくくりつけるだけ」

木に刃を取り付けるために、誠一郎の服が必要だったらしい。さすがに、印藤の服を脱がせて……というのはできない。というかそんな事をすれば、間違いなく印藤にチャージューにされるであろう。

印藤の指示通り、即席ステーキをこしらえると誠一郎にポケットウイスキーの瓶が手渡された。

「あの、加奈子ちゃん、これは？」

「俺の作った強化薬剤 Zealot。本当は個々人に合わせて成分を調整するんだけど、今は贅沢ぜいたく言つてられねーのよ。俺は他のを使ってるからこれ以上は無理できない。だから、デブにやる。んで、作戦。テケトーに俺がババア幼女にスキを作らせるから、デブは Zealot 飲んで、それを持って突撃。おK？」

「は、はあ」

「彩華も流石にそろそろきついだろうから、さっそくしかけるぜ」

印藤は誠一郎に背を向けると駆け出した。誠一郎も、言われたとおり、Zealot を飲むことにし、瓶の蓋を開ける。ツンとする甘い匂いが辺りに立ち込め、誠一郎は中身を一気に飲み干した。

すぐさま誠一郎は違和感を感じ、膝を地面に付けた。全身を巡る嫌悪感に吐き気と目眩。これが Zealot の効果なのだろうか？

諦めるな、丸山田 誠一郎

だが、泣き言を言っている場合ではない。

誠一郎はなんとか足に力を入れ、ふらふらしながらも立ち上がる。まるで世界が揺れているかの様な錯覚に陥るが、それに構わず木に刃をくくりつけた即席ステーキの元に向かう。腰を落とし、抱きかかえるようにステーキを持ち上げようとするが、うまくいかない。

それでも、二回、三回と同じ様に繰り返してみるのが、一向に持ち上がる気配はなく、時間は刻一刻と過ぎていく。

闇の向こう側では、印藤が藤内に加勢し、エリーを挟み込む形で対峙している。

印藤が囷おとりになり、藤内がエリーの見せたスキを付いて斬り込むが、決定打にならない。

やはりここは印藤の言う通り、自分がこの馬鹿でかい原始的な武器を使って、トドメを刺さなければならぬだろう。

そうこうしている間にも、ムダな時間を消費していく。だが印藤のもたらしたZealotなど何の効果もなく、いくら力を込めても、ウンともスンとも言わない。

——重すぎる。

誠一郎の額に滲にじんだ汗が鼻をつたい、唇の上に垂れる。口内に塩辛さを感じ、誠一郎は腕に力を込めるのを諦めた。

「……無理だよ……これは」

荒い息遣いで尻を地面につけ、天を仰ぎハアハアと苦しみを吐き出す。やがて何かを引きずる音が聞こえ、誠一郎は音源を探るべく、辺りを見回した。

音の発生源はエリーだった。

エリーが両の手を引きずり、闇の中を突き進んでいる。行かせまいと、藤内が背中から斬り付けたが、エリーには何の効果もない。

こちらに気付いた様だ。

「何やってんだ、デブ！ さっさとしろ！」

印藤が遠くから叫ぶが、相変わらず力が入らない。

誠一郎は動けずただただ息を飲み、事態を見守るだけだった。

「ごきげんよう」

エリーは左右の手をだらりと下げ、可愛い笑顔の不気味に歪ませた。

「ブタのおじさん選ばせてあげる。合い挽き肉になるなら、どっちの女がいい？」

物騒な質問を受け、誠一郎は答えに窮した。しばらく無言を貫いていると、エリーが巨大な両手で誠一郎を持ち上げ、首を絞める。

「じゃあ、全部ミックスでいいわね。ついでにガキのご要望通り、チーズも挟んでチーズバーガーにしてあげるから安心なさい」

チーズバーガー………そういえば、今日の昼間に食べたあれは最高だった。もう、食べることはできなくなるのだ。ハンバーガーも、ラーメンも、渡辺部長のくれたビーフジャーキーも、美雪の手料理も。

そしてエリーの手で皆、肉の塊にされてしまう。そうならば………もう家族の顔を見ることはできないだろう。

瑠奈の顔が浮かんだ。浮かんでは消えて、また浮かんでは消える。

遠くで誰かが叫んでいる。若い女性の声だ。瑠奈だろうか？

瑠奈………そうだ、結局朝の誤解をまだ解いていなかった。そして美雪の弁当も忘れていた事も思い出し、誠一郎は目を開けた。

家族を路頭に迷わせるわけにはいかない。家のローンだって、まだ残っている。孫の顔も見たい。

娘婿は誠実な男がいい、まっすぐでひたすら真面目な男なら、瑠奈を任せれるのだが、春川のような男だけは絶対にダメだ。

………まだ、死ねない。

誠一郎はエリーの両手を、引き剥がした。そして今度は逆にエリーの首に手をかけ、高い高いをするかのように持ち上げる。

エリーは抵抗できないでいる。誠一郎の圧倒的な力の前に成す術がない——というのも理由の一つであったが、紅く染まった瞳の誠一郎は、エリーが唯一恐れるそれと同じだったからだ。

「お父様……」

エリーの瞳には誠一郎ではなく、愛する父『T』こと、田中 聖一郎……ヴァンパイアの王とも呼べる父が写っていた。

もう一つの結末、丸山田 誠一郎

闇に光る4つの紅い光を目にして、印藤は息を呑んだ。内2つがエリーのものだというのは解る。だが、もう一方は何なのだ？

考えるまでもないが、考えざるをえない。

答えは出ているのに、疑わざるをえない。

「マルちゃん……」

藤内もいつしか隣に立ち、その光景を前に動けないでいる。

あれはZealotの効果ではない。では、何か？ はっきり言
って解らない……それが印藤の答えだ。

やがて、巨大な何かが二人の間を猛スピードで突き抜け、道路脇の電柱にぶつかった。振り返れば、エリーが電柱に引っかかっており、巨大な手をぶらぶらと漂わせている。そして、また、巨大な何かが二人の間を猛スピードで突き抜け、道路脇の電柱にぶつかる。

今度は、木の先端に刃をくりつけただけという、原始的な武器がエリーを電柱ごと貫いていた。また、振り返ってみると、誠一郎が肩で荒く息をつき、ボールを放り投げた直後の様なポーズで静止していた。

二人は即座に理解する。

そして同時に地面に根をおろしたかのように動けなくなった。

藤内も印藤も、敵であるエリーが完膚なきにまで叩きのめされ、彼女に終わりが近づいている事は理解できる。だが勝利と言ってもいいこの状況に、ただただ誠一郎を見つめ二人は乾いた喉に生唾を流し込み、立ち尽くした。

誠一郎の紅い瞳に、その計り知れない力に恐怖したのだ。

かけるべき言葉はいくつかあるが、その一つすら喉の奥で消えてしまい、一同を静寂が支配する。

闇の向こうに潜む得体の知れない『何か』は一步。また一步と。こちらを目指して、どすどすと音を立てやってくる。

ぐう。

唐突に静寂を切り裂いた音。

またぐうという音が鳴り、二人は我に返る。

「お腹空いたあ」

「ああ？」

それは先ほどと変わらない、冴えない中年オヤジの声で、空腹を訴える旨のセリフだった。

「一仕事したらお腹空いちゃったね、加奈子ちゃんも藤内さんも、デスバーガーでも食べに行きませんか？」

誠一郎はいつもの口調でそう言った。つぶらな瞳で、暑苦しさ満点になった汗だくのシャツとずれたメガネのまま、とことこ駆け寄ってくる。瞳の色はすでに元に戻っており、藤内も印藤もキツネにつままれたような顔をしていた。

「Zealotってすごい効果だね、加奈子ちゃん。いやあ、びつくりしちゃったよ」

「あ……ああ、だろ？ 俺の作った強化薬は効くんだよ」

上機嫌で笑顔の誠一郎に印藤は苦笑いのまま、そう答えるしかなかった。普段通りの誠一郎の様子に藤内も、安堵し微笑んだ。

緊張が一気に解けた為だろうか。闇に潜んでいた黒い4つの腕が、エリーを包み込んでいた事に三人は気付かないでいた。

それにいち早く気付いた藤内だったが、闇から伸びた黒い腕は、すでにエリーを車椅子の老人の膝上に運び去った後だった。

「お姉さま……」

アーノルドは、息も絶え絶えになったエリーを見かね、自分の黒い腕の手首を一本引きちぎり、そこから溢れ出る紅い命の源泉を彼女に分け与えた。

エリーの安らぎに満ちていく顔に、あいかわらず壊れたロボットのように、アーノルドは何の表情の変化も見せない。かわりに、細く目を開けたエリーが右手でアーノルドの頬を愛おしく撫でる。

「いい子ね、アーノルド。私のかわいい弟……」

「帰りましょう、お姉さま」

誠一郎達は微動だにすることなく、それをただ見守ることしかできなかった。

アーノルドの姿は闇に溶け込み、やがて見えなくなる。

見逃してもらったという事実には、印藤は唇をかみ締めていたが、内心はどうなのかはわからない。彼女にとっても、Bランクヴァンパイアと真剣に戦い合ったというのも初めてのことであったから。

遠くできりきりきりっという車椅子が去って行く音を残し、三人のこの日の戦いは終わりを告げた。

両手に花、丸山田 誠一郎

きらびやかなネオンの光の中を歩く、3人の男女の姿があった。

一人は、中年の冴えないメガネをかけた男。

一人は、目つきが鋭く、左右に結った長い髪を揺らしながら肩をいからせて歩く女子高生。

一人は、スーパーのアルバイトがそのまま飛び出してきたような、美人の女性店員。

誠一郎達である。

一見すると両手に花の様だが、そうでもない。

数十歩に一回の割合で、印藤が誠一郎の腹にパンチをかましてくる。例の鑑賞料代わりにサンドバッグ代わりになれと印藤がすごんできたのだ。よほど、誠一郎の腹は叩きがいがあるらしい。

だがそれに加え、誠一郎を苦しませる原因がもう一つあった。世間の目だ。帰り道もここを通るのは嫌だったのだが、道がここしか無い以上、いたしかたない。

誠一郎は誰にも会わないように心の中で祈った。

数歩、歩いたところで藤内の携帯が振るえだし、電話に応答する。

「はい……。ええ、こちらはなんとか……。想定外な事もありました

けど……はい。なんとか全員無事です」

しばらく黙って藤内の電話の様子を、印藤と二人で誠一郎はぼかんと眺めていた。

「はい……渡辺さんが？　わかりました、至急戻ります」

少し藤内の顔色が良くないので、誠一郎は何かあったか尋ねてみた。

「藤内さん、渡辺部長に何かあったんですか？」

「……渡辺さんが……瀕死の重傷だそうです」

印藤が大きく目を見開いて藤内に詰め寄った。

「ブチョーがやられたって、マジかよ？」

「ええ、どうやら二箇所のDランクヴァンパイア出現ポイントに、それぞれBランクヴァンパイアが現れたようです」

「その片方があのババア幼女ってことか……」

「じゃあ、渡辺部長はBランクヴァンパイアに？」

誠一郎の問いに藤内は一瞬の間も開けず、はい、と答えた。

「支部の医務室で田中さんが応急手当を済ませた後、ヴァンパイアハンター専門の医療施設へ搬送されたそうなのですが……予断を許さない状況のようですね」

誠一郎は、ハンマーで頭を思い切り殴りつけられた気分になった。昼間まで元気になっていた渡辺が瀕死の重傷……それは、一歩間違えば自分も渡辺同様生死の境を彷徨^{さまよ}っていたかもしれない……。改めてトンデモナイところに再就職したな、と誠一郎は心の中で呟いた。

「田中さんは今夜渡辺さんに付き添うらしいので、各自はそのまま現場から直帰してかまわないとのことです。ああ、それとマルちゃん、田中さんの事、お家の方には『友達の家に泊まる』とだけ伝えて欲しいそうです。……それじゃ、私はこのまま一度支部に戻りますね」

それだけ言い残し、藤内はネオンの向こう側へ消えていった。後に残された誠一郎は急に不安になる。

隣の不良少女だ。女子高生と夜にこんな素敵^{いかかわしい}な場所に二人つきりというのもマズイ。帰り道は途中までは同じらしいので、誠一郎は印藤となるべく距離を取りつつ、家路を急いだ。

やがてピンク地帯を抜けると、コンビニが見えてくる。もう少しでこの気まずい状況から脱出できると安堵した誠一郎だったが、アクシデントが発生してしまう。

愛娘瑠奈がそこにいたのだ。

瑠奈は、コンビニの中から出てくると、袋を前かごに載せ、だるそうに自転車に腰掛けた。

るなるなとかなぴょん、丸山田 誠一郎

誠一郎は時間が止まる魔法が使えればいいなと思った。どこからか、かわいい猫のような使い魔がやってきて、『僕と契約して魔法中年になってよ』と言われ、魔法使いマルちゃんが誕生するわけでもなく、ただひたすら無情に時は流れた。

とにかく、こんな所を瑠奈に目撃されるわけにはいかない！その思いを胸に、目の前のフライドチキンのチェーン店の白い服を着たおじさんをタックルで押し出し、代わりにそこに直立不動して、気味の悪い笑顔を浮べたマルチャン・サンダースが完成する。

印藤は誠一郎の奇行に目を奪われ、目をしばたかせていたが、やがて瑠奈の後姿に気が付くと声をあげて後ろから飛びついた。

「るなるな、みつけ！」

驚いた様子で瑠奈は振り向くと、顔をほころばせ、自転車から降りると印藤の両手をがっしりと掴み、二人ではしゃぎだした。

「かなぴょん！　こんなところでどうしたの？」

印藤と瑠奈は互いに『るなるな』、『かなぴょん』と呼び合っているらしい。友達なのだろうか？

「バイトの帰りだよー！」

その後なにやら二人で、担任のハゲの目つきがやらしいだとか、クラスメイトのユイちゃんとマスダくんが実は付き合ってるだとか、

盛り上がっておしゃべりを始めてしまい、誠一郎はこの場から動いてよいものか迷った。

通行人のほとんどが、新しいマスコットを物珍しそうに眺め、何人かには写メを撮られ、拳句の果てには犬にマーキングされてしまい、この場から逃げ出したくなった。

気が付けば、軽く人ごみができており、誠一郎は一躍有名人になりつつあった。ついに誠一郎は耐え切れず、その場を飛び出し、コンビニ前でたむろする二人の前に躍り出てしまう。

「あれ、おっさん。まだいたの？　つか犬くせー（笑）なんですけど。ホテル街から俺と一緒に出てきてけっこう経つぜ？」

印藤が不快感をあらわに、誠一郎との間合いを一気に離れた。

「オヤジ……かなびょんと……ホテル街に行ったの？」

瑠奈は口をあんぐりと開けて、まるで汚いものを見るかのような目で誠一郎を睨みつけた。早く誤解を解かねばならないのだが誠一郎は瑠奈の迫力に押され、言葉が出てこない。印藤が瑠奈のセリフから誠一郎と瑠奈の関係を瞬時に見抜くと、口元を歪ませ行動に出た。

「るなるな、誤解してるよ。誠一郎さんはホテル街で凶悪な男供にからまれていた俺を助けてくれたんだ。相手はその筋の人だったんだけど、右の拳がうなり、左の蹴りが空を裂き、頭突きが夜に煌いてチョーかつこよかったんだぜ？　今、俺が清らかな身でいられるのは誠一郎さんのおかげなんだよ、ウンウン」

芝居がかった様子で印藤は、誠一郎を正義のヒーローに仕立て上げた。瑠奈のほうも単純で、それを信じ込み、今朝からの不信感是完全に拭えたようだった。そしてその裏で、一人悪役の様に笑う印藤 加奈子の瞳に誠一郎はまるで気が付かない。

彼女に借りを作ることが、どういうことであるかを誠一郎が知るには、まだしばらく時間が必要であった。

夜道に二人、丸山田 誠一郎

誠一郎はコンビニ前で印藤と別れ、瑠奈と供に帰宅する事になった。

自転車を降りて手で押しながら、薄暗い街灯に照らされた道路を瑠奈は進み、誠一郎もその横を歩いていった。

すでに午後9時を回っており、すれ違う人はほとんど無く、父と娘だけの時間が長く続く……。二人きりで歩くのは何年ぶりの事だろうか、と誠一郎は記憶をめぐらせる。

以前の職では残業もあつたし、付き合いなどで帰宅する時間は夜の10時を回ることも少なくなかった。そんな時間に帰ってくれば、当然のことながら瑠奈は部屋から出てはこないの、2、3日顔を合わせないことがよくあり、休日になればなつたで、瑠奈は外に遊びに出てすれ違つてばかりいた。

珍しく顔を合わせることがあつても、何を話していいものか解らず、結局会話らしい会話をしない。話しかけても会話のキャッチボールは成立せず、ボールを受け止めずに無視スルーされる事だつてほとんどだ。最後にまともに会話したのはいつだったか……。それも思い出せないでいる。

ふと、瑠奈が足を止め立ち止まる。

そしておもむろにコンビニの袋から栄養ドリンクの瓶を取り出し、つつけんどんに誠一郎の鼻先に突き出した。それはどこにでも売っているような、普通の栄養ドリンクで自販機でもよく見かける物だ。

よく冷やされていたせいか、数的の雫が瓶を伝い、地面を軽く濡らした。

「……あげる」

聞こえるか聞こえないか、それくらいの小さな声でぼそりと瑠奈は言った。

しばらく呆然と立ち尽くしていたが、それが自分に向けられた物だとわかると、誠一郎はおずおずと栄養ドリンクの瓶を受け取った。瑠奈の横顔をちらりと盗み見るが、暗闇で表情は読めない。

「見たいテレビがあるから、先に行くね」

それだけ言うと、自転車にまたがり夜の空気を切り裂いて、瑠奈の姿は消えていく。

自転車をこぎ出す直前に、瑠奈は何か言ったのだが、すれ違った自動車から流れる近所迷惑なBGMにかき消され、聞き取ることはかなわなかった。

栄養ドリンクの蓋を開けて、一気に流し込む。それだけで、連日の疲れは吹き飛んでしまう様な気がした。

渡辺の件、そして『T』との戦い……明日も相変わらず忙しい事になるだろうが、口内に満ちた幸せの味が誠一郎の疲れて重くなった足を動かした。

すれ違っていた時間は元に戻せないが、これからいくらでもやり直しができるのではないか。転職した事で、今まで見えてなかった

もの、それらを少しだけ見ることができたような気がした。

まだまだこれからなのだ。仕事も、家族も。

誠一郎は夜の住宅街で一つ気合を入れると、歩き出した。家族の待つ我が家へと向かって……。

とある男女の2コンボ、丸山田 誠一郎（前書き）

登場人物紹介

印藤 いんどう 加奈子 かなこ

15歳。高校一年生。瑠奈の親友にして春川の元カノ。
赤い髪のツインテールに、だらしなく着くずした制服と短く詰められた

スカートからのぞくキレイな生足が魅力的。

戦闘時には^{ドクター}学士として実力を発揮し、

強化薬剤^{フレンジー}Frenzyと^{ジローット}Zealotを使いこなす。

限定的であるが、その状態の印藤の実力はBランクヴァンパイアすら凌駕する。

渡辺 わたなべ 義久 よしひさ

56歳。独身。物語のきっかけである、誠一郎に解雇を言い渡した人物であり、彼自身もヴァンパイアハンター。
^{グラップラー}

体術士としての実力は極めて高い。
^{かれいしゅう}

必殺技は華麗蹴。

とある男女の2コンボ、丸山田 誠一郎

「面倒くせえ……」

春川 優人は学校の屋上で昼食のパンにかじりつき、そうつぶやいた。右手にホイップクリームが挟まれたパンを、左手に携帯を持ち、給水塔の上であぐらをかきながら午後のスケジュールを再確認する。木曜日は面倒なことに6時間目まで授業があったし、それに確か今日は掃除もしなくてはならなかった気もするので、余計に気が滅入った。

「可愛い女の子のお見舞いならともかく、50代のおっさんの病室とかやだよなあ」

昼前に留子から着信したメールによれば、渡辺は一命をとりとめたらしい。学校が終わったなら顔を出してやれと、留子から指示が来たのだった。

昨日、せっかく手取り足取りの個人授業でウハウハしてたのに、渡辺によってそのウハウハを途中で引き裂かれたのが、春川にとっては面白く無い。しかも、留子に一晩付き添わされるなんて個人授業よりも羨ましいではないか。

「電柱に頭ぶつけて入院したら、トメちゃん付き添ってくれるかな
」

「俺はむしろ、そのまま死んで欲しい」

不機嫌そうな声をたどってみれば、屋上の入り口に一人の女生徒

の姿があつた。左右に結つた赤く長い髪を揺らし、春川を睨みつけている。

「インコちゃんー！」

春川は給水塔から飛び降り、印藤に襲い掛かった。有無を言わず、そのまま腰に手を回し印藤の自己主張の乏しい胸に、頬をこすりつける。

「オレ、屋上に一人でさびしかったんだ。孤独死するかと思ったよー！」

「そのまま死ね」

某3対3で有名な格ゲーで人気の高い、赤毛の暴走するキャラが如く、冷たく言い放ち、本物の殺気をこめて印藤は春川の腹に右膝を叩き込むと、祈りを捧げるように両手を組見合わせ、それをハンマーにして背中に叩き込んだ。これがゲームなら、おそらく画面にPUSH 2 HIT！と表示されているに違いない。

「あ、あいかわらずすごい戦闘力だね、インコちゃん」

春川はうずくまって、昼食だった物を地面にリバーズした。

「そっちこそ、相変わらず性欲が服着て歩いてるみたいで、お元気そうねセンパイ」

印藤は目を背け、春川の横を悠然と通り過ぎ、フェンスに体重を預けた。

「留子からメール、着たよ。学校終わったら春川と一緒に、花の一つでも持ってブチヨーのお見舞いに行けっさ」

すでに印藤にも連絡は行っていたらしく、春川はますます逃げられなくなった。

「わーかったよ。授業終わったらちゃんと行くからさあ、そんな怖い目で睨むなって」

「これは普段通りなんですけど」

印藤は言葉通りとは思えない形相で春川を視線で縫いとめた。

「とにかく、逃げててもムダだぜ？ 首へし折ってでも連れて行くな！」

首をへし折ったら死んでしまうじゃないかと抗議したくもなるが、この荒い言葉使いも彼女にとって普段通りなのだ。

印藤は口も悪ければ、愛想もない上に短気かつ暴力的で、不真面目である。しかし、一度引き受けた命令は絶対にこなす従順な一面を持っているので、春川は即座に観念した。

「それと、るなるなを泣かしたら……リアルPKだからな」

「わーってるよ……」

「まさか、俺の親友に手え出すとはね。てか、それ以前に」

と、数秒間を空けて印藤は再び口を開いた。

「もう誰とも付き合わないんじゃないの？」

嵐の予感、丸山田 誠一郎

ヴァンパイアハンターになる事で失うものがいくつがある。一つは身体の成長、もう一つは生殖能力である。

特に、10代でヴァンパイアハンターになった者は、成長の停止を周囲に悟られないようにする為、2年周期で住居を転々としなければならぬ。その為、彼らはヴァンパイアハンターになって2年以内に家族や友人と別れを告げることになる。失踪、という形で。

春川が1年前に女性関係を全て清算し、印藤と別れた理由の一つはそれだった。

「あー。そりゃ……その、あれだ。最初はしつこかったから、適当に相手してただけなんだけど……。でも、るーちゃんの話聞いているうちにさ、なーんか放つとけなくなっちゃって……」

春川は少し真面目な顔になり、話を続ける。

「家族関係がさ、うまく行ってないんだってよ。なんか親父さんは仕事でほとんど家にいなくて、会話しても成績の事くらいしか話題にあがらないって言うてたし……。あとこれ、るーちゃんには口止めされてんだけど、絶対誰にも言うなよな？ 中学ん時、けっこうイジメられてたらしーんだ。そんな時も、親父さんは仕事で忙しくてるーちゃんがイジメに合ってるのも知らなかったんだよ……。結局、上っ面しか見てねーんだよな、親なんてさ。そのクセ、『子供の事なら何でも知ってる』だなんて言うてるらしいから、笑っちゃうぜ。オレだったらその鈍感親父を一発ブン殴ってやりたいね！」

印藤は春川にブン殴られる誠一郎を心の中で描いてみた。昨日の夜、親友の父親が丸山田 誠一郎と知って驚いたが、今の口ぶりから察するに、春川本人も瑠奈の父親が誠一郎である事を知らないらしい。印藤は面白そうなので、このまま黙っておく事にした。

「まーでも最近転職して、るーちゃんの事をもっとちゃんと考えてくれるようになったらしいんだ。けっこうデカイ会社に転職して、毎晩遅くまでボロボロになりながら帰ってくるんだってよ。しかも専務の娘さんを家で預かってるって言ってたっけー。ららちゃんていう、優しくて、かわいい中学生の女の子らしいんだ。今日の放課後、るーちゃんの家遊びに行く約束してんだよね。へへへへ。ららちゃん、どんな子なんだろー」

あいかわらずこの男の脳ミソは下半身にぶら下がっているらしい。

「ららちゃんはいつでもいいんだけど、つまり、るなるなに情が移った……と？」

「地球と女の子に優しくするのがオレのモットーだからな。残りの1年でオレなんか彼女の心の支えになれるなら、いくらでもなさ。それに、るーちゃんはインコちゃんと違って、いい乳持もんってるし、うへへ」

春川は印藤の胸元に目をやり、わざとらしく、肩をすくませた。

「あ？」

印藤は視線ならぬ、刺線、或いは死線なるものを春川に向けて照射した。しかし、すぐにその視線を元の場所に戻した。

「まー、るなるなの事、頼むわ」

「おうよ」

「あーそうそう。見舞い用の花、予約しておいたから、これでいいだろ？」

印藤は携帯の画面に表示された写真を、指差して春川に同意を求めた。

「インコちゃん……これ、お悔やみの花よ？」

HPには『主な用途：お悔やみ、法事、命日、春の彼岸、秋のお彼岸』と表示されている。

確かにあの嫌味な渡辺には、菊の花でも病室に飾ってやってもらいかもしれない。だが、重症のケガ人相手にやはりそれはないだろう、と春川は思った。

「え？　そうか？　これだとなんかマズイ？」

印藤のきょとした顔を見て、春川は一息ついた。再び午後のスケジュールを再確認して、『花屋で見舞いの花を購入』を付け加え、つぶやく。

「面倒くせえ……」

ファンクラブはお断り、丸山田 誠一郎

放課後、春川は印藤と二人で駅前の花屋により、お見舞い用の花を買って渡辺の病室に飾ったところ、『鉢植えは根があるから、根付く』、即ち、『寝付く』と連想してしまい、入院が長引くイメージがあるので普通は選ばないんですよ。まさか、そんな事も君達は知らなかったんですか？ まったく、最近の若者は……』と、意識が戻った渡辺に即説教され、嫌味を聞くハメになった。小一時間ほどで渡辺との『楽しい』おしゃべりから開放され、二人は病院の前の公園を歩いていた。

「マジでお悔やみの花、持って行ってもよかったかもな」

春川はうんざりした顔で、とぼとぼとだらしく歩いていた。

「まーいーじゃん、おかげで食い物たらふくもらっただし」

印藤は春川の隣で、戦利品のリンゴにかぶりつきながら答える。渡辺の病室からお見舞い用のフルーツ盛り合わせを強奪したのだ。しかし小一時間のお説教の引き換えにしては釣り合わないだろう。

「おかげでもう5時だぜ？ ダッシュで行かねーとるーちゃん怒らしちゃう」

春川は携帯の電源を入れ、新着メールを確認する。すると27件のメールが届いており、そのいずれも早く来いと催促する瑠奈からのものだった。留守録の方にも何件か新しいものがあったが内容は確認するまでも無い。

「るなるな怒ったら怖いからなあ、さっさと行ったほうがいいぜ、けど」

印藤は食べ終えたりリンゴの残りをゴミ箱に投げ捨て、鋭い目つきで周囲を見渡した。

「エンカウントお客さんだぜ？」

二人の携帯から一斉に電子音が鳴り響き、招かれざる客の来訪を告げる。木の影から1人、トイレから1人、外灯の上に1人、噴水の中から1人。4人の若い男が春川達を取り囲んでいた。

「見ねーツラだな。オレのファンクラブに入会したいのなら、NGだ。ヤローはお断りなんでね」

すると木の影に隠れていた男が地面に膝を付き、そのままうつぶせになって倒れた。ファンクラブ入会を断られたシヨックのあまり……というわけではなく、印藤が問答無用で背中を蹴り、その上にゴミ箱を逆さまにして押し付けたからだ。

「何だ、よえーな？ ってEランクかよ……ウゼーウゼー。つか、逃げていいよ。ラストダンジョン適性レベルの勇者がスライムぶちぶち潰したら、虚しいっしょ？ あれと一緒に。はい、お疲れさん」

トイレの前の男は印藤の言葉で頭に血が昇り、わめき散らした。

「なめてんのか、てめえ！？」

印藤は鋭い視線でこう返した。

「ああ、なめてんだよ」

トイレ男は印藤の視線ですくみあがり、そのまま後退してトイレの中に逃げ込んだ。

「かつこわる」

「そりゃ、インコちゃんに見つめられたら、どんな男もイチコロよ。それだけでホラー映画が50本はつくれる——」

春川はすぐに印藤の視線に気付き、冷や汗を流しそのまま後退してトイレの中に逃げ込んだ。

「俺、あれのファンだったんだよあ……だっさ」

『春川 優人ファンクラブ初代会長 印藤 加奈子』という肩書きは印藤に取って黒歴史であり、消し去りたい過去の遺物であった。といっても、その頃の印藤もメガネをかけた純真潔白の文学少女であり、何をどう間違って今の様になったのかは定かではない。

女の子は元気が一番、丸山田 誠一郎

印藤は噴水の男をそのまま水攻めにして動けなくしたあと、外灯を裏拳でへし折り、その上にいた男を引き摺り下ろした。男は完全に戦意喪失してしまい、四つん這いになってなおも逃げようとするが、印藤に背中を足で押さえつけられ、観念した。踏まれているにもかかわらず、男の顔が至福に満ちていたのは何故だろうか。

印藤は折れた外灯を両手で持ち、時期の早いスイカ割をそこで行う。充分に加減はしたので、男は気を失っているだけのようだ。

印藤はトドメを刺すべく聖水を使おうとしたが、トイレから仲睦まじく出てきた二人の男達の姿を目の端にとらえ、動きを止めた。

春川に寄り添うように、トイレに逃げ込んだ男が春川の背中に右手を回し、左手で来世でも添い遂げようとばかりにがっちり春川の左肩をつかんでいる。

春川は女だけでは満足できず、ついに男にまで手を出すようになったのだろうか？

「こ、この男の命が惜しかったら、武器を捨てて大人しくしゃがめ！」

どうやら、春川はトイレ男に人質にされたらしい。男はナイフの様な刃物でも持っているらしく、春川がせわしなく後ろを気にしていた。

「インコちゃん、お願いだから大人しく、かわいらしく、おしとや

かにして！ 無理だと思っけど！」

無理とはなんだ。と、印藤はキレた。印藤の父親は大きな病院の院長を務めており、家庭は裕福である。家の中では『家族の誰からも好かれる加奈子ちゃん』を演じているので、決して無理というわけではない。

「ああああ！ ウゼーんだよ！」

印藤は、へし折った外灯で男もろとも春川を横一文字に薙いだ。春川は男がクッションになったおかげでさほどダメージを受けておらず、すぐに立ち上り、印藤に涙ながらに感謝の言葉を述べる。

「やっぱ女の子は元気が一番だよ！ インコちゃんはそのままだが一番だよ！ その人殺しの様な目つきも、幾千の猛者達の血を吸い尽くした赤い髪もステキ！」

そう言つて春川は印藤に飛びつこうとしたが、印藤と春川の鼻先の空気が一瞬震え、コンクリートで舗装された地面をキレイに縦に割った。二人の間に戦慄が走り、一瞬戸惑うが、印藤はすぐにその発生源を探り当て、それを見つける。

男がいた。40前後で、眉間に深く刻まれたしわと、上唇の上に整えられた髭。白髪交じりの髪が肩まで掛かりきっており、イメージ的には料理漫画でおなじみの某会員制料亭の海。雄。に口髭をトッピングした感じか。和服に身を包んだその男の全身からは、只者ではない気配を感じさせた。

「家の子供達^{クス}が失礼をした。ヴァンパイアハンターを見ると、ついつい頭に血が昇ってしまうようだ。ワシの監督不行き届きを許して

欲しい」

地の底から響くような低い声。だが、不思議と敵意や殺気などは感じることが出来ない。

「ワシは小泉家当主、小泉^{こいずみ} 浩之^{ひろゆき}。実は晚餐まで時間を持て余してしまつてな。よければ少々おしゃべりの相手をして欲しいのだが？」

印藤はその名前に聞き覚えがあつたのか、少々驚きを含んだ表情で問い返した。

「小泉 浩之……小泉家の当主様じゃねーかよ。俺とガールズトークでもしてーのか？ 俺はスイーツよりこっちの方が好みなんだけどなっ！」

言葉と同時に印藤は外灯を投槍のように小泉に向けて放つた。外灯は黄昏時の空気を勢い良く切り裂いて突き進むが、小泉の目の前で一瞬の内に細切れにされてしまう。

「何だありゃ？」

春川は首を傾げシンキングタイムには入るが、答えは出ない。

「ワシは若者と話がしたかっただけなんだが……ううむ。仕方ない」

小泉が右手を横に振つた。ただそれだけで公園の木々や、数本の外灯が悲鳴をあげて崩れる。しかし印藤は怯むことなく、制服の胸ポケットから栄養ドリンクの瓶を取り出し、一気に飲み干した。F
フレンジー
renzyである。

シャッターチャンスだ、丸山田 誠一郎

電光石火。あるいは疾風怒涛の如く、印藤は駆け出した。小泉の背後を取るべく、蹴り上げた砂埃を遥か後方に置き去りにして。

「おう。自分自身を強化したのか」

小泉は今度は左手を縦に振り下ろした。やはりまた地面に亀裂が出来るが、印藤の素早い動きに対応できず、命中することはなかった。そしてそれと同時に、印藤も違和感を覚えた。

超反応を誇る印藤の前に見えない攻撃はない。小泉の攻撃は超高速の何かであると考えていたのだが、どうも違らしい。しかし、考えても解らないのなら仕方が無い。

印藤は軽く跳躍し空中で下半身ごとひねり、スカートがふわりと翻るのと同じ、浴びせ蹴りを小泉の顔面に見舞った。学生靴の先端に確かな手応えを感じ、着地して少し距離を離す。

「速いな。確かにキレのあるいい蹴りだが、若い娘がそうそう使う技ではない。……中が見えるぞ」

その小泉のセリフを受けて、春川が携帯をカメラモードにして小泉の背後にまわろうとしたのは、何故であろうか。

印藤は再び蹴りを見舞うべく、足を動かそうとしたが足に違和感を感じ動きを止めた。違和感の正体は一目でわかった。靴の先端がくつきりとなくなっている。それは先ほど小泉の顔面に叩き込んだ右の靴だ。あと数センチ深く蹴り込んでいたら、つま先が無くなっ

ていたのかもしれない。

「あとちょっとで嫁にいけない体になるとこだったぜ……」

だが、印藤は再び小泉に向けて駆け出す。今度は攻撃を繰り出すためではない。見極めるためだ。

小泉が再び右手を横に振った。ただ右手を振ったようにしか見えない。だが、ぎりぎりでかわし、それを見ることができた。黒くて細い糸のような物が、印藤の前髪を少々さらっていく。先ほど印藤が小泉の顔面に見舞った蹴りも、おそらくこいつに命中したのだ。

細いワイヤーの様な物を掌で操っている……それが印藤の見解だった。ならば、やはり懷に飛び込んで接近戦に持ち込んだ方が有利に戦えるはずだ。腰を落とし、左手を地面に添え、四足獣の様に前を見据え、駆け出す。あと半歩の距離というところで印藤は動きを止めた。小泉が左手を顔の前に出し、右手を懷に潜らせている。

印藤は直感的に何かあると思い、身構えた。

「もしもし、ワシだ。む、そうか。わかった、すぐにいく」

しかしそれは印藤の杞憂で、小泉は懷から携帯を取り出して通話中だった。

「娘、お前のおかげでよい暇つぶしができた。今日はこれで暇いふにさせてもらおう」

印藤も毒気を抜かれたのか、殺る気が急に失せた。なにより Fr
enzy の効果が切れた事も大きい。

背中を向けた小泉はスキだらけで、蹴りを入れれば気持ちイイくらい転がりそうだが、もうそんな気分ではない。

「おう。娘。時間つぶしに付き合ってくれた礼にいい事を教えてやるわ」

小泉は振り向かずにそう言った。

「あんだよ？ 今度の期末のヤマでも教えてくれんのか？」

しかし、小泉の返事は印藤の赤点回避の秘策ではなく、期待に反したものだった。

「その薬物はやめるがいい、死ぬぞ」

それだけ言っでどこへともなく消えて行っただ。

「誰かそんな脅しに乘りますかーっての。な、春川^{バカ}？」

振り向いた先には春川の姿もすでにそこにはなく、かわりに携帯に一通メールが届いており、内容が『インコちゃんにオヤジの相手は任せた！ じっくりガールストーク楽しんでちょq（＾－＾q）』というものだった。

「あのクソ野郎……俺置いて逃げやがったのか」

春川 in 丸山田家その1、丸山田 誠一郎

『丸山田』。珍しい名字の表札を目の前にして、春川 優人は髪
のセットとブレスケアに余念がなかった。

時刻はとうに夜の6時を過ぎ、約束の5時を一時間もオーバーしてしまっている。その為、本来ならドアを蹴破り颯爽と瑠奈の前に現れなければいけないはずだが、初めてやってきた彼女の家を前にして、だらしな性格好ではいけないと思い直し、身支度を整えていた。

「行くぜ、オレ」

自分にエールを送り、インターフォンの呼び出しボタンを押す。
数秒間の後、若い女性がドアを開けて顔を出した。

「あら、いらつしゃい。春川くんね？ あがってちょうだいね」

「は、はい。お邪魔します」

美雪に玄関に通され、靴を脱ぐ。脱いだ靴は綺麗にそろえて、ドアの方へ向けておいた。美雪に瑠奈の部屋の前まで案内され、ドアをノックする。

「や、やあ。るーちゃん。ごめんよ？ ちょっと用事が……」

まるで自動ドアのように開いたドアから私服姿の瑠奈がぷっくりとむくれた顔を出し、春川は口の中に苦い味がこみ上げた。

（怒ってる！）

「先輩、何してたんですか？」

春川は視線を泳がせて苦し紛れに答えた。

「あゝ。あれ！ 信号待ちしてたら、目の前の妊婦さんが急に産気づいちゃって！ なかなか救急車が来ないからおぶって病院連れて行ったんだけど、産婦人科の先生がいなくて代わりにオレが赤ちゃんをとりあげたんだ！」

瑠奈の目はまだ疑いの眼差しだ。

「元氣なかわいい男の子だったんだよ！ こう、丸っこくてさ！ 将来、オレと同じくらいイイ男になるね、ありゃあ！」

「すごいですねえ、これで8人目ですね、先輩がとりあげた赤ちゃん」

まだ疑いは晴れない。

「田舎から出てきたお婆ちゃんに道聞かれちゃってさあ。オレ、頼まれると断れないタイプじゃない？ 懇切丁寧に道を教えてたら、ついつい時間食っちゃって！ 奈良の東大寺まで付いて行っちゃたよお。舞妓さん達キレイだったなあ」

「前はアメリカの首都ニューヨークに案内したんでしたっけ？ 首都はワシントンDCですよ。あと、舞妓さんは京都です」

まだまだ疑いは晴れない。

「あつれゝ、そうだったっけ!? わは、あははは」

「ウソなんて付かずに、正直に言ってくればいいのに。かなぴょんから話はちゃんと聞いてます」

「え? インコちゃんから?」

春川の頬を、嫌な汗が一筋流れた。

「大変でしたね」

瑠奈の目がなぜか涙ぐんでいる。

「ん、うん? ああああ! そうそう、もう、たいへんだったのよ!」

なんとかこの場を凌げればいいと思い、春川はとにかく必死に相槌を打った。

「あたし、先輩がそんな事に巻き込まれてるだなんて……。何で、早く言ってくれないんですか!」

「あああ、ごめん、よ?」

瑠奈は一体何を印藤に吹き込まれたのだろうか?

「でも、先輩には私が付いていますから、安心してください! 例え世界を敵に回しても、私は先輩の味方ですから!」

がっちりと瑠奈に腕をつかまれ、春川はしばし呆然となる。かなり壮大な物語のようだった。

「とにかく、入ってください。すぐにお茶持ってきますから、適当にくつろいでくださいね！」

瑠奈は春川を無理矢理部屋の中心に座らせた後、元氣良くドアを飛び出し台所へと向かった。春川は部屋に一人取り残され、急に不安になった。所在なさに視線を彷徨わせる。部屋は小奇麗に片付けられており、机の上には写真が飾られていた。写真には、とても仲が良さそうに寄り添う二人の男女が写っている。男の方は春川にも見覚えがあった。丸々太っていて、メガネをかけた冴えない親父……。

「マルちゃん……だよな、これ？ 何でるーちゃんとこんな仲良さそうに写真写ってた？」

春川の脳裏にある一つの嫌な予感が生まれた。いや、それは悪寒といってもいい。

「まさか」

写真を手に取り、まじまじと見る。この4段腹はどこからどう見ても、マルちゃんだ。そこで、春川の中で、予感確信へと変わった。

「まさか、るーちゃんって……マルちゃんと付き合ってた……のか？」

春川 in 丸山田家その2、丸山田 誠一郎

シンと静まり返った室内に、耳障りな振動音が響いて春川は我に返る。

震源はどうやら机の上で充電中の携帯で、主を待ちきれないのか鬱陶しいくらいにブルブルと震え続けた。ピンク色の携帯には所狭しとカラフルなビーズで埋め尽くされており、すでに携帯と呼べる物体なのかどうか、あやしい。

「るーちゃんの携帯……」

ディスプレイには『着信中 あいつ』と表示されている。まさか手にした写真立てと着信中の”あいつ”。その二つが春川の頭の中でリンクする。あいつとは、一体誰か？ 確かめずにはいられなくなった。

春川は多少の罪悪感を覚えつつ、ビーズの塊に手を伸ばす。まさかの重量感に戸惑うが、真に戸惑うべきは電話の向こうの相手だった。震える指で通話ボタンを押し、そっと耳に添える。

『もしもし』

「——！！」

聞き覚えのある、野太い声。

『今日は定時であがれる事になったよ。瑠奈と一緒に晩御飯食べるのも久しぶりだな。悪いんだが——』

春川はそこで切った。『瑠奈』。呼び捨てだ。二人はよほど深い関係らしい。

その時、とたとたと階段を上る足音が聞こえてきて、春川は急いで着信履歴を消去すると、ビーズの塊をもとの位置に戻した。

「センパイ。お待たせしましたっ。あれ？ 何してるんですか……
……っ……それ！」

瑠奈は春川の持っていた写真立てに気付き、少し恥ずかしそうに顔を背けた。

「あ、ああ！ ごめんごめん、この写真立てがっこいいなー。思
つてさ、つつい見とれちゃったよー！ オレの見立てでは……イ
ギリス製の高級品だな、こいつは！ いやあ、いい仕事してますね
え」

「それ、１００円ショップで買った中国製のやつです」

「あ、あらそう。最近の１００円ショップはレベルがあがったねえ。
一体いつの間にこれだけの物を……」

「それ、５年前に買いました」

「だと思っただよ」

春川は笑顔のままトレイに乗せられた紅茶を受け取り、優雅に
する。その姿は中々サマになっており、テレビの向こうに映るイ
ケメン俳優もなんのその、韓流スターも、ハリウッドスターも足元

は及ばないオーラを発していた。これはあくまで瑠奈の視点での話だが。

瑠奈がうつとりと春川のティータイムに魅入っていると、ドアをノックする音でそれは妨げられた。

『おねーちゃんん。ケーキ持ってきたからあけてー』

「あ、ららちゃんありがとー！　今開けるね！」

ららちゃん。春川は先ほどまでマルちゃんへの疑惑で一杯だった思考を押し出し、ららちゃんへの興味で頭が一杯になった。どんな子なのか、一分一秒でも早く拝みたいと思い、ドアを開ける瑠奈の背後に立ち、紅茶の最後の一口を急いで流し込む。

「お邪魔しまーす」

元気でかわいらしい声。瑠奈がドアから離れ、ららちゃんはその姿を現した。

「ブフォオオオオオオオオ！」

春川は口からウォーターカッターの様に紅茶を吹き出し、瑠奈の目の前を通り過ぎ、ららちゃんこと、留子の顔面にそれがクリティカルヒットする。

「ト、トメちゃ——」

突然に春川は膝を付いて倒れた。そして目の前にはいつの間にか、間合いを一気に詰めた留子の姿が。

「きゃあ！ お兄ちゃん大丈夫？ え、お腹痛い？ トイレはこっちだよ！」

留子は慌てふためいた様子で叫んだが、顔はあくまで冷静であり瑠奈からはその表情も、春川の腹に打ちつけられた拳も見えない。留子は春川を猛烈な勢いで抱え上げ、階段を駆け下りて行き、瑠奈は一人部屋に取り残された。

春川 in 丸山田家その3、丸山田 誠一郎

トイレに留子と二人つきり。これだけ嬉しいシチュエーションなど他に存在しないはずなのだが、額に冷たい銃口の感触と留子の殺気に春川は心底恐怖した。

「ららちゃんだ」

「はひ？」

「この家では私は、高城 ららと呼ばれている。間違ってもトメちゃんなどと呼ぶな。その何も詰まってなさそうな脳ミソが吹き飛ぶぞ？」

「わ、わかったよわかったよ！ でも、これどーいうこと？ トメちゃんって確か、マルちゃんとここに居候してるんだよね？ それがーちゃんの家にいるのっておかしくない？」

留子は深く溜め息をついた。

「おかしくない。矛盾も何も無い。よく考えてみる」

「マルちゃんの家に、トメちゃんはいる。るーちゃんの家で預かっている子はららちゃん。ららちゃんはトメちゃん。えーと……つまり？」

「そうだ」

「マルちゃんって……るーちゃんの……家族？」

「ああ」

「えーと」

しばし春川は全国模試の時よりも頭をフル回転させ、考え続けた。

「ペット？」

「そう見えても仕方が無いが、二足歩行するブタは存在しないだろ」

「えーと」

しばし春川はギャルゲーで選択肢を選ぶ時よりも頭をフル回転させ、考え続けた。

「お兄さん？」

「無理があるな」

「えーと」

春川の顔は蒼白になっていた。銃口を押し付けられている恐怖より、恐ろしい事実を知ってしまったからだ。

「お父……さん？」

ピンポン。と春川の回答にまるで空気を読んだかのように、グッドタイムミングで玄関のチャイムが鳴った。

『ただいまー』

誠一郎が帰ってきたらしい。

「マルちゃん……えーと……」

「動くタヌキの置物があるなら、私が買い占めてるぞ」

「るーちゃんは……マルちゃんの……娘？」

「戸籍上はもちろん遺伝子的にもな」

春川はこの時、生物の多様性と人間の神秘について新しい理論を組み立てた。この理論を論文にして発表すれば、ノーベル賞も夢では無いかもしれない。

『おおーい、瑠奈、何だこの靴。お客さんかー？』

『ちょっとあなた、今、瑠奈のお友達がいらしてるのよ。それもかっこいい男の子！ 彼氏かもしれないわねー。私があと10年若ければほっとかないのに』

『彼氏！？ どんな奴か顔を拝んでやる……』

いつものマルちゃんの間で抜けた声ではなく、それはまさに、鬼気迫っていた。

「トメちゃん、オレ……トイレの子になりたい」

「とりあえず、腹の調子が悪いから帰ったことにしといてやる。丸

山田は瑠奈の部屋に行つたみたいだしな。あとは私がうまくいいわけしといてやるよ」

「さんきゅ……愛してるぜ、トメちゃん」

普段なら、股間に一発弾丸をおすそ分けしてやるところだが、春川が途端に哀れに見えてトメ子は春川を逃がしてやる事にした。

『瑠奈、お友達がきてるんだらう？ パパにも紹介してくれないか？』

「今だ、トイレから出る！ 振り向かずにそのまま走れ！」

春川はトイレを飛び出すと、玄関にあつた靴を抱えてそのまま走り出した。5分ほど全力疾走して、ようやくそこで後ろを振り返つた。

「オレ、夢でも見てるのかな……。るーちゃんがマルちゃんの娘だなんて、信じれるかよ。遺伝子の不思議どころじゃねーぞ、ありや」

春川は混乱しつつも家路をたどり、結局その日は明け方まで寝付くことが出来なかった。

ゲームマスターかなびょん、丸山田 誠一郎

四日目の研修を終え、誠一郎は食堂で休憩を取っていた。適当なテーブルに付き、イスをその体重で押しつぶすかのように腰を下ろす。

ふと、昨日の夜の事を思い出し誠一郎は顔をしかめた。昨日、瑠奈の彼氏と思しき男が不敵にも我が陣地に攻め込んできていたらしい。なんでも、急病で家に帰ってしまい、顔を合わせることはできなかったが、その後ろ姿だけは確認できた。あれは瑠奈と同じ高校の男子制服。

「そうだ。春川くんなら、何か知っているかもしれない」

同じ高校の春川ならば、きっと何か知っているに違いない。春川の彼女、るーちゃんとやらに協力をあおいでもいいのではないか。

「うん、そうしよう」

誠一郎は一人力強く頷き、留子のいる私設ゲームセンターへと足を運んだ。時間通りならば、春川がそろそろ来ていてもいい頃合だ。きよろきよろと筐体の前の席を探すが、春川はおるか留子の姿すらない。

「あれ？ 師匠つたら、もう晩御飯かな。食べすぎは良くないなあ」

一日七食も食べる腹を波打たせて、誠一郎は留子の姿を求めてさまよった。突然、世界が揺れて誠一郎は尻餅を付く。

「すところいく！ 相変わらずいい腹持もんつてんなあ、デブ」

目の前には印藤が右足を軸にして左足を水平に上げていた。どうやら、印藤に腹を蹴られたらしい。ちらほらと、しま模様の何かが見えた気がするが、誠一郎はすぐにそれを記憶から消去した。

「加奈子ちゃんか……春川さんと師匠を知らないかい？」

「あ？ 春川と留子？ あー上の店長室にいたぜ。それより、デブ。俺と対戦しねー？ 今なら完膚なきまでに12ラウンドくらいフルボッコにしてやるぜ？」

「いや、その僕、ゲームはやらないから……」

「げー。つまんねーのは顔だけにしろよなー。ゲームやらないなんて、人生三分の九は損してるぜー？」

誠一郎は人生を3倍も無駄にしていたらしい。それにしても、相変わらずひどい言われようだ。

印藤は初心者相手でもハメ技を平然と使ったり、リアルに蹴りを入れて妨害行為までしてくるので、留子とて油断はできない対戦相手なのだ。

彼女に勝利したが最後。相手が負けるまで何度も対戦を強いられ、それが48時間の耐久レースになった経験から、春川はしばらくゲームを封印した。

だから、この時の誠一郎の選択は正しい。誠一郎は印藤を一人ゲームセンターに残し、上の店長室を目指した。

『いや、昨日は助かったよトメちゃん。オレ、るーちゃんの親父がまさか、あんなのだとは本当思わなかったよ。普段あんな大人しいのに、猪八ちやっかい戒かいみたいになけるのな。頭は沙悟浄さごじょうっぽいクセに』

ふと春川の声がして誠一郎は喜びのあまり、駆け出した。

「やあ、春川くん！ 待っていたよ！ 実は君をずっと探していたんだ！」

「げ！？ マルちゃん！？」

春川は驚きのあまり、イケメンフェイスを孫悟空の様にしわくちやにした。期せずしてここにプチ西遊記が再現されたのだが、誰も気付くよしもない。

「なんだい？ 彼女のお父さん、怖いのかい？」

「え、ああ……まあ、ね」

春川は視線を空中にさまよわせて、大量に顔から汗を噴出した。

「春川くん、男は度胸だよ。殴りあうくらいの気持ちで行けば、きっと向こうのお父さんも君を認めてくれるよ」

笑顔で誠一郎は確かにそう言った。春川は拳を握り締め、誠一郎の顔面に放ってみようか一瞬躊躇したが、誠一郎の言葉でそれは遮られた。

「実はね、僕には高校生のそれはとてもとても可愛い娘がいるんだ

けど」

「ああ、可愛いよね。うん、とっても可愛い」

「あれ？ 知ってるのかい、それなら話が早い。実は昨日、その娘に彼氏が会いに来てたんだけど逃げられちゃってね。君と同じ学校の子らしいんだけど、何か知らないかい？」

「やー……その」

オレです。とはさすがに春川も言えなかった。

「ねーマルちゃん？ そいつ見つけてどうすんの？」

春川はおそろおそろ聞いてみた。

「決まってるじゃないか。高校一年生の娘をたぶらかした男に相應の末路を用意してやるんだよ。瑠奈は世間知らずだからね、騙されているに違いない。そうだ。今日、体術の時間に蹴り技を覚えたんだ。師匠にもいいスジだって褒められてね、的になった力カシが粉々になったよ」

春川は力カシと同じ末路をたどるであろう自分に、恐怖のあまり喉をからした。

CG回収率100%、丸山田 誠一郎

「暴力はイケナイなあ、マルちゃん。相手の子だって、きっとマルちゃんの娘の事、大事に思ってるぜ？ マルちゃんに負けたくないからいさ！」

その言葉で誠一郎の顔が般若の様に豹変した。

「ほう、実の父親である僕よりも大事に？ あの年頃の男なんてのは体のことしか考えていないんだ。一夜限りの快樂の為に色々なウソを平気で付くんだよ！」

今の誠一郎は印藤の可愛らしい瞳と同等かそれ以上にやばかった。『ああ、マルちゃんってこんな顔もするんだな、レアCG回収しちやったよ、オレ』と春川は自分のセリフに後悔した。

「丸山田、それくらいにしとけ。春川を問い詰めたところで何も出てきやしない。それよりも今夜の事なんだが、たまにはこちらから撃って出ようかと思う」

未だ興奮の収まらない誠一郎だったが、留子に見つめられ次第に覇気をなくしていった。

「師匠、どういう事ですか？」

「小泉家当主、小泉 浩之が近くの別荘で各界の著名人を招いてパーティーを開くらしい。小泉は我々同様、日本有数の優良企業の経営者だ」

「パーティー会場で浮かれてるトコを叩くわけ？ さっすが留子！
いい事いうねえ」

気が付けば、いつの間にか印藤が店長室に上がってきており、留子に抱きついていた。

「ちょ、離せ印藤！」

「いーじゃん、減るもんじゃねーし。留子ってちっこくてカワイイから、こうやって抱きしめると幸せになれるんだよなあ」

留子は嫌そうにジタバタと手を振るが、印藤はそれにお構い無しに留子の腰に手を回し、首筋に舌を這わせた。

「やめろ、バカ！ 気持ち悪い！」

まるで猫の様に俊敏に体をひねり、印藤から抜け出すと誠一郎の背中に隠れ、印藤をキツと睨みつける。

「だからお前は苦手なんだ！ そっちのバカとじゃれあつてろ！」

春川を指差し、留子はそっぽを向く。

「春川ってデカ〜イ口たく割には、あっちのほうは意外とお粗末なんだよなあ。股間満足度100%？ ギャハハ！ 俺は全然満足できませんでしたけどー？」

「ちょ、インコちゃん！ 何言っちゃってんの！？ それを言ったらインコちゃんだって——」

「うるせーな。誰が男にしてやったと思っただよ？」

「きゃあああああああ！ その時の話は絶対ダメえ！ もう、黙ってて！」

春川は耳を押さえて地下に逃げて行った。

「あーちよつと、イジメすぎちゃったかな？」

印藤は階段を見つめて、イタズラが見つかった時の子供の様にはばつの悪そうな表情をした。

「おい、お前達。仲良くしろよ。今日はこの4人で小泉の首を取るんだからな。20時までそれぞれ準備を整えて、上の駐車場に集合。私^がが用意しておいた変装用の衣装に着替えておくように、以上！ 一旦解散！」

留子は印藤に捕まらないように、さっさと店長室から出て行ってしまった。

事件の予感、丸山田 誠一郎

留子の運転する車の中で、誠一郎と春川は互いに赤面していた。助手席の印藤が時折ミラーに移る二人を見て容赦無しに笑う。

その度に二人はスカートの裾を握り締め、恥辱に耐えるのだった。

「よく似合ってるぜ？」 優子ちゃん。誠子ちゃんの方は、ある意味それもありだな。デブ専にはウケんじゃね？」

助手席のシンデレラがゲラゲラ笑う中。留子は無言でハンドルをさばく。

「何で」

「何でオレ達、女装してるの？」

春川がようやく口を開いた。誠一郎は恥ずかしさのあまりうつむいて寝た振りをしている。

「それしかなかったし、一度は着てみたいだろ？ お姫様みたいな、かわいいドレスを」

「そんな趣味ねーよ！ お姫様みたいなカワイイ女の子は好きだけどさー！」

後部座席で、恐ろしいくらいに良く似合う、お姫様みたいなカワイイ女の子になった春川が反論した。

「女の子は皆懂れるんだがな」

「オレは男の子！ マルちゃんなんて、ひどいっていう次元じゃないぜコレ！？　せめて、頭に乗せたりボンは取ってあげてよ！　見てて気持ち悪く、いや悲しくなるからさ！」

誠一郎はひどかった。美少女然とした春川に対し、厚化粧にピチピチの純白のドレス。印藤曰く、『ブルドッグの国のお姫さま』をイメージしてメイクしたらしい。

誠一郎は泣きたくなった。そしてまたもこう呟く、『トンデモナイところに再就職したな』と。

「見えてきた、あれだ。あれが小泉の別荘だ」

目の前に見えてきたのは、お化けでもそうな洋館。あるいは、連続殺人事件でも起こって、少年探偵がじっちゃんの名にかけたり、おっちゃんに麻酔銃を使用するかもしれない。そんな感じの洋館だ。

留子は適当なスペースに車を停めると、銃を太もものホルダーに忍ばせ、車を飛び出した。印藤もポケットウイスキーのボトルを取り出し、ポケットに突っ込んで留子を追った。

「……。マルちゃん、付いたぜ？　早くでなよ」

「……。僕、春川くんの方のドアから出たいんだ」

互いに沈黙。しかし、先に飛び出したのは誠一郎だった。

「マルちゃん、ついにデビューしちゃったか……。オレも腹、くくる

かな」

しかし、車から出た春川の目の前に誠一郎はいない。

「ありゃ？ マルちゃん？」

誠一郎は、その背中を追っていた。ここにいるわけがない人物の背中を。その背中がふと足を止めた。後姿だけで解る。黒いドレスと白い素肌が鮮やかなコントラストをなし、丸みを帯びた形のいい下半身に支えられ、大きく揺れる天上の二つの果実。女優の様な顔立ちで美雪は微笑んだ。吉村に向かって。

「待っていましたよ、美雪さん」

囁き合う二人、丸山田 誠一郎

誠一郎はただ立ち尽くした。思考は完全に停止し、ピチピチの白いドレスに嫌な汗が流れて張り付いたが、そんな些細なことはどうでもよく、ただただ目の前の光景を目に焼き付けた。

そして、それは起った。美雪は吉村の黒いスーツに包まれた分厚い胸板に体を預け、二人は抱きしめ合った。

どれくらいの時間が流れたのだろうか。二人はやがてどちらからともなく体を離し、見つめ合い何やら囁きあっている。

「……………」

誠一郎は一步後退り、そこから一目散に逃げ出した。途中、春川とすれ違い、声を掛けられる。

「おい、マルちゃん！ 今、すげー揺れなかったか？ っておい、どこ行くだよ！ 屋敷はそっちじゃねーぞ！」

誠一郎は春川の声を無視して、車の所まで戻ると、荒い息とぐちゃぐちゃになっていた思考を整理した。

「いやいや、まて。そうだ。あれは美雪のそっくりさんかもしれないじゃないか。瑠奈のそっくりさんのーちゃんなんて不良娘がいるくらいなんだ。きつとそうだ。そうに違いない。うん」

誠一郎はとりあえずそういう結論を出し、自分を無理矢理納得させると留子達の元へと駆け足で戻った。三人は待ちくたびれた様子

で、ブルドッグの国のお姫様を睨みつけるが誠一郎はそれを気にも止めず、未だ吉村と美雪の抱き合う姿が脳裏から離れないでいた。

「さて、と。そろそろ始まる時間だな。藤内が偽造した招待状は全員持つてるな？ 始まってすぐ小泉のスピーチがあるんだが、我々はその狙う。私が屋敷の外の木から窓ごしに狙撃する。春川と丸山田は小泉の周辺で射線を確保しろ。印藤は屋敷のブレーカーを落とせ。いけるか？」

サックス色のかわいらしいドレスに身を包んだ留子が見渡した。

「地味な役だな～せめて、御馳走食べてからでもよくね？」

緑白色のきわどいドレスに身を包んだ印藤が、口を尖らせてブーたれた。

「バカを言つな！ お前にそんな時間無いだろ！ もっと緊張感を持て！」

「ちえ～」

印藤は詰まらなさそうに小石を蹴り上げ、それでリフティングを始める。見事な石さばきだった。

「トメちゃん。俺とマルちゃんは少し時間ありそうじゃん、ちょよつとタッパーに御馳走詰め込んでもいいよね？」

「お、俺の分も頼むぜ～！ キャビアの寿司とか生ハムのオードブルよろっ！」

「トメちゃん、それなら別にいいよな？」

「ダメだ」

留子は昼間偵察に来たときに茂みに隠してあった旅行カバンを取り出してこう答えた。

「私の分も頼む」

丸山田家製のドデカイ重箱を突きつけられ、春川は苦笑いでそれを受け取った。

御馳走お持ち帰り作戦開始、丸山田 誠一郎

留子と別れた3人は、入り口で招待状の確認を受ける為、列に並んだ。

「あれ、てかさ。トメちゃん別に中に入らないなら、ドレスなんか着なくていいんじゃないの？」

春川の疑問に誠一郎も同意する。

「そつえば……そうだね。あんな動きにくそうな格好、別にしなくても」

「お前らわかってねーな。女はいくつになっても乙女なんだよ。留子の奴、お前らが着替えてる間に一人で子供みたいにはしゃいでたんだぜ。口止めされてっけど、俺が口を滑らしたとかめかしたら、お前ら解ってるだろうな？」

誠一郎と春川は同時にコクコクと懸命に頷いた。

「お客様、招待状を確認させていただきます」

その言葉を受け、誠一郎は偽造された招待状を受付に差し出した。

「これはこれは。フランスからおいでのマリーダ様ご一家ですね。遠路はるばるようこそいらっしゃいました。今宵はどうぞ心行くまでお楽しみくださいませ」

どうやら、誠一郎達はフランスから来たマリーダ母娘という身分

らしい。

「デイス イズ ア ペン！」

誠一郎は受付を指差してそう言った。一応、フランス語の発音で言ったつもりらしい。春川は『何言ってるんだ、マルちゃんは……』とあきれ返っていた。

「ザット イズ ア ペン！」

春川は受付を指差してそう言った。一応、フランス語の発音で言ったつもりらしい。印藤は『こいつらアホか』とあきれ返っていた。

「ありがとう
M e r c i」

印藤は普段見せたことの無い、愛らしい笑顔で優雅に振舞った。

その様子に誠一郎と春川は『なんでイット イズ ア ペン！』じゃないんだと首を傾げまくる。

「お前らアホだろ」

と印藤が二人を睨みつけるが、すでに彼らの姿はそこにはなく、テーブルの上に盛り付けられた御馳走の前でタッパーのフタを開け、戦闘態勢に移っていた。

「すげーすげー！ こっちは北京ダックだぜ、あっちは大トロの寿司じゃねーか。こっちはうまそうなローストビーフ！ 和洋中そろってんのか！」

「春川くん、まずは順当にお寿司からいこう。ほら、タッパー開けて、流れ作業で行くよ!」

印藤は、二人の息の合った御馳走お持ち帰り作戦を見て、『ありや良い姑と婿になるな』と呟き、ブレイカーの場所へと移動した。

「おい、マルちゃん。たいへんだ。中華がすでにない! 黒いドレスの女がすごい勢いで重箱でかつさらっていったらしい!」

「ええ!? 誰だい、それは?」

「ほら、あそこ!」

春川の指で差された先には、パエリアを重箱に収めた美雪と吉村の姿があつた。

「何やってるんだ……」

危険な人形遊び、丸山田 誠一郎

留子は屋敷から少し離れた所に生えている一本の木の上にいた。狙撃用のライフルをセットし、スコープを覗き見る。

ちょうど、小泉がスピーチする壇上に向けて照準を合わせる。このライフルは特別製だ、弾丸に銀を使用しており先日相対した吉村クラスの相手でも、難なく一撃で仕留めれる。

小泉 浩之は46年を生きるBランクヴァンパイアであるが、不意を狙えばどうということはない。

「あと、54秒……か」

留子は時計を見て、パーティーの開始時刻を確認した。息を落ち着かせ、静かにその時を待つ。『T』が来る前に少しでも後顧の憂いは断っておきたい。小泉を潰すことができれば、この日本は完全にヴァンパイアハンターの勢力下にはいる。

これはチャンスなのだ。

その時、留子は何かを感じた。いつか感じたことがある、懐かしい気配を。ふいにきりきりきりつと耳障りな音が聞こえて、反射的にそちらを向いた。

途端、黒い影が留子を襲った。木の根元から生え出たように、4本の黒い手が留子に覆いかぶさるうとによきによきと伸びてくる。

留子は舌打ちすると、木の上から飛び降り、四本の黒い影の持ち

主と対峙した。

「お久しぶりです、留子お姉さま」

「相変わらず壊れた人形だな、アーノルド」

車椅子に身を預け、生気を感じることが出来ない瞳でアーノルドは口から音を発した。

「今日はあの小うるさいエリーは一緒じゃないのか？」

「エリーお姉さまは、昨日たいへんなお怪我をされましたので……私に留子お姉さまの相手をするように、と」

「誰がお姉さまだ。お前のような弟を持った覚えは無い！」

留子はライフルの銃口をアーノルドに向けて突きつける。

「同じ父親を持つ兄弟なのですから……何かおかしいのでしょうか？」

「私の父親はもういない。田中 聖一郎は死んだ。99年前に死んだ。目の前で死んだ！ だから、『あれ』は違うつ！」

留子は興奮した様子で、顔を真っ赤にして叫んだ。

「私はお前らを一人残らず殺す。それが死んだ兄と姉と、田中家に仕えてくれた使用人達の無念を晴らせる唯一の方法だからだ！」

「そうですか……ですがお父様は今でも留子お姉さまのことを――」

留子のライフルから弾丸が発射され、アーノルドの腹部に命中し、言葉は途中で遮られた。

「しゃべってる暇があるならさっさと来い、最初で最後の兄弟ゲンカだ。お姉ちゃんが遊んでやる、壊れたアーノルド人形だな」

再び留子のライフルが銃口から火を吹き、アーノルドの頭部を貫いた。

コワレタおもちゃ、丸山田 誠一郎

続いて第三射、第四射、第五射――。全ての弾がアーノルドに命中した。

腹部、頭部、左胸、車椅子の車輪を左右一発づつ。計5発。ライフルの装弾数は5発なので、全弾を撃ち尽くしたことになる。

アーノルドは車椅子から放り出され、地面にうつ伏せに倒れていた。起き上がる気配は無い。車椅子を破壊した今、彼には逃げる手段も無いのだ。

「弱いものイジメは嫌いなんだがな」

留子は止めの一撃を加えるべく、ライフルに弾を装填しようとしてライフルに視線を移した。時間にして僅か2、3秒。ほんの少し目を離しただけだというのに、すでにアーノルドの姿はそこにはなかった。

車椅子はすぐ目の前で車輪という足を失い、その本来の役目を果たすことは無い。一体どこへ？

地中で何かが蠢くような、そんな感じの音がして留子は視線を下へと向ける。目が合った。壊れたロボットの生気の無い紅い目が、らんらんと輝き嬉しそうに笑っていた。それを見た留子の背筋が凍り付く。アーノルドが地中を掘り進み、留子の真下から顔を出したのだ。

「どんな躰しんたいで育ったこの根暗野郎！」

留子は後方へ跳躍しつつ、地面に向けてライフルを発射する。しかし、黒い4本の手が一つに重なり、それを受け止める。

「留子お姉さま、もつと遊びましょう。アーノルドは幸せです、楽しくて楽しくてタノシクテタノシクテTANOSIKUTETANOSIKUTE!!」

アーノルドは地中から二本の足を引きずり出し、這い出た。足は黒一色、まさに暗黒の塊で、背中の4本の手も合わせて、計6本の黒い触手が老人の体から生え出ている。

「触手責めとはなかなかマニアックな奴だな。春川が聞いたら興奮するぞ」

アーノルドは背中の4本の手を留子に伸ばした。留子はそれを避けながら携帯を取り出し、印藤に電話をかける。

「私だ。ちょっと面倒な事になった。こっちは問題ないが、計画は中止だ。一旦引き上げるぞ、お前らは車で待機。私もすぐに片付けて向かう」

再度、アーノルドの猛攻。しかし留子はそれを踊るようにかわす。腕の一つが留子の脇をすり抜け、パーティー会場である洋館の壁に直撃した。

『———!!———』

電話の向こうで印藤が何やら叫んだが、留子の耳には入らなかった。洋館の方をちらりと見ると、明かりが一斉に消えており、何ら

かの異常事態が発生しているのがわかった。

「おい、何があった？ 聞こえるか？ 印藤？」

『……………』

しかし、印藤からの返事は無く、唐突に通話は打ち切られた。

「あいつら、大丈夫か？」

再三に渡るアーノルドの攻撃。留子はそれをまたよける。よける。よける。が、唐突に現れた黒い腕に反応が一瞬遅れてしまう。とっさにライフルを盾にしたが、ライフルは碎け留子の体に直撃してしまった。

「ちっ」

余裕でかわし続けていたはずが、急に攻撃を受けた。壊れたアーノルド人形はカラカラと笑い、焦点の定まらない瞳をぐるぐる回し続ける。

「留子お姉さま、楽しい楽しいタノシイタノシイTANOSHII
TANOSHII!!」

アーノルドはいつの間にか、2本の腕を腹から生やしていた。それが命中したのだ。

「こっちは楽しくないんだがな……」

闇に輝く銀の軌跡、丸山田 誠一郎

留子は左右の太もものホルダーに手を伸ばし、拳銃を引き抜き構える。

「やっぱ頼れるのはこいつだな」

今回持参した留子の拳銃は普通の拳銃とは少し違う。フレーム部分とトリガーガード……銃口の下から引き金の部分にかけて折りたたみ式の刃が収納されている。弾を切らした場合、もしくは接近戦を強いられた場合。その時に限ってブレードを起こし、グリップと銃身を水平にして、一振りのナイフへと変形させる。

留子は両手の銃のブレードを起こし、二振りのナイフを装備する。銀色の刃が闇で輝き、それを構え疾駆する様は初夏の夜に鮮やかな銀の軌跡を生んだ。

アーノルドはなおも楽しそうにカラカラと笑い、6本の手を銀の軌跡へと伸ばした。右、左、真下、右上、左下、正面。あらゆる方向からそれらが留子に押し寄せる。

「なるほどな、渡辺がやられるワケだ。ま、あいつにはいい薬だよ。そこそこだけは感謝しといてやるか」

変幻自在かつ、トリッキーな6本の腕を留子は踊るようにかわす。かわしたその刹那に両手の刃で腕を斬り付け、前へ前へと進む。

「今のが体術検定1級の体さばき。そしてこれが杭打ち検定1級の踏み込み——」

アーノルドは視線を下へと向ける。目が合った。留子の獲物を喰らい尽くす絶対的強者の目が、冷たく輝き嬉しそうに笑っていた。アーノルドはカタカタと笑った顔のまま。

真つ二つに裂かれ、血を散らした。留子の右のブレードが真下からアーノルドを切断し、それを背にした留子が振り向きざまにこう言った。

「剣術検定1級、”紫電”。藤内も覚えていない技だ」

留子は聖水を取り出し、アーノルドにかけ、背を向けるとその場を後にする。

「私は『家族』だろうと躊躇いなく殺す。元人間現在バケモノ……ヴァンパイアハンターだからな」

留子の背中ではパーティー会場である洋館の中に消えて行った。

マルちゃんは北京ダックの味、丸山田 誠一郎

突然、パーティー会場を暗闇が襲った。まさかもう留子の狙撃が始まるのかと誠一郎は思ったが、すぐにそうではないことを理解する。

暗闇に咲いた二つでワンセットの紅い花。それはヴァンパイアの瞳だった。この会場のいたる所から輝いており、鈍感が服を着て歩いているような誠一郎でもすぐに理解した。

「マルちゃん。こいつは罠だったみてえだな。オレ達を釣る為の」

次第に暗闇に慣れてきてそれは揺ぎ無い確信へと変わる。受付も、招待客も皆一様に紅い瞳を輝かせて誠一郎達を凝視していた。

「そつだ。み、美雪は!？」

吉村と美雪の姿を探すが、どこにもない。一体どこへ? そう考える間もなくヴァンパイアは目の前のご馳走に群がった。北京ダックよりも食べ応えのありそうなお肉と、食感の良さそうな皮にヴァンパイアたちは我先にと誠一郎に手を伸ばす。

「あひゃあああん! やめて、触らないで! 前も言ったけど今は旬の時期じゃないよ!？」

「何やってんだマルちゃん! 今日、新しい蹴り技覚えたんだろ!？」

「そうか、こいつらの事を、瑠奈をだまして嫁にいけない体にした、

最低ゲス野郎の彼氏だと思えばいいんだ」

『オレはそこまでやってないよ』と春川は弁解したかったが、涙を呑んでこらえた。『しかし、本人を目の前にしてえらい言われようだ』とも春川は思ったが、以前彼も同じことをしているのに、すでに記憶にないらしい。

誠一郎は目を閉じ、精神を集中した。昼間の感覚を思い出す。左足を軸にして、体全体を回すイメージ……。

「今だ！」

誠一郎は、ふわりと舞った。円を描くように、家庭菜園で採れた不細工極まりない大根の様な誠一郎の太い足が、次々とヴァンパイアを打ち砕いてゆく。

「すげえ、マルちゃん、やるじゃねえか！」

しかし、その感動は同時に春川の胸をえぐるような恐怖に変わる。『オレ、あんなの食らったら死んじゃう』。

「大したものよな。我が配下の者どもを一撃で蹴散らすとは」

暗闇で声がした。その声をたどってみれば紫色の和服に身を包んだ男……小泉 浩之が壇上で腕を組み、春川達を見下ろしていた。

「出やがったな！　へへ、てめーなんぞトメちゃんが一瞬でハートを狙い撃ちだぜ！」

春川はビシツと指を差すが、小泉が狙撃される気配は無い。

「ありや？」

小泉はそれを別にも止めなかったが、春川のドレス姿を見て驚きの声をあげた。

「む、お前は確か昨日公園で出会った小僧……なんと、女であったか」

「は、春川くん。ここは逃げよう。様子が変だ。うかつに行動しない方がいい！」

「春川？　ではそちらのご婦人は……そうか、昨日公園でワシとやりあった……印藤　加奈子とかいう娘か」

春川は『インコちゃんがコレ聞いたら、かなりヘコむだろうな』。だってブルドッグの国のお姫様と『にされちゃったんだもん』と印藤がその場にいらなくてホッと安堵した。

「その人は丸山田　誠一郎さんです。印藤　加奈子さんではありませんよ」

また暗闇で声がした。その声の主は黒いスーツに身を包んだ体格のいい男……吉村だった。吉村は誠一郎達の後ろから現れ、小泉の目の前までゆっくりと歩き、小泉を見上げる。

「小泉　浩之。『丁』からの命令です」

「ほう？　あの田中がワシに命令とな？」

吉村は満面の笑みを浮かべてこう言った。

「死ね」

ヴァンパイアVSヴァンパイア、丸山田 誠一郎

吉村の体は黒く染まり、研修初日に見せたあの姿に変身すると、小泉に襲い掛かった。あの禍々しい程長く伸びた爪が、小泉の喉下を目掛けて差し出される。

だが小泉は微動だにせず、口元の髭を歪ませ笑った。

「ムダな事を」

吉村の爪は根元から砕け散り、体ごとパエリアの盛り付けられた皿に突っ込むと、エビやムール貝が誠一郎の目の前を勢い良く飛んでいき、誠一郎はもつたいたない精神から、鮮やかに空中を舞い、イカのかたまりをお口でキャッチした。トップブリーダーもびつくりの芸当である。

「田中はこんな青臭いガキを刺客としてよこしたか……ワシもナメられたものよ」

突然始まったヴァンパイア同士の戦いに誠一郎と春川は顔を見合わせた。誠一郎の口からはみ出たイカげそは、緊張感のかけらも感じさせないが事態は深刻であった。

あの吉村が一瞬で打ちのめされたのだ。三日前にあれだけでこずった相手が、一瞬でパエリアまみれになっている。つまりは、春川と誠一郎が二人で挑んでも勝てるはずがないのだ。

「マルちゃん。逃げるぞ、ありやバケモンだ。あのヨッシーがコテンパンのケチヨンケチヨンだ。脳ある鹿は妻を隠すっていうからな」

意味が違う上に、漢字もところどころ間違えているが、おそらく能ある鷹は爪を隠すといったかったのだろう。妻という単語に誠一郎ははっと思い出す。

「吉村さんと一緒にいた美雪は、一体どこへ消えたんだ？」

誠一郎は吉村に近づこうとするが、吉村は起き上がり、再び小泉の元へ駆け出した。

「マルちゃん！ んもう、何でそうマイペースなのよ！ そこんこは親子そっくりだぜ！」

春川は誠一郎を追おうと駆け出したが、ドレスの裾をつかまれ勢い良くずっこけてしまう。

「痛えーよ！ 何様だこの野郎！」

「俺様だ、この野郎」

突然現れた破壊的な視線に春川は可愛い悲鳴を上げた。

「なんだ、インコちゃんかよ！ 驚かすなよな」

『出たと思っただぜ』とあやうく口を滑らせかけたが、なんとか喉元に押し留めることに成功し、春川はホッと息をついた。

「留子と連絡がつかねー。しゃあないから一旦車に戻ったけど、そこにもいなかった。屋敷の様子がおかしかったから、お前らの服と武器を持ってきてやった。なんか起ってんのは解ったからな」

印藤は倒れた春川の目の前に、着替えとステーキを放り投げると、小泉と吉村を見た。

吉村が素早い動きで迫るが、小泉の体に触れることができず、小泉の振るった掌が吉村を袈裟懸けに斬った。一目で解った。吉村は負ける。

「さーて、どうすっかなあ。横殴りはネットゲじゃルール違反だけど、漁夫の利を狙うにしても、あれじゃすぐカタが付きそうなカンジだし……」

印藤はポケットウイスキーのボトルを取り出し、舌なめずりをする。

「よっしゃ決めた、行くぜ春川。あいつをやっちまおう」

初めての共同作業、丸山田 誠一郎

印藤は小泉達の前に向かおうと思ったが、春川がまだ着替え終わっていない事に気が付いて足を止める。

「おい、さっさと着替えるよ、別に見られて困るようなモンじゃねーだろ？」

「見られたら困るし、恥ずかしいの！　すぐ着替えるからまってよ、男の子は着替えに時間がかかるんだから！」

春川は印藤をちらりと見てまた一言喋った。

「オレ、向こうの隅で着替えるから、のぞかないでよ？　のぞいたら大声出すからね！」

「のぞくかボケ」

春川はそそくさと、テーブルの影に隠れて着替えを始める。

印藤は舌打ちすると、前をどすどす走る誠一郎の頭を踏み台にして小泉と吉村の間に割り込んだ。

「よう、小泉のジジイ。ご機嫌麗しそうだな。んで、そっちでフルボッコされてんのは吉村だっけ？　情けねーな。二日前やりあったババア幼女のほうがガッツあったぜ？」

吉村は起き上がると印藤に目を向ける。

「あなたは……印藤 加奈子。これをチャンスに私を殺すつもりです
ね？　しかし、そうはいかない——」

「ちげーよ、ハゲ。俺らの本命は小泉のジジイだ。簡単に浮気する
ほど加奈子ちゃんの尻は軽くねーのよ」

「そうそう、インコちゃんってば胸は残念だけど、お尻のほうはな
かなか……」

着替え終わった春川がステーキを担ぎ、印藤の後ろに付いた。

「触ったらまずてめーを殺す」

印藤が恐ろしい形相で春川に微笑えむ。

「……簡単に浮気しないんじゃないのね、インコちゃん」

「共同戦線……ということですか」

吉村は立ち上がり、体勢を整えると再び左右の爪を鋭く伸ばした。

春川はステーキを構え、踏み込みのタイミングを待つ。

印藤はポケットウイスキーの蓋を開け、無色透明の液体をまるで
風呂上りにビールを飲むおっさんの様に左手を腰に当て、飲み干し
た。

「相変わらず、甘ったるい匂いだね、それ、なんだっけ？」

「Zea^{ジーロット}l^トotだよ。んじゃあ、行くか」

印藤の合図に春川も元気良く答えた。

「おうよ、ヴァンパイアハンターとヴァンパイアの初めての共同作業だ。トバシて行くぜ！」

小泉はそれを見て不敵に笑った。

「面白いな。敵の敵は、敵であつたか……」

春川はそのセリフが終わる前に踏み込んだ。小泉が掌を振るう寸前、吉村が逆方向から左手の爪を付きたて、串刺しにしようとする。

小泉は右の掌でステーキを受け、左の掌で吉村の爪を受ける。ステーキは炸裂するが小泉の掌で止まったままで、吉村の爪もまた左の掌で止まっていた。

「良い突きだ。小僧、やりおるな。だがその程度ではワシを撃ち抜く事は出来んぞ」

「女の子はやっぱ元気が一番だよな、頼むぜインコちゃん！」

印藤は小泉の腹に拳を打ちつけた。ただの正拳突き。されどただの正拳突きではない。Zero^{ジロット}で強化した筋力は、屋敷の壁を障子^{しょうじ}の様に軽々と数枚ブチ抜き、小泉を別荘の庭に叩きつけた。

「加減しすぎちまったかな」

印藤はそう呟き、風通しのよくなった屋敷から庭に出て小泉の後を追った。

年寄りの冷や水、丸山田 誠一郎

春川も印藤に続き、庭へと走り出し吉村もまたそれに倣う。

誠一郎も吉村を追うが、ドレスの裾がテーブルに引っかかり、盛大にヘッドスライディングをした。転んだ瞬間に布が裂ける音が聞こえたので、下半身に目をやると、超ミニスカ状態で誠一郎のブタのキャラクターがプリントされたトランクスが丸見えだった。

そういえば、留子がかかなり大金をはたいてレンタルしたのだという事を思い出す。初任給は大丈夫なのだろうか？ という不安を押しのけ、誠一郎は立ち上がると印藤達の後を追った。

「加奈子ちゃん、吉村さんはどこだい？」

庭にたどり着き、まず目に付いたのが印藤の華奢な背中だった。

吉村から聞き出さねばならない。妻、美雪はどこへ消えたのか。美雪とは、一体どういう関係なのか。

「デブ、あぶねーから離れてろ」

印藤は振り向かず、ポンと誠一郎を左手で押しつけた。ハズなのだが。

「あ、やべっ。今、Zea^{ジロット}loitやってんだっけ」

振り向いた印藤は、上半身ごと壁にめり込んだ誠一郎に向けて舌を出し、『やっちゃった』と照れ隠しして戦線に復帰した。

庭では、春川と吉村が挟み込む形で小泉と対峙している。小泉は目をつむり、微動だにしない。

「以外に手こずる。特に、印藤 加奈子。その薬物はやめると忠告したはずだがな」

「うるせーな、そういうのを、年寄りの冷や水って言うんだぜ。始めたゲームはどんなクソゲーでも俺は最後までやるし、プレイスタイルも変えない。勝つまでやる！ 何度でもな」

「うわ、なんだかインコちゃん、最近カッコいい」

「よかるう。なら、ワシも見せよう。肩がこってしかたがない、若い者には体力で負ける」

小泉は目を見開くと、両の手の平を天に向けた。

「お前達には、ワシの攻撃手段が理解できていたか？ もっと解りやすいように見せてやろう」

その刹那に、小泉の手の平から生え出た黒い刃。長さは3メートル程はあり、その刃に触れた木が一瞬で切断された。

「これがワシの肉体の一部ともいえる剣。『黒魔刃』^{こくまじん}。太さや長さ^{たなか}はワシの意思一つでなんともなる。この形態にしたのは田中^{いちろう} 聖一郎とやり合った時以来か」

「田中？ 田中って、トメちゃんと同じ名字だよな。何かカンケーあんのか？」

「それは本人に直接聞くといいでしょう」

吉村が親指を向けた先には、こちらに向かって走る留子の姿があった。

「とにかく、これで4対1。役者はそろったわけです。さっさとケリをつけましょう」

地球と女の子（インコちゃんは除く）に優しく、ヤローとヴァンパイアに厳しく

「黒魔刃ねえ。中二くせー（笑）なネーミングセンスだな。ある意味ウけるわ」

印藤は地面に右の拳を叩きつける。叩きつけられた地面は真つ二つに割れ、小泉の足場を崩した。

小泉は足場の崩壊から逃れるため、屋敷の天井へ飛び移るとそこから春川に向けて右の手の平を向ける。

春川は迫った小泉の黒魔刃を、ステーキの先端で突き返し、弾く。

「オレのモットーは、地球と女の子（インコちゃんは除く）に優しく、ヤローとヴァンパイアに厳しくだぜ？ あんたにやダブルで厳しくいくぜ！」

「あのクソ野郎。俺を省きやがった……覚えてろよ」

印藤がこつそりと呪いの言葉を小泉に向かって踏み込んだ春川の背中に放ったが、それよりも早く背後から春川を小泉の黒魔刃が貫いた。

春川は空中で停止し、そのまま墜落する。幸い、軽く肩をかすっただけのようで元気よく起き上がると、やかましく抗議の声を上げる。

「いでえ！ 何すんだよ、インコちゃん！ オレがお嬢にいけない体になったらどう責任とってくれるのさ！」

「俺じゃねえ！俺がお前やるなら、後ろから刺さずに鈍器で頭蓋をド派手に砕いてるわ！」

春川は『それもそうか』と納得し、背後から貫いた物が小泉の黒魔刃であつたことをそこで理解する。

「小泉 浩之の黒魔刃は長さも、太さも形状すらも変形させる厄介な代物だ」

合流した留子が、印藤達の背中に向けて話す。その声につられるように三人は顔を留子のほうに向けた。

「正直、正面からマトモにやり合うのは不利だ。例えヴァンパイアとヴァンパイアハンターが手を組んだところでな」

留子は吉村の目を見てそういった。留子はすでに状況を理解していたのであろう。吉村が仲良く一緒に戦っている状況に一瞬驚いたが、相手が小泉 浩之ならば話は解る。

『お父様の命令は絶対』だからだ。確実に命令を完遂するならば、互いに利用しあつた方がいい。ただ、何故アーノルドを小泉に差し向けなかったのかは、疑問ではあるが。

「お前ら、ヘタに近づくなよ。小泉はBランクヴァンパイアだが、限りなくAに近い。いや、そもそもランクで考えても意味が無い相手だ。黒魔刃は私が引き付ける。スキができれば一気に踏み込め。お前らならできるだろう？」

「トメちゃん、あぶなくねーか？ なんなら、オレも一緒に！」

留子はフッと軽く微笑み、背中を向ける。

「足手まといだ」

留子は駆けた。

そうだ、極力危険な仕事は私が引き受ける。例えその先に死が待っている。元はと言えば、父親のまいた種なのだから、この種は娘である私が一つ残らず刈り取る。

それが巻き込んでしまったあなた達への、贖罪になるとは思えない。

——それでも。

最良の選択、丸山田 誠一郎

「その暑苦しいヒゲ面も今日で見納めだ」

右手に拳銃。左手に刃を起こした拳銃を装備し、留子は小泉に向けて拳銃の引き金を引いた。

小泉は右の黒魔刃を盾にして、銃弾を弾くと留子に向けて左の黒魔刃を放つ。

留子は左のブレードでそれを側面から突き刺し、受け止める。留子の眉間のわずか数ミリ前で止まった黒魔刃をすり抜け、留子は小泉の眼前に迫った。

再び迫った右の黒魔刃を乗り越え、小泉の両肩に着地すると、留子は右の拳銃を小泉の口内に押し込め、鉛のフルコースを見舞う。全弾を撃ちつくし、後退間際にデザート代わりの手榴弾を小泉の口に放り込んだ。

「食通のお前でも味わったことが無いだろう？ 鉛弾のフルコースは」

留子のセリフと共に爆砕。周囲は煙が一杯に立ち込め、視界は0になった。

「さっすがトメちゃん。引き付けるどころか、一人で平らげちまったぜ」

春川は煙を右手をうちわの様にしておおぎ、払いつつ留子の元に

歩いた。

「近寄るな！」

留子の激しい口調に押され、春川はその場で固まる。直後に留子の体を黒い刃が貫いた。

「トメちゃん！」

煙の中から小泉が姿を現し、もう片方の黒魔刃を留子に突き刺す。

「油断したな、最強のヴァンパイアハンター田中 留子」

「ああ、油断したよ……」

留子を貫いた黒魔刃は、右胸と左足にふかぶかと突き刺さり、留子のドレスを赤く染める。

「その程度のチャチな火力ではワシを殺すことはかなわんぞ？」

「わかってるさ。私の銃器では、印藤や春川のような瞬間的な火力は出せない。しかし、印藤や春川にはお前の黒魔刃を見切る程の技量はまだ持ち合わせていない。だから」

留子は自分を貫いていた黒魔刃をそれぞれがっしりと掴み、離すまいとする。

「こうしてやればいい」

両手から溢れる熱い雫を地面にたぎらせ、小泉を睨みつけ叫ぶ。

「今のうちに思い切りやれ、印藤、春川！」

呆然と立ち尽くしていた春川を印藤が怒鳴り散らし、行動に移る。

「前と後ろから挟むぞ、春川！」

「お、おうよ！ トメちゃん、少しガマンしててくれよ！ 後でもっと気持ちいい事してやるからな！」

留子は薄れ行く意識の中で、春川のセリフに『セクハラだ、バカ者』と返したが、それは言葉にならず、口から空気を少量放出しただけに過ぎなかった。

吉村が、留子の手からほころびかけた黒魔刃を、留子の目の前で握り締めた。

「勘違いしないでください。チャンス逃したくないだけです。あなたの命などどうでもいい事ですが、彼らには100%の力で小泉を屠ってもらわねばなりませんからね」

留子は吉村の凶悪な顔を見て、少々唇を吊り上げた。

火事場のバカ力、丸山田 誠一郎

春川が走った。走って走って、走る。一秒でも早くケリを付ける為に。ふいに、印藤と目が合う。目で頷き、春川は少しスピードを落とす。

印藤が小泉に迫った。両手の拳を祈るように組み合わせ、小泉のアゴを打ち上げる。

空中に打ち上がった小泉を追いかけるため、屋敷の屋根に飛び乗って、そこからさらに跳躍する。印藤は夜空を舞い、体を思い切りひねると、その遠心力を利用して右の拳で渾身の一撃を繰り出し、小泉の心臓を叩き潰す。

印藤の一撃を受けた小泉は、重力に引かれ、墜落する。そしてその墜落地点には春川がいた。

「ちょっと早い誕生日プレゼントだ春川、焼くなり煮るなり貫くなり、好きにしゃがれ！」

「せめてリボンくらいつけてよね、まあ、似合わないだろうけどさ」

迫る誕生日プレゼント――小泉の顔面目掛け、春川は駈ける。

脳裏に二日前、留子との個人授業で習った杭打ち検定1級の動きをトレースする。踏み込み、貫く。簡単な動作かつ単調な作業である。

しかし、目標に命中させる角度や力加減には相当な技量が伴い、

それは一朝一夕で獲得できるものではない。

検定1級所持者が使用できる、専用杭打ち機。バスターステーク杭打ち検定1級はそれを扱うための技術ともいえた。

もしそれを今自分が扱えていたら？　きっと留子があんな姿にならずに済んだのではないか？

春川は後悔していた。昨日、丸山田家に行ってショックを受け、寝れなかった自分を落ち着かせるため、一昨日の記憶をなぞり、何度も何度も反復練習をした。夜が明けるまで。

それでも、まだ足りない。当然か、しかし。

実戦というのは練習の何倍も経験値を得ることが出来る、らしい。都合がいいようだが、今なら出来る気がした。いや、今だから出来るのか。

春川は踏み込み、貫く。一昨日の記憶の中の留子の動きと寸分狂わず同じ様に。それを受けた小泉は、煙を上げて爆ぜる。

そこを空中から帰還した印藤が間髪入れずに聖水を吹きかけた。

「じゃあな、小泉のジジイ。クソつまらねー思い出ありがとよ」

小泉はみるみる灰になっていく。足、腕体の先端からまるで溶けるようにして黒い粉となって崩れ落ちる。

「終わりましたね」

それを静かに見守った吉村が、背を向け立ち去ろうとするが、ふと立ち止まった。

「ああ、そういえば」

振り返ってニヤリと嫌らしく笑う。

「私を殺すなら、今のうちですよ？ もっともあなた達にそんな暇はないでしょうがね。ホラホラ、早く大事な仲間を助けてあげないと」

それだけ言い残して吉村は闇へと消えて行った。

「トメちゃん！」

「留子！」

春川と印藤が駆け寄り、留子を抱き起こす。留子の意識は、ない。

「春川、心臓はちゃんと動いてる。ブチョーが入院してる施設に連れて行くぞ。応急処置頼むわ。オレはデブ捕まえて車、回してもらう。ゲームで車運転した事あるけど、実際にキノコとか赤い甲羅とかはでこねーもんな。デブに任せるわ」

「あ、ああ。わかった」

印藤が屋敷の方へ向かったのを見届けてから春川は一人呟いた。

「一晩付き添ってもらったってのは、オレのほうだったのによ……。トメちゃん、ごめんな。オレ、一昨日習ったようにやってみただ

ぜ。杭打ち検定1級の踏み込みと突き。あれでよかったのかなあ？」

春川の問い掛けに留子が答えることは無かった。

決戦は日曜日、丸山田 誠一郎

「まったく、あなたはつくづく面白い人ですね、丸山田さん」

吉村は壁から顔を生やした誠一郎を見て、笑いながら言った。

「吉村さん……！ い、一体、あなたは美雪とどういう関係なんですか！？ なんでここに、美雪が……！」

「男と女の関係、ですよ」

笑顔を消した吉村が真剣に答えた。

誠一郎は青ざめて、ぶるぶると震える。それは怒りなのか、興奮からきたものなのか、あるいは美雪が去ってしまう恐怖からなのか。

「冗談です」

真剣な顔がまたほころび、爽やかな笑顔を浮かべた吉村がそう訂正する。

「少し利用させてもらっただけです。何も知らない一般人を連れて歩けば、警戒もされにくいでしょうから。ただ、まさか重箱を持つて料理を根こそぎ持って行ったのには驚かされましたけどね」

吉村は肩をすかせて笑った。

「『こんなおいしいもの、私一人で食べるなんてもったいない。あの人できつと食べたがるわ』と言ってね。とどめに笑顔で『あ

人がおいしそうに食事する時の顔を見るのが毎日の楽しみなんです
なんて言われたら、男と女の関係になんてなれるわけないでしょう
？ 本当、あなたには負けますよ」

「美雪が……？」

「もつと奥さんを大切にする事ですね。あなたの転職が決まって深夜のコンビニのバイトをやめたそうですし、愚痴を聞かされるこっちの身にもなつて欲しいもんですよ、まったく」

「コンビニ？ バイト？」

「純粹なのもけっこうですが、鈍いのがあなたのウィークポイントですね。まあ、とにかくあなたは愛されてますよ、私と違って家族にね」

「そう、だったのか……」

誠一郎の鈍感さが招いた誤解は、ここにきてようやく氷解する。
以前から疑っていた夜遅い帰宅も、すべて家計の為。誠一郎の思い込みだったのだ。

「彼女には車で先に帰ってもらいました。照明が落ちた時にね。さすがにあれ以上は巻き込みませんでしたから、一応紳士ですからね、私」

「吉村さん……」

「それでは、私はこれで失礼します。また会いましょう、丸山田さん。おそらく次で最後になると思いますが、ね」

吉村は身を翻し、誠一郎の元を去っていく。その直後に背後から衝撃を受け、誠一郎は床をダンゴムシの様に転がった。

「いたいたー。おいデブ喜べ。お前の数少ない腕の見せ所だ」

印藤に蹴られた尻をさすり誠一郎は立ち上がる。

「留子がやばい。早いとこ車を出してくれ」

「師匠が？」

誠一郎は印藤に急かされ、駐車場に向かうと車を出し、留子と春川を乗せて渡辺が入院している医療施設へと車を走らせた。

印藤のナビの元、施設に到着すると留子は手術室に運ばれ、すぐに治療が始まり、一同は手術室の外で時が流れるのをただ待つしかなかった。

すでに日付は変わり、曜日は土曜日になっていた。『Ｔ』の来日は明日、日曜日。留子が倒れた今、誠一郎達に打つ手はあるのか、それもわからない。三人はただ沈黙を守り、留子の帰還を信じて待った。

外伝

むしゃくしゃしていた。とにかく、むしゃくしゃ。

美雪は今もなお、怒りの収まらない様子で駅のエスカレーターに乗り、奥歯を噛み締めていた。

理由は二つあった。

一つは、大学の友達で紹介で、無理矢理引き合わされた男に会って見れば、白昼堂々ホテルヘリツゴーという運びになり、すでに待ちきれなくなった男がホテルの入り口で抱き付いてきたので、股間を蹴り上げ、鳩尾みぞおちに左肘を叩き込み、首筋に手刀を打ち、間接をキメて男の財布から諭吉さんを3名救出して、その場を去った。

この前ノートを見せてもらった見返りとしては分が悪すぎる。美雪はミニスカートの裾を掴み、イライラをごまかそうとしたが目の前の男が余計にイライラさせた。

それが二つ目。エスカレーターの左端でバカみたいに太った体を横たわらせて、通せんぼをしている。

関西ではエスカレーターに乗るとき、右に寄せる。ここは大阪。それも天王寺の地下鉄だ。乗り換えの為に急いでいるというのに、男はのっそりと立ったまま動こうとしない。

真夏の、それも昼間とあって暑さはいよいよクライマックスを迎え、大阪の熱気が美雪の怒りをさらに加熱させる。

とうとう耐え切れず——蹴り飛ばした。

だが、男の脂肪が衝撃を吸収したのか、手応えがあっても何の変化もない。4、5発の蹴りをいれても反応がない。テコンドー3段。柔道5段。合気道2段。漢字検定4級。そろばん8級的美雪が放った蹴りを受けても、だ。ちなみにそろばんは小学生の時、母の勧めで習い始めたが、次第に飽きてしまい、そろばんをスケボーのように乗って遊んでいると、母にドツかれた苦い思い出がある。子供の頃的美雪は、とてもやんちゃな女の子だった。いや、それは今も変わらないか。とにかく自分の蹴りを受けて平然としているのを美雪は気になって、横から男の顔を覗き込む。

——気持ち良さそうに立ったまま寝ていた。やがて、エスカレーターは終着点に到達し、男は床の隙間に足をつまづかせてしまい、事もあるうか美雪の上にのしかかって来た。

重さと男の汗で不快感は急上昇である。それでも未だ男が眠っているのは美雪を感心させた。その寝顔は或いは天使の様に見えてしまっから不思議だ。ふと美雪は駅の時計に目を向ける。

授業に遅れるのは確かだった。大学4年目の最後の夏。それも試験前。一番大事な時であるというのに……。

美雪は憎憎しげに男の顔を踏みつけ、ミニスカートである事を忘れ、風を纏って駅のホームへ滑り込んだ。

誠一郎35歳。美雪21歳。これが二人の出会いであった。

大学での授業を終え、ようやく安くてボロいアパートの自宅に帰り着く。このアパートは『出る』事で有名だった。その為家賃は格

安で、階段もギシギシとか、ミシミシ言つてスリル満点なので、無料で遊園地のアトラクションを体験できると思えば怖くない。二階の『西村』という表札の前までたどり着き、美雪は、『ただいま』と言つて中に入った。だが、それに応える者は誰もいない。

西村 美雪には家族がいなかった。中学に進学して間もなく両親とも事故で亡くなり、祖父母に育てられたが、その祖父母も美雪が高校を卒業すると同時に両親の元へ行つてしまった。

独りなのだ。大学には奨学金を利用して通っているが、将来を特に考えているわけではない。適当に遊んでいい男を捕まえて……そんな軽い気持ちで4年目を向かえてしまった。

自分の体には自信があつたし、大学でもミスキャンに選ばれた自分だ。進路に芸能界も視野に入れて良いかもしれない。そんな事も考えていた。

「あ、マヨネーズ切らしてるやん。ソースも……買つてこなあかなあ」

自宅でお好み焼きを焼こうと思つて台所に立つた美雪だったが、買い忘れの品があつたことを思い出し、すでに暗くなった大阪の街に飛び出した。

一番安いスーパーを頭の中から弾き出し、年季の入ったママチャリにまたがって急行する。『あと20年もすれば立派な大阪のおばちゃんの仲間入りやな』。と多少苦笑いし、ペダルをこぐ足に力を入れて前に進む。

近頃はヘンな人が多い。この前も夜の公園で男を待ち続けていた

ら、赤い目を輝かせた何人かの男が美雪を取り囲んで来たのだが、すべて殴り倒してやった。そのあと、大手スーパーのフジタ二の制服を着た若い女性がやってきたのだが、無視して家路に着いた。

チカン対策のために身に付けた護身術も、今やプロの格闘家顔負けの実力を有するようになっていいる。案外この道でも食えるかもしれない。そんな事を考えている間に、目的のスーパーフジタ二が見えてきた。

スーパーフジタ二で目的の物を手に入れると、再び自転車にまたがろうとするが、男が美雪の前にやってきてそれは遮られる。

「昼間のねーちゃんやないか。えらい効いたでえ、ねーちゃんのパンチ。俺はパンチよりパンツを拝みたいんやけどなあ。治療費慰謝料交通費……全部、体で払ってもらいましょうか」

悪徳金融業者の様な口ぶりで昼間の男が美雪の体に触れる。その手を振りほどこうとした時だった。

「ぼ、僕と付き合ってください！」

途端に周囲の視線が美雪たちに集まる。見れば……昼間蹴り倒した男だった。男の顔はなぜかきこちなく、その上何故か嫌そうな顔である。

「ええぞー丸山田！ その女口説いたら、立山さんとの取引成立やわー！」

男の後ろには顔を真っ赤にして、酔っている中年の男が二人。たぶん、遊ばれているのだらう。大阪のおっさんはこういう事を平気

でさせる。さらに、明日になったら『忘れてもったわあ、堪忍な』くらい言うかもしれない。前にお金目当てで付き合った彼氏が、そんな事をしていたのを美雪は思い出した。

「ぼ、僕と――」

丸山田と呼ばれた男は、昼間の絶対防御の脂肪を展開させる間もなく、運の悪いことに男の拳を急所に何発か受け、崩れ落ちた。

「おい、ワレ。この女はなあ。これから俺のもんになるんや。ちょいだまつとれ」

「誰があんたのもんになるんよ」

美雪のセクシーな足が夜のミナミの街で閃く。右足による上段蹴り、さらに体をひねり、左足で下段蹴りを見舞い、止めにサマーソルトキックでシメた。大学のゲーム好きな男友達は、この一連のコンボを『鳳凰脚』とか『美雪乱舞』とか勝手に名付けてきて迷惑していた。

その超必殺技を食らった男は、白目を剥いて気を失っている。

丸山田はというと、地面にのびていた。振り向き、さつき野次を飛ばしていた中年男を探すが、すでに姿を消した後だった。

「じゃあないなあ」

美雪は一息つき、丸山田の重い体を担ぎママチャリのかごに無理矢理突っ込んで、自宅へと運ぶ。

とんでもない重労働だった。美雪は自分でも何をやっているのか解らない。なんとなく成り行きで……というよりも、この男があまりにも哀れに見えてしまったのが一番の原因か。

引越しのアルバイトで、冷蔵庫を一人で運んだときよりも手応えが合った。若い女が中年の男をかついでアパートに連れ込む。嫌な噂が立ちそうだったが、気にしない。どうせこの男が目覚めたら、すぐに帰ってもらうつもりだったからだ。

一仕事終え、一息つく途端にお腹がなってしまった。思い出したようにフライパンでお好み焼きを作り、じゅっじゅっとこんがりと焼けてきた獲物を見て、美雪のテンションは上がる。

冷蔵庫の中からビールを取り出し、宴の準備が整った。いざ、出陣。

「あれ？ どこいったんやろ、私のお好み焼き……」

食らうべき獲物がフライパンの上になかった。ふと背後で気配がしたと思ったら、美雪は丸山田が一口でお好み焼きを丸呑みした瞬間を目撃する。

「ごちそうさま」

満足そうな笑顔。なんということだろう。一瞬で美雪のテンションは急降下する。

「んー、でもイマイチだなー」

丸山田はMY爪楊枝を胸ポケットから取り出し、イマイチと言う。

代わりに美雪の怒りが燃え上がった。

「何食ってんのよ、おっちゃん！」

「牛乳。入れてご覧。きつとおいしいよ？」

丸山田はあくまで冷静なまま、アドバイスする。『大阪人にお好み焼きのアドバイス入れるなんてええ度胸やんか！』あえてこの挑戦を受け、言葉通り牛乳を少々加えてみた。

これは西と東のお好み焼きを掛けた、天下分け目の大合戦である。いや、ここは大阪なので大阪冬の陣か。でも、これがある意味お好み焼き革命ならば、大化の改心かな？ 美雪は同じ女として、小野妹子を尊敬していた。が、当然美雪の歴史の成績は3を常に下回っていたので、上の想像も誤解を招かないように、大化の改心に小野妹子は関わっていないし、小野妹子は男性である事をここに明記しておく。

美雪は焼き上がったお好み焼きをさつそく口に運び、大阪夏の陣の開始をその艶やかな唇の動きで宣言される。勝つのは東か、西か――。

言葉が出ない。丸山田の言葉は正しかった。ふんわりと焼きあがったお好み焼きは、美雪を未知の領域へと誘う。食感の四重奏。天国への階段。様々な単語が美雪の頭に浮かんでは消える。

「おっちゃん、あんた何モンなん！？」

振り向いた誠一郎はいつの間にもやら寝てしまっていた。あいかわらず、天使の様な寝顔だ。お腹が満月のように膨らんでおり、夜の

月光が誠一郎の顔を照らす。

その寝顔に、一瞬見とれる。何故だか自分でも解らないが、見入った。

「ママ、これ超おいしい！　なんだっけ、北京ダック？　ママの分ももらっていい？」

「いいわよ」

あれから17年経った。今夜手に入れた戦利品に愛娘瑠奈はさっそくがつついていた。誠一郎との愛の結晶『瑠奈』。一度、瑠奈に名前の由来を聞かれた時、『パパと出会ったのは月のキレイな夜のことだったの。だから月の女神様の名前を付けたのよ』と説明したが、実際そうではない。

誠一郎のお腹が満月に見えたからだなんて言ったら、瑠奈は怒るだろうから、真実は隠しておいた。

妻に、母になった事で美雪は変わった。料理の腕も、誠一郎を見返したい一心で格段にうまくなった。

美雪もまた、家族を愛しているのだった。誠一郎が職を失い、ヴァンパイアハンターに転職してもめげないように、美雪もまた。

そして、その日も美雪は誠一郎の帰りを待ち続けたのである。ドデカイ重箱に入った中華料理と一緒に。

マルちゃん大地に立つ、丸山田 誠一郎

「キモイ。マジでキモイ」

丸山田 瑠奈は玄関先に転がっている物体を発見して、そう呟いた。土曜日の早朝。朝5時23分。清々しい休日の始まりに不快極まりない思いをしてしまい、郵便受けの前で朝刊を片手に素振りする習慣を、ついつい忘れてしまった。

しかも、これが自分の血を分けた父親だというのだから、お隣の宮村さん家の犬小屋に放り込んで引き取っていただくわけにもいかない。

幸せそうな寝顔のまま、誠一郎は玄関の前に転がっていた。それだけならまだいいだろう。問題はそのビジュアルにあった。顔は言わずもがな、着ている服が問題だ。

ピチピチの純白のドレス……それも所々セクシーに破けており、生活指導の常習犯である、クラスメイトのアミちゃんよりも際どいミニスカ状態であった。というか、見えている。

せつかく最近少し見直し始めていたのに……瑠奈は愕然とする。しかし、このままにしておくわけにもいかない。なによりご町内の、いや銀河規模の恥だ。

「ちょっと、親父！ 起きてよ！ こんな所で寝てたら、廃品回収の人に回収されるよ！ それか次に起きたら、ハム工場の生産ラインに乗ってるかもしれないよ！？」

父親に向かってこんな起こし方をするのは、日本中探しても丸山田瑠奈くらいのものだろう。ゆすつても、叩いても、水をかけても、灸^{あぶ}つても、起きる気配はない。

仕方が無いので、瑠奈は魔法の呪文を唱えた。ちなみに、瑠奈は魔法少女ではないが、かわいい猫のような使い魔が契約にやってきた事はある。執拗に契約を迫ってくるので、母直伝の力カト落としをお見舞いしたら動かなくなった。

捕まえてネットオークションで売り飛ばそうと画策したが、惜しいことに逃げられた。一体、あれは何だったのか？

「今日の朝ごはん、ママがお好み焼き作るって言ってたよ」

その言葉でスイッチオン。誠一郎はまるで機動戦士のようにカメラアイがバツチリと点灯し、大地に立つ。そして、巨体を揺らしながら格納庫^{わがや}へ入って行くのだった。

「ママはあの親父のどこを好きになっただんぞ……」

通常の3倍の速さで家に入った父親を見て、瑠奈は啞然とする。瑠奈にとっては、月9の最終回や、今月の星占いとか、日本の政治の行く末より、気になるところであった。

瑠奈も家に入り、食卓の上にあった重箱に、顔を突っ込んでガツガツやっている誠一郎の前の席につき、トーストに口を付ける。

ふと、昨日から気になっていた事を思い出し、目の前の父親に聞いてみた。

「ねー、親父。ららちゃん、また友達のお家？ 今日、あたしと一緒ににお買い物に行く約束してたんだけど……」

誠一郎の動きがぴったりと止まる。まるで、リモコンの一時停止ボタンを押したように。そして、コマ送りをしたときのように、ゆっくりとかくかくと首を持ち上げていく。

「ららちゃんは……その……今日も帰らないかも……」

「え？」

「ららちゃんに何かあったの!？」

誠一郎は続ける。

「実はね……」

チカンは蹴り殺せ、丸山田 誠一郎

瑠奈は重箱の左端右端から、わずか数CMの所に左右それぞれの手を叩きつけて誠一郎に詰め寄った。

「えっと。ああ、そうそう！ 昨日、お父さんが迎えに来たんだ！ そのままご飯に行つて、お父さんとホテルに泊まったみたいなんだよ。今日も帰らないかもしれないね……」

「そう、なんだ……お父さんが来てたんだ。家族の時間って、大切だよ……それじゃ、仕方ないか」

瑠奈は席に着きなおし、遠い目をしてなにやら考えていたが、すぐに立ち上がり、ジョギングに出発した。

玄関を勢いよく飛び出して、家の周りを走る。そして、公園で母美雪直伝の護身術の鍛錬。朝の空気を瑞々しい瑠奈の脚線美が切り裂く。チカンハンターと恐れられたカミソリの様な切れ味の蹴りは、見る者を魅了した。母曰く、『チカンは蹴り殺せ』らしい。

「おはよう、瑠奈ちゃん。今日もいい足してるねえ」

近所のおじさんが瑠奈の回し蹴りを見てそう言った。お隣の宮村さん家のお父さんだ。息子であり、瑠奈の幼馴染の男の子は一人全寮制の学校に通っているらしく、最近寂しさが募って、頭も寂しくなってきたようだ。息子への愛と髪の毛の量が反比例する体質らしい。

「おはようございまーす！」

快活に挨拶を返す。隣のおじさんには優しいのに、実の父親には何故ああまで冷たいのか。

ジャングルジムを背に、瑠奈は蹴りを繰り返す。母から受け継いだのは、美貌と格闘センス。父から受け継いだのは、恥ずかしいことに食欲であった。

その為、家を出て10分もしないうちにお腹がかわいらしい音を立てて瑠奈は頬を赤らめる。

「あゝお腹空いたあ。やっぱり食パン三斤じゃ足りないよね」

明日は待ち待った決戦の日だ。備えは万全にしておきたい。なので、ムダなカロリーを摂取しないよう心がけたのが裏目に出た。

近くのコンビニに立ち寄り、おにぎりやらサンドイッチを買う。店員が5人分のおしぼりを袋に入れてくれたが、きつとこれはサービスなんだろうと思って気にしない。家に持って帰ればママも喜ぶ。そして、大量の食料を三合公園で瞬く間に平らげる。

おなかいっぱい。しあわせいっぱい。ここに春川がいればなおいいのに、と瑠奈は思う。しばらく体を休めていた瑠奈だったが、ジヨギングを再開し、商店街の方に走り出すと、唐突にケイタイが鳴った。

「あ、かなぴょんからメールだ」

かなぴょんこと、印藤 加奈子は瑠奈にとって無二の親友であった。瑠奈はその母親譲りの勝気な性格と、思い込みの激しい所。そ

して正義感が一部の同性からは煙たがられていて、友達がいなかった。

中学二年の頃、瑠奈はいじめられていたクラスメイトを助けた。その生徒を助けた途端、瑠奈の持ち物が事あるごとに消えた。靴箱の中にゴミが入っていたのも、クラスメイトが瑠奈を無視したのもすべてその生徒……印藤 加奈子を助けた直後の事だ。

親にも誰にも相談できず、瑠奈は毎日を生きた。そんなある日、瑠奈は学校の屋上を目指した……飛び降りる為に。

14歳の少女のガラスの様な心は、簡単にヒビ割れ、無邪気ゆえに残酷な同い年の少年少女らには罪悪感が無い。担任も見えて見ぬフリをして、早く4月が来て上の学年に上がって欲しいと心の中で願っていた。

誰も信じられなくなった。頼るべき親も、父は仕事ではば家におらず、顔を合わせればすぐに成績の話になって腹が立つ。母は家計を助けるために休み無くパートに出ている為、心配をかけたくない。頼りたいけど頼れない。負のスパイラル。

だから。だから同じ様に屋上のフェンスに手をかけていた印藤 加奈子を見た時。印藤が『あの時、助けてくれてありがとう』と言ってくれた時。二人は親友になったのだ。互いに裏切らない事をその場で誓って。

それまで互いに話したこともなかったし、印藤はメガネをかけ、地味な服を着て歩いているような子で、快活な瑠奈とキャラクターのカテゴリーが違っていた。しかし、瑠奈にとってはたった一人の親友だ。喜びも怒りも秘密も共有し合い、瑠奈も印藤も少しずつ変

わった。

その変化のせいか、クラスメイト達も飽きたのか、気が付けばいじめはなくなっており、元の平和な日常が帰ってきた。

ちなみに瑠奈は知らない。印藤が春川と付き合っていた事も、ヴァンパイアハンターとしてご町内の平和を守っていた事も。

だから。早朝の商店街の真ん中で、春川と印藤が仲睦まじく横になって歩いているのを見た時。瑠奈は固まった。すると二人は唐突に立ち止まり、体を密着させた。遠くてよく見えなかったが、二つの影が一つに重なり合っているのだけは、瑠奈の目にははっきりと見えた。

「かなぴょん……」

瑠奈はすぐにその場を去った。それまで立っていた場所には晴天であるにもかかわらず、数滴の雫が地面を濡らしていたのだった。

お花畑のアルゼンチンバックブリーカー、丸山田 誠一郎

明け方ごろになって、ようやく春川と印藤は異変に気付いた。留子の手術は無事成功し、病室に移されたのを確認すると、三人は疲れのためか、安堵したのと同時急激に睡魔が襲ってきた。

「オレ、あっちで少し寝るけど……」

春川はとりあえず、交代で誰か起きて留子の様子を見ようと提案した。皆それに同意し、まずは春川が休む事になったのだ。

「インコちゃん。襲わないでよ」

「襲うかボケ。さつさと寝ろ。寝れねーんだったら、パイプイスの角で殴ってやろうか？ 気持ちいいぞ、俺が」

「いいデス、間に合ってます……」

春川は萎縮してベンチの上で横になり、すぐさまグーカーグーカーいびきを立てて深い眠りに落ちる。

印藤はパイプイスを頭上に掲げたままの姿勢で誠一郎に向き直ったので、誠一郎は思わず息を飲んだ。殴られないように横を向いていたら、いつの間にか寝てしまったらしい。

結局、交代でという話だったが、情けないことに全員でイビキのハーモニーを奏で深い眠りに落ちてしまったのだった。

5時過ぎに目を覚ますと、留子の様子を一目見ようと病室に首を

突っ込んだ春川だったが、思わず声を上げてしまい印藤の眠りを妨げた。

怒りに燃える印藤に数発の蹴りをもらってから、春川は事情を説明するものの、また一つ事件が起こっていることに気付いて三人は首を傾げる。

「トメちゃんが……いない」

「ブチョーもいねーぞ、どうなってんだこりゃ」

「ご飯じゃないの？」

「包帯グルグル巻きの両手でメシ食いにいけるかよ、バカ」

「僕なら行けるんだけどなあ」

どうやって食事をするのだろう。印藤は誠一郎がカメレオンだから、トカゲのようにしゅるつと舌を伸ばして、獲物を捕食する様を想像してみた。……あり得そうで怖い。

留子の姿が病室から忽然と消えており、ベッドはもぬけの空であった。春川がそつとシーツに手を載せて、温度を確かめるとまだ留子のぬくもりがあった。そのぬくもりに顔をうずめなくなった春川であったが、そこはぐっところえ、印藤にまだ遠くに行っていない事を告げる。

「あんな状態でいなくなるのはおかしいだろ。探すぞ。俺と春川はこの近くと商店街のほうを回るから、デブは家に帰ってないか確認してくれ」

印藤の指令で誠一郎は家に帰り、二人は病院の外を探し回った。本来ならこんな時、年長者である渡辺を頼るのだがその渡辺もいない。誠一郎はおろおろするだけで、イライラ解消のサンドバッグ以外役に立ちそうに無い。まさか、渡辺の身にも何か危険が迫っているのか？

印藤は考えを巡らせてみたが、小泉家を潰した今、敵といえるのは『Ｔ』であるが、その『Ｔ』も昨日の戦いで吉村はけっこうなダメージを負っていたし、エリーもあれだけ痛めつけられてすぐに行動に出ると思えなかった。では、誰が？

「インコちゃん。なーに難しい顔してんの。朝一で一般人がその顔見たら失神するよ？ ほら、スマイルスマイル。インコちゃんは笑顔がカワイイ——」

印藤が振り返って、少し、にたあと笑って見せると春川は笑顔のまま気を失った。非常にカワイイスマイルであつたのだろう。

「てめえ、どんだけ失礼なんだよ！ 乙女の顔見て失神してんじゃねーぞ！」

春川の鳩尾に体重を乗せた肘を入れ、印藤は優しく起こす。

「ぶー！ 死ぬー！ お花畑見えたー！ でも、天国のおばあちゃんがアルゼンチンバックブリーカー（プロレス技）で追い返してくれて助かったぜ！」

「お前のばーちゃん、えらいマニアックだな」

印藤は以前春川の家遊びに行った時に見た、春川 幸江（享年82歳）が着物姿でお花畑を背に、アルゼンチンバックブリーカーをかます姿を想像する。……色々あり得ない。

「……なあ、田中 聖一郎って……誰だろな」

「トメちゃん……自分の事はあまり話してくれないもんなあ。アヤちゃんなら知ってるかもだけど、オレ達にずっと黙ってた辺り、簡単にしゃべってくれそうにないんじゃないの？」

小泉 浩之が口にした田中姓の人物。とても留子と他人とは思えない。30年前に起ったと言う、旧日本支部の壊滅騒動。その時にヴァンパイアハンターになったという藤内。だが、藤内はその時の事を頑なに喋ろうとしない。

以前聞いたときも、のらりくらりとうまくかわされてしまった。30年前に襲来したAランクヴァンパイア……それが田中 聖一郎なのではないかと印藤は疑い始めている。

「おっと、懐かしいなあ。ここ！」

急に前を歩いていた春川が立ち止まったので、春川の背中に顔を突っ伏してしまい、印藤は春川の背中越しに久しぶりの春川の匂いと細身ではあるが筋肉質な体を感じた。

いつの間にか、商店街の方までたどり着いていたらしい。早朝の商店街に人気はまったく無く、春川と印藤の為にだけに作られた、二人だけの空間のように感じた。
インスタントダンジョン

あれからずいぶん時間が経ったものだ。印藤は中学時代を振り返

った。

瑠奈と親友になって……春川と出会って……変わった。出会いはこの商店街のゲームセンター。瑠奈とプリクラを取るために来たのだが、はぐれてしまい、一人さまよっている所を偶然声を掛けられた。

春川はとても気さくな少年で、瑠奈を待っている間の時間つぶしに格ゲーの対戦で時間を潰す事になった。その時、花を持たせてくれたのかどうかは知らないが、印藤は圧勝してしまった。

ゲームセンターは出会いのきっかけの場で、春川と多くの時間を潰したのが格ゲーである。そのゲームセンターは閉店されていて、中に入る事はできない。春川はそれを急に立ち止まってぼんやりと眺めていた。

春川から顔を離し、同じようにして店の中を覗き見てみたが、カーテンがかけられていて中がどのような状態になっているかは解らなかった。

「あん時はインコちゃんがこんなバケる……おっと！ もちろん、いい意味でだぜ？ 決してその、そっちの方向とかじゃないよ？ そっちの方向とかじゃないよ？ オレの命に関わる大事なことだから二回言っとくね！？」

「あ？ どっちの方向だ言ってみろこの野郎」

二回言った事が印藤の怒りを二倍にさせたらしい。とりあえず春川のHPゲージを赤く点滅させる所まで殴りつけ、ひとしきり満足するとスーパーフジタ二三合店、もといヴァンパイアハンター事務

所に行くことにした。

「ありゃ？ さっき誰かそこにいた気がするんだけどなあ」

春川は商店街の入り口辺りを見回して呟いた。

「気のせいだろ？ おら、さっさと行くぞウスノロ」

早朝の商店街を二人が去った後、雨がぽつぽつと降り出し、そこに誰かが流した涙があった事に皆気付くことはなかった。

デジタルは敵、丸山田 誠一郎

スーパーフジタ二三合店の店長室で誠一郎は春川らと合流し、ソファに腰掛けて藤内の出勤を待っていた。家にも帰っていないし、どこを探しても留子の姿は無い。携帯は置いたままであり、同時に姿を消した渡辺にも連絡が付かない。そこで3人は藤内も交えて今後の対策を練ることになった。

時刻は7時48分。藤内の出勤は朝8時からだったので、その10分前には必ずタイムカードを打刻するはずだ。藤内はマメな性格で、タイムカードはどれも必ず出勤10分前ちょうどを刻んでいる。そして退出時間も常にシフト上の時間ちょうど……残業はしない主義でもある。

「おはようございます、皆さん」

7時49分20秒。藤内が店長室に入室すると、一礼する。誠一郎と春川は頭を上げる瞬間を刮目してその時を待った。藤内の胸が揺れる瞬間、流れていた時間がゆっくりとスローモーションの様になり、二人の心は一つになる。『生きててよかった』と。その横で印藤が自分の胸を見て、右の拳をわなわなと震わせていることに気付いているのは、藤内くらいであろう。しかし、あくまでポーカーフェイス。気付かないフリ。

「あら、マルちゃん。今日は早いですね。それに、春川くんも印藤さんも……あら、田中さんは？」

タイムカードが7時50分を打刻したのと同じ、藤内は振り返って言った。スーパーフジタ二の出勤システムは、古めかしい打刻機

に紙のタイムカードを差し込んで、その時間帯を印字するタイプであった。今時分、デジタル式やタッチパネルでデータベースに書き込むタイプもあるというのに、スマートフォンのアプリ開発をするくらいなら、出勤システムも留子になんとかして欲しい。当の本人がこの場にいない事もあって、その名前がすぐに出た。

鼻の下を伸ばしたままの、アナログ人間こと誠一郎が慌てて藤内の問いに答える。

「ごちそうさま、じゃなかった——。おはようございます、藤内さん。実は師匠が昨日大怪我をして入院していたんですけど。今朝方唐突に姿を消したんです。ここにも来ていないようだし、藤内さんの所に来ていないかと思って……」

藤内はしばし、腕を組んで目をつむる。組んだ両腕が藤内のチャームポイントを押し上げることになって、二人の男の心はその瞬間また一つになる。『おほっ！ もっと考えろ！』と。

「いただきます、じゃなかった——。アヤちゃん、トメちゃんとう繋がるかわかんないんだけど……田中 聖一郎ってどのどなた？」

春川の問いに、明らかに藤内は動揺した。

「田中さん……まだ春川くん達に話していませんでしたね。田中さんの失踪とはどう関係があるかは解りませんが……。何か異常事態のようですし……仕方ありませんね」

そう言うと、タイムカードを元の場所に戻し、ソファに腰掛け、3人の目を一人ずつ見て口を開いた。

「田中 聖一郎は30年前に現れたAランクヴァンパイアです。そして……私と光彦さん……いえ、吉村を噛んだヴァンパイアなんです」

「じゃあ、アヤちゃんは30年前に？」

「ええ。雨の日でした。スーパーフジタ二で買い物を終えた私達夫婦はその帰りに、旧日本支部……買い物をしたフジタ二の店舗で田中さん達の戦いに巻き込まれたんです。その時、あの男に……私はかろうじてヴァンパイアになることなく田中さんに助けられたのですが、吉村は間に合いませんでした。いえ、田中 聖一郎の力に魅せられ、人であることを進んで捨てたんです。そしてその時……田中 聖一郎の事を田中さんは『お父様』と呼んでいました」

「お父様……じゃあ、トメちゃんって……」

「私もちやんと本人に確認したわけではありませんが……そうなんだと思います」

留子の父が『ト』……ふと、誠一郎の脳裏に研修初日の夜の記憶が蘇った。

『師匠は……自分の家族を殺せといわれれば、殺せるんですか？』

『——殺せる』

『私には守る家族は無いが、お前にはあるんだからな』

……もう何十年前も前に、その覚悟をしてきたのだらう。父親を止

めるため。父親がしでかした過ちを断つために留子は戦っているのかもしれない。

「じゃあ留子の奴、『Ｔ』にさらわれたのか？」

印藤が難しい顔をして藤内に問いかける。

「解りません……そもそもあの病院はヴァンパイアハンター専用の施設です。セキュリティも、ヴァンパイアが接近すればすぐに警報が鳴って私達のところにも何らかの報告が来ているはず……それがないという事は少なくともヴァンパイアの仕業ではなさそうですね」

「結局、なーんも解らないんじゃないか」

春川たちは店長室でうなだれた。何の手がかりもないまま、時間は無情に過ぎていく。しかし、心の中でそれほど心配もしていなかった。それだけ留子の事を皆信頼していたし、渡辺も一緒かもしれないとも考えていた。

留子がこれまでに唐突にいなくなることもあったが、ちゃんと三日以内にお腹を空かせて帰って来ていた事例もあるので、その内ひよっこり玄関のドアを猫のように爪でカリカリやって、『開ける』と言って帰ってくるかもしれない。最終手段として、世界中のプリンをかき集めておびき寄せる案も出たが、誠一郎がそのすべてを食べつくしかねないという懸念があったので、却下された。当然、誠一郎は最後まで反対していたが。

とりあえず搜索は一旦打ち切り、その日は留子もない事、連日の激闘の疲労を考慮して、藤内以外は休日ということになった。

こうして、留子のない休日が始まった。

99年前のあの日、丸山田 誠一郎

燃え盛る炎の中に少女はいた。満天の星空を燃やし尽くすかのよう
に天に伸びた炎。その中に、いた。

少女は自室のベッドの上で膝を抱え込むようにしてうずくまり、
最後の時をただただ待っている。

生まれ育った家は今や炎の塊同然。すでに逃げる場所などどこに
もなかった。

火元は一階の玄関ホールなので、二階の自室に火が回るのも時間
の問題だ。それに、一階には『あいつ』がいる。だから、最後の時
をせめてここで過ごしたいと思った。

ふと、階下から足音が聞こえてきた。どうやらまだ殺したりない
らしい。

兄と姉はあいつに殺された。生まれてすぐ母を失った少女にとっ
て、姉は母親代わりでよく可愛がってくれたし、兄は真面目が服を
着ているような人間だったが、とても尊敬のできる人だった。二人
とも年が離れているからといって、いじめるようなことは無く、末
っ子である自分を大切にしてくれた。その二人はすでにこの世の人
間ではない。

ギシギシという音が廊下から聞こえてくる。一步一步確実にこち
らに向かってるのが、解る。足音は死へのカウントダウンと同義
であった。その音が聞こえる度、ベッドの上で小さな体をより小さ
くして最後の瞬間を待つ。

悪魔がやってくる。人の皮を被った悪魔が。

兄や姉。そして使用人達の命だけでは物足りなかったようだ。やがて部屋の前で足音は止まり、ドアをガチャリと開ける音が聞こえた。

目を閉じて耳を塞ぐ。何も聞こえない、何も感じない。

突然、体が重力から開放される。おそろおそろ目を開けると、少女は若い男の腕の中にいた。

20代後半くらいだろうか？ 日本人ではない……髪は黒いが、高い鼻と高い身長はこの国の人間とはとても思えない。服装も見ただことのない西洋の物だ。

「あなた誰！？ 降ろしてください！」

男は口元に人差し指を立て、黙っているよう目配せをする。

少女もそれを察し、口を押さえ押し黙った。お姫様抱っこのまま部屋を出ると、階下から『あいつ』がやってきた。

変わり果てた父だった。優しい笑顔のまま、片手に使用人だったモノを抱えて階段を昇って来る。幸せの象徴だったその大きなお腹を揺らして、階段を赤い瞳を輝かせ昇って来る。

一時間前までは確かに、あれは父親だった。それが突然……帰宅してしばらくしてから、凶行が始まった。惨劇である。

「しつかり捕まって、行くよ！」

「え？ 行ってくて？」

男は銃を取り出し、窓に向かって数発発射するとそこから少女を抱えたまま飛び降りた。

暗闇の中を家々の屋根を飛び移り、空を舞うように移動している様は、まるで自分が鳥になったようで気分がよかった。しかし、すぐに先ほどまでの出来事を思い出し、顔をしかめる。

「お父様……どうして？」

「ヴァンパイアに噛まれたんだ」

「ヴァンパイア？」

「そう。僕達ヴァンパイアハンターの敵だ」

男は橋の下に着地すると、そこで少女を降ろした。

「君のお父さんは……ヴァンパイアに噛まれてしまったんだ。親は殺したけど、君のお父さんはその子になって、人を捨ててしまった。ごめんね。もうちょっと早く僕が来ていれば、止められたかもしれないのに」

男はかがみこみ少女の涙を右手ですくう。

「私……お父様に噛まれた。突然。それをお兄様とお姉様が止めて……でも……」

突然、男の顔が険しくなった。

「君……噛まれたんだね？」

さっきまでの男とはまるで別人の様に、少女を今にも殺してしま
いそうな目で睨む。少女は恐ろしくなって一歩後ろに下がる。

「君が進む道は三つある」

男は一歩踏み出す。

「僕に殺されて人間のまま生を終えるか」

もう一歩。

「そのままヴァンパイアとなるか」

ついに目の前に迫る。拳銃を懷から取り出し、少女の眉間に銃口
を向ける。

「あるいは、人を捨てバケモノとなるか」

「何ですか、それ……？」

「選ぶんだ。時間がないよ。時間切れはそのまま最初の質問の答え
となる。僕もできれば、君のような年端もいかない子供を殺したく
ない。……どうか、最良の選択を」

しばしの沈黙の後、少女は結論を出した。殺されるのも、父親の

様になるのも嫌だった。ただ、生きていたい。まだ13歳の自分が……人並みに恋もしてもっとオシャレもしたい。

だから、選んだ。

「私、死にたくありません」

男の顔は柔らかいものへと変わる。そして、拳銃を懷にしまうと、代わりに手の平大の白い陶器を取り出し、少女に手渡す。

「これを飲んで。ちょっと苦しいかもしれない。でも、大丈夫。飲めば君は新しい人生と力を手に入れることになるから」

男から手渡された液状の薬品。少女は陶器に入ったそれをおそるおそる飲み干す。

「まだ……名前を聞いていなかったね。僕はアーサー。アーサー・クラインだ。君の名前は？」

薄れ行く意識の中で最後の力を振り絞って自分の名前を、青年に伝える。言葉は音にならなかったが、青年は唇の動きだけでそれを読んだ。

「留子。いい名前だね」

留子がヴァンパイアハンターとなった瞬間であった。

放課後うはうはパニック、丸山田 誠一郎

留子は暗闇の中で目を覚ました。光の差さない闇の中。体は動かない。ベッドの上のようだが、ここが搬送された病院ではないことはすぐにわかった。

手足、首、腹回り……鎖で拘束されている。病院にこんなサービスはない。頼んだ覚えも無い。一体、ここはどこなのか？ 留子は頭の中を整理しつつ、周りの空間に目を凝らした。

「眠り姫のお目覚めですか？ いやはや、ここまで運ぶのに苦労しましたよ。意外と重い——おっと、レディーに対してこれは失礼ですがこれも仕事。仕事に妥協は許されませんからねえ」

男の声。それも聞き覚えのある声だった。

「お前……渡辺か？」

「はい」

暗闇の中から出てきた渡辺は薄笑いを浮かべて、ゆっくりと留子のベッドに近寄っていく。

「なるほど。薄々感づいてはいたが……そうだったとはな」

渡辺は歩みを止め、さらに笑いを止める。

「さすが田中氏……年の功よりなんとやら、たいしたものです。僕の素性をご存知だったとは……」

「行動を見れば解る。一挙手一投足。それを見ればお前の事などすべてお見通しだ。お前の目的は……私だろう?」

渡辺は止めていた薄笑いを再び始める。

「ええ。ずっとその時を待っていました……フフ。長かった。まさか、このタイミングでチャンスが巡ってくるとは」

「そんなに前からなのか……やはり、お前は」

「フ……そういう事です」

「ロリコンだったのか」

「そう、スパイだったのです」

留子と渡辺の口が同時に動き、言葉がすれ違った。

「は?」

「お前のケイタイの待ち受けを見た時、確信したよ。あの写真の少女は何だ? まさか自分の母親だとか言い訳はするまいな? それともあれか、妹か? そういうのはディスプレイの向こう側の妹だけにしてくれ、マジで」

「いや、あれは……」

「どうせこの鎖もお前の趣味なんだろう!? 今から恥ずかしい写真の撮影会とか始めるんだろう!? 大きなお友達がたくさんいる

「んだらう!？」

「いや、違いますよ……あれは僕の娘です。それに、さつきスパイだと言ったじゃないですか！ そんな趣味あるわけがないでしょう！ PCには大人の女性がいっぱい出演しているビデオがたくさんありますよ！ ウソだと思うなら、ほらここに！ 高城 あさぎや日向 ららが熱演している『放課後うはうはパニック』なんか――」

「おい、待て。今、何て言った？」

「『放課後うはうはパニック』ですか？」

「違う、その前！」

「PCには大人の女性がいっぱい出演しているビデオが――」

「その少し後！」

「高城 あさぎや日向 ららが熱演……」

「あのブタの貯金箱……いいネーミングセンスじゃないか……それで、『高城 らら』か……酢豚にして手榴弾と一緒バイナッブルに皿に盛ってやる……」

留子は心の中で復讐を誓った。

「相変わらずうるさい女ですね、田中 留子」

「お前……」

声の主を見て怒りに燃える留子は絶句した。渡辺の横に本来ならばそこにいるべきではない人物が立っていたからだ。

「吉村さん、ご命令通り……田中 留子を捕獲しておきましたが……」

「ご苦労様です。渡辺 義久。あとはもう一人の姫君をお迎えに上がってもらうとしましょうか」

吉村だった。渡辺の隣に立った吉村が、留子を冷たい瞳で見下ろしている。

「それが……どうも家にはいないようでしてね。現在所在を調べているのですが……もうしばらく時間をください。必ず結果を出して見せますので」

「いいでしょう。では、お行きなさい。この仕事が終われば、これであなたも私達の仲間入りを果たすことができますよ？」

「仲間……だと？」

留子の問い掛けに渡辺は肩を震わせて答える。

「ええ。正直、あなた達のような、ごっこ遊びではつまらないのですよ。僕はもっと上を目指せる男です。そのためにはヴァンパイアの力が必要だ。吉村さんなら……僕の願いを叶えてくれる。ヴァンパイアハンターの転職先がヴァンパイアだなんて、笑える話でしょう？ 僕の人生の踏み台の一つになってもらいますよ、田中さん」

「フフ。正直な所。話に乗ってくるとはあまり期待していなかった

のですがいい手駒を手に入れました。アーノルドのような壊れかけのガラクタや、エリーのような感情で動く獣なんかよりもよっぽどいい。自分の欲望に忠実で、高い向上心を持ち、主人に絶対服従。本来の上下関係とはこういうものでしょう？ あなた達のような仲良しこよしでは、これからの来るべき戦いには打ち勝てません」

「……それでは、僕はこれで失礼します」

「ええ、期待していますよ、渡辺 義久」

吉村の返事とともに渡辺は闇の中へ溶けるように消えて行った。

「田中 留子。お父様はお前に大層会いたがっていたのでね、渡辺には一仕事してもらったわけです」

「あいつ……」

留子は奥歯をかみ締め、渡辺の消えた方を睨みつけた。

「昨日の友は今日の敵……所詮私たちは敵同士。馴れ合うことなんて初めからできないんですよ」

「……だろうな。そんな事は解っていたさ」

「ああ。忘れていました。アーノルドを始末してくれてありがとうございます。たいへん感謝していますよ。エリーも鎖を解き放っておいたので、うまくいけばヴァンパイアハンターの何人かと共倒れてくれるかもしれません。いやあ。本当にあなた達には感謝してもしきれませんね」

「お前……何考えてるんだ？」

「決まっているでしょう。お父様の寵愛を受けるのは私一人で十分なんです。ずっと目の上のタンコブだった邪魔な兄弟二人を始末できてせいせいする。明日が待ち遠しいですね、お父様はどのように私をお褒め下さるのか……。おっと、いけない。私もそろそろ失礼しますか。では、おやすみなさい、田中 留子。いい夢を」

吉村もまた、闇の奥へと姿を消し、留子だけがそこに取り残される。

「夢ならもうさつき見たよ。最低のをな」

車は空を飛ぶ物ではありません、丸山田 誠一郎

春川は一人、スーパーフジタ二三合店の搬入口で夜空を見上げていた。印藤はゲームをしに家に帰り、誠一郎も家で食事をするので、一人ヴァンパイアハンター事務所の演習場で、ステーキの突きをひたすら繰り返した。

支部の武器庫の一番奥で、ほこりをかぶっている大きな物体……
バスターステーク
専用杭打ち機。留子がいらない今、あれを手にする必要があるかもしれない。留子が一度使ったきりで、他の誰もその姿を拝んだことが無いという専用杭打ち機。
バスターステーク

この前の個人授業でその姿を見たときには心が震えた。今まで出会ったどんなにカワイイ女の子よりも。

一目惚れ……そう言ってもいい。るーちゃんと比べたら、100%るーちゃんだけだね。と春川は心の中で訂正しておく。

『私に何かあったらコレを使え。きっとその時、お前はこいつを使いこなせる』

留子の言葉を思い出す。まさか……本当にそんな時が来ているのかもしれない。いや、留子自信、この事態を予測しての個人授業だったのかもしれない。

「トメちゃん、あれでけっこう短気だからなあ……考えすぎか」

ひとしきりトレーニングを終えて、自販機で買った缶コーヒーに口をつけていた春川だったが、駐車場の方から歩いてくる小さな人

影を見つけて、そちらに目を凝らした。

「トメちゃん？　じゃねーか。にしても、マニアックだなあ、何のブレイだありゃ？」

駐車を一人の少女が歩いている。金色の長い髪は乱れており、顔の左半分は包帯で覆われていて、血で汚れたワンピースを着ている様はまるで亡霊のようだった。

ゆつくりと、しかし確実に。駐車場の向こうから春川の位置まで、まっすぐに向かってきていた。7時の半額セールが終わり、一時間ほどたつて客もほとんどいない今、女の子が一人で買い物……そう考えるには、その出で立ちからは想像がつかない。

車がほとんど停まっていないう駐車で、右足を引きずるように、ゆつくりと。はっきり言って不気味である。

「オレのファンにあんな過激なコスの子いたっけか？　うーん。いたような、いないような？　ああ、そうか！　いちごちゃんだ！　いちごちゃんもああいうゴスロリっぱいの着てたっけ！　でもいちごちゃん。ダンブカーに足が生えた感じの子だからなあ……人違い？」

首を傾げ、その少女をしばらく眺めていると目が合った。赤く光った右目と。その赤い目で春川は彼女の正体を一瞬で悟った。

「いちごちゃんじゃない……。やっぱオレの隠れファンか、参るぜ。今日はヴァンパイアハンターは定休日。休日出勤はガラじゃねーんだけだなあ」

春川は缶コーヒーを一気に飲み干し、律儀にゴミ箱まで歩いていき、ちゃんと缶を潰して分別してから横に立てかけておいたステークを手に取ると、少女の前に出た。地球に優しい男なのである。

「よ！　なかなか刺激的だね、お嬢ちゃん。その包帯が、青い髪で赤い瞳の無表情美少女を連想させて、オレ的には95点あげちゃうぜ？　頭の上にヘッドセットも付けりゃ100点、『あなたは死なないわ〜』ってモノマネしてくれたら、シンクロ率500%いっちゃうかもよ？」

少女は立ち止まる。そしてその赤い瞳を春川に向けた。

「あなたは死ぬわ。私が殺すもの。ミンチにして、精肉コーナーで半額シールに2割引シールもつけてやるわ！」

「あん？　キャラが違うぜ？　何のアニメキャラだよ、ソレ。てか、オレ……70%オフだよ！」

少女の両手がその形を変えたことで、春川の頭に緊急警報が鳴り響いた。

「アーノルド……お前か、私からアーノルドを奪ったのはあ！」

右手が迫る。その軌道を見切ると右に回避し、横っ腹にステーキを突き立てた。爆砕。確かな手応えが春川の両手に伝わる。

「オレは地球と女の子には優しい主義だが、ヴァンパイアには厳しいんだ。ロリも守備範囲だけど、仕事なら関係ねえ。やるっていうんなら、天国見せてやるぜ？」

「ウルサイ」

右手はステークの威力を持ってしても、大したダメージを受けておらず、依然健在であった。その様子に春川は舌打ちすると、迫ってきていた左手をしゃがんでかわす。

「女の子の扱いに関しちゃ、この三合でオレの右にも左にも出る奴はいねーんだ」

今度は右手ではなく、本体の少女の腹目掛けて渾身の突きを繰り出す。爆音と共に少女は爆ぜる。駐車場に停まっていた車の助手席の窓に頭から突っ込んで、静かになった。

「あー……けど、規格外は勝手が違うか……。休日出勤に特別手当あとでアヤちゃんに申請しとかねーとな」

車の天井を右手でぶち抜き、爆煙の中を歩いてきた人影に向かって、春川は呟いた。

「どうして、ドウシテ、ドウシテ……アーノルドが帰ってこない」

左手が先ほど天井をぶち抜いた車をおもちやのように軽々と持ち上げ、それが春川に向かって飛んできた。

「うそ!？」

春川は飛んできた車を、華麗に前転を決めてなんとか回避する。

「てめー! やっぱ、いちごちゃんだろ! いちごちゃんはトラックに跳ねられても、逆にトラックぶつ壊しちまう怪力の持ち主な

んだぞ！」

ちなみに、いちごちゃんとは、虐殺ストロベリーのリングゲームを持つ春川の元カノコである。さらに付け加えると、高校二年生で春川の後輩、瑠奈の先輩でもある。

「ドウシテ」

少女の右手がコンクリートで舗装された地面を割る。春川は『いちごちゃんより激しい』と呟きつつ、空中に逃げた。

しかし、そこを少女の左手がつかんだ車が直撃する。

「うそ！？ 車って空飛ぶの！」

春川は避けきれず、空中で車に轢かれるというレアな体験をする。搬入口に摘まれていたすいかのダンボールの上に頭から落下するが、なんとか無事ではあった。

しかし。

「やべ……ステーキ……」

春川のステーキは先ほど少女が割ったコンクリートの隙間にめり込んでしまい、取り出せそうに無い。がんばってコンクリートに手を伸ばすが、春川の頭上にまた車が飛んできて作業を中断する。

「やべえ。あの車ちゃんと自動車保険おりんのかな？ また協会が弁償とかにならなきゃいいけど」

春川は自分の心配よりも、飛んできた車や、空中を走った車の持ち主が買い物を終えて出てきたときの事を想像して、気の毒に思った。

「って、オレも車の事心配してる場合じゃねーや。武器はないし、あの子、いちごちゃんより激しいし……しゃーねえ。あれ、使うか」

春川は店長室に行くと、そこからヴァンパイアハンター事務所の武器庫へダッシュして、目当ての物を手に入れる。

ほこりかぶっていた布を取ると、『彼女』がそこにいた。

「行くぜ、おてんばちゃん。しっかりオレのいう事聞いてよ。出ないとオレ、今度ばかりはやばいかも」

春川は専用杭打ち機バスターステークをかつぐと、勢いよく表へ飛び出した。

「おっし、実戦で使うのも、実際使うのも初めてだけど……トバシてみるか」

再び少女の赤い瞳と眼が合う。続いて、少女の左手が春川の体をつかもうと迫ってきた。

——ここだ。春川は専用杭打ち機バスターステークを左手に突きつける。しかし、その衝撃に耐えられず、春川が逆に吹き飛ばされてしまった。

「初体験は痛えな。けど、今でコツはつかんだぜ。オレのテクで逝せてやるぜ、いちごちゃんもどき！」

再び迫る少女の右手。春川は走り出す。自分の体ごとぶつけるよ

うに、全ての力をただ一点に収束し——繰り出す。

少女ははじけ飛ぶ、右手に大きな穴を三つ開けて。

バスターステーク

専用杭打ち機……別名、トライデント。通常のステークと大きく違う点は、ただ一つ。杭が3つ備え付けられ、1メートルの金属棒の先端から先は、トライアングルのようにそれぞれ3本の杭が生え出ている。その威力は通常の3倍以上。扱い難さはそれ以上。

「オレのモットーは地球と女の子に優しく！ ヤローとヴァンパイアに厳しく！ 今日3倍増しで厳しく行くぜ」

ブチョーの背中と激甘カレー、丸山田 誠一郎

少女に春川が迫った。腰を落とし、トライデントを構え猛進する春川は、太古の昔存在したという恐竜。トリケラトプスの様に勇猛であつた。

いや、少女にとってはそのプレッシャーは最強の肉食恐竜、ティラノサウルス以上であると言える。先日相対した印藤の猛打にすら耐えた体が、一撃で修復不可能なレベルのダメージを受けてしまっているのだ。もう一度あれをくらうとタダではすまない。少女……エリーは実感した。

エリーは手じかにあつた軽自動車を左手でつかみ、それを盾にする。しかし、あっさりと軽自動車をトリケラトプスの角が貫通し、車に三つの穴が空いた。

「ムダな抵抗だな」

車体に空いた三つの穴……トライデントが引き抜かれたその一つから、覗き見る春川の目とエリーは目が合った。軽自動車を放り捨て、一歩下がる。

再度、地面に衝撃を伝え、相手を転倒させようと試みるが、春川は地面に落ちていた掌大の石を蹴り上げ、それをエリーの左手にジャストミートさせる。

舌打ち。エリーは予想外の出来事に困惑する。今まで何人か血祭りに上げたどのヴァンパイアハンターも、こんな貫通力のある武器を有してはいなかった。遠距離から攻撃できればいいのだが、買い

物ラッシュが終わって閑散としたスーパーには、もう投げつける車もない。

気が付くと、トライデントの先端がエリーの目の前にあり、春川が冷やかな瞳で見ている。そう、まるで獲物を食らう前の肉食獣の様に……。

エリーは覚悟する。『こんな醜態をさらして、お父様にお会いできるわけが無い。それならばいつそアーノルドの所へ逝こう、と』。必死に目を閉じ、ただひたすらその時を待った。

しかし、いつまで経ってもその時が訪れる事はない。

「ヴァンパイアハンター……どういうつもり？」

目の前にいた肉食獣は、いつの間にかその角を引っ込めケイタイをいじっていた。

「オレは地球と女の子に優しいんだよ。それに今日は定休日なの。さっさと消えろよ。営業日に会ったら、ちゃんとトドメは刺すぜ？」

視線はあくまでケイタイに注がれており、エリーと目を合わせようとしない。

「お前……今ここで私を逃がした事、必ず後悔するわよ？」

「しねーよ」

「何ですって？」

ケイタイから目を離し、エリーの目を見た春川はトライデントを鼻先に突き出し、冷たく言い放つ。

「いつでも叩き潰せるからだ」

エリーは絶句する。怒りと屈辱で泣きたい気持ちになり、その小さな体を震わせて、スーパールの駐車場の入り口に立っていた警備員のおっちゃんを突き飛ばし逃走する。

「はあ……よかった、なんとかなって……」

春川はエリーの後姿を見送った後、トライデントと一緒に、潰れたすいかのダンボールを枕にして、その場に寝転がった。

「てか、3発目は俺がもたねーんだよ。あそこで逃げてくれなかったらやばかったのは、オレの方なんだよな……」

春川の右手は未だ震えていた。トライデントを使った後遺症……とでもいうのか、爆発的な貫通力は爆破的な衝撃を体に伝える。その衝撃をすべて右手で受け止めているので、右手にかかる負担も相当なモノだ。

しかし、安堵したのも束の間。乾いた靴の音がこちらに向かってくるのを聞くと、春川は頭の中で舌打ちした。

「ち、あいかわらず行動原理がいちごちゃんにくりそつだな！ いちごちゃんは帰ったと見せかけて、教室の影から、引っこ抜いた焼却炉でオレを闇討ちする子なんだぜ！」

「僕は焼却炉なんか引っこ抜いた記憶はありませんよ」

しかし、それは男の声で、いちごちゃん可愛いデスボイスではなかった。

「つて、ブチヨーじゃねえの！　今までどこ行ってたんだよ！　あ！？　さてはまさか、今日発売の『放課後うはうはパニック2　初回限定スク水ver』を徹夜して並んで買ったんだろ！？　そうか、それで朝早くから消えていたのかあ、いいなあ」

「ええ、まあ。そんなところです」

渡辺は懐から取り出したDVDをちらつかせ、春川に見せ付けた。

「そうだ。トメちゃん知らない？　なんか朝から姿見えなくなつてさ。昨日、あれだけ大怪我してたのに一体どこへ消えたんだろ」

「さあ……僕には解りかねるね。そうそう、春川くん。君は知らないか？」

「何を？」

「丸山田くんのお嬢さん、瑠奈さんが今どこにいるのかを」

「やー。それがーちゃん、昼真っからいくら電話しても出ねーんだわ。明日の打ち合わせとか、しときたかったのになあ。あれ、でもブチヨー、るーちゃんに何か御用？」

「いえ。田中氏が消えた理由を彼女なら何か知っているのでは……ふと、そう思ったのでね」

上半身を起こした春川が右の拳を左の掌にポンと乗せて、驚いた表情で声を上げる。

「あ、そうだよ！ るーちゃんだ！ トメちゃんとりーちゃんは仲イイみたいだから、何か知ってるよな！。 るーちゃん、早く電話に出てくれよ！。 クソ、また留守録だ。 まったく、トメちゃんってばどこ行っただよ！」

「田中氏にも困ったモノですね、勝手にいなくなってしまうとは、上に立つものとして無責任にも程がある」

渡辺は白々しく肩を空かせてあきれて見せた。

「だよな！ せっかく専用杭打ち機バスターステークを使いこなせるようになったっていうのに！ ご褒美にあのへんやそのへん触らせてもらおうかなー、って期待してたのによお」

渡辺は少々驚きを含みつつ、冷静に聞き返す。

「君が……トライデントを？」

「おお！ さっきも金髪幼女ヴァンパイアをぶっ飛ばしたとこなんだ。逃げちゃったけど」

「そう……ですか。それは残念ですね。 フフ……残念だ。 春川くん。僕は瑠奈さんの居場所を探してみるよ。 君も何か解ったら僕のケイタイに連絡をくれないか？ 僕も田中さんの事が心配でね。 おちおち『放課後うはうはパニック2』を鑑賞する気分にもなれない」

「ああ！ いいぜ！ トメちゃんは人類の宝だからな！ その代わ

り……後で貸してくれよ？ いいだろブチョー」

「構いませんよ……家には観賞用と、保存用と、スピアの3つがありますからね。田中さんが無事に見つかったら貸してあげましょう。そう、無事に見つかったらね」

「マジか！ 愛してるぜブチョー！ あ、でもカレーの福神漬けと同ランク程度の愛だから、あんまりその気にならないでね！」

「それは光栄ですね、では僕はこれで……」

悠然と去って行った渡辺の背中を見つめると、春川のお腹がオーケストラの様に盛大に鳴った。

「あ、やべ。ブチョーの背中見たら、カレー食いたくなかった」

カレーは春川の好物である。特に、『カレーの皇太子様激甘口』の上に、福神漬けをたっぷりトッピングしたものに目が無い。

フジタニの自動ドアをくぐり、惣菜コーナーに向かいつつ、瑠奈にメールを送るがやはり返信はない。惣菜売り場でカレーをゲットし、漬物コーナーで福神漬けを5パック買い物かごに突っ込んでレジの女の子と5分くらい他愛のない話で盛り上がる。背後の中年男性が、何度も春川の背中を睨んでいたが春川は気が付かない。レジの女の子との会話もまったく頭に残っていない。

春川の頭の中にあっただのは、福神漬けと、『放課後うはうはパニック2』と瑠奈の事だけだった。しかし、結局。その日瑠奈からの返信は一切なく、初デート初日を迎えることになるのであった。

ヤツの名は保志　せんぱい、丸山田　誠一郎

ドアをノックする。一度、二度、三度。返事はない。そつとドアに餃子の様な耳をくっ付けて、部屋の中の音声の盗聴を試みる。やはり、何も聞こえない。意を決し、ドアノブに手を掛け、禁断の聖地に足を踏み入れた。

「瑠奈……帰っていないのか……」

日曜の朝の日差しがカーテンの隙間から差し込んで、誠一郎はそちらに足を向ける。何年ぶりだろうか、愛娘の部屋に乗り込んだのは……。

昨日、早朝のランニングから帰ってきた瑠奈は着替えると、すぐに家を飛び出した。何も告げず、玄関のドアを壊しかねない勢いで閉めて……。どうせお腹を空かせたら帰ってくるだろう。そう高をくくっていたのだが、思いがけず一晚経っても帰ってきていない。

「まさか」

誠一郎の中に一抹の不安がよぎる。まさか……お泊りでは？　誰の家に？　友達……？　まさか、まさか、まさか……！

「おのれ……よくも瑠奈を……許さないぞ、瑠奈の彼氏の男め！」

誠一郎は怒りで目を充血させ、全身から負のオーラを噴出した。鼻からは沸騰したやかんのよう蒸気がフーフーと漏れ出し、こめかみには青筋が浮き出ていた。一体、戦闘力は如何ほどのモノなのか。

何か部屋に手がかりはないかと、頭を360度回転させて、サーチモードに切り替える。視覚と嗅覚と聴覚と味覚……主に味覚の部分が発達した誠一郎だったが、机の上に置かれたビーズの塊。もといケイタイだった物を発見し、手に取る。

「これは、瑠奈の携帯電話か！」

いけないとは思いつつも、瑠奈の身に迫った危険を知るためにも、いたしかたない。折りたたみ式の画面を見ると、何件も不在着信とメールが届いていた。そのどれもが、『せんぱい』なる人物からだった。

「せんぱいというのか、瑠奈の彼氏の名は……いや、このマークは……そうか！ 名字だ！ 保志 せんぱいか！ フルネームは！！ フフフフ。保志 せんぱい！ 貴様の寿命は今日までだ！ 待っているよ、瑠奈！ パパが今助けに行つてやるからな！」

誠一郎らしい勘違いを披露したところで、ビーズの塊が小刻みに震え、メールを着信した事を告げる。

「ん？ またこいつからか！」

誠一郎は、新着メールのフォルダに移動し、タイトル名『おはようござんす、るーちゃん』を開く。内容は以下の通りである。

『やー、おはよう、るーちゃん。今日もイケてるね。え？ どうして解るかって？ オレには見えるのさ、バッチリ決めたるーちゃんが、携帯を手に持って感動しながらこのメールを読んでいるのさ！ オレの愛はるーちゃんと視神経を繋げているのさ！ ほら、

目を閉じてご覧、見えるだろう？ 三合ハム園に佇む儂げなオレの姿が……それじゃ、午前10時に三合ハム園の噴水前に集合だぜ、あんまり遅いとオレ、噴水で泳いじゃうかもよ？」

誠一郎は怒りに燃え上がった。サムい内容のメールもそうだが、相手の男の軽いこと軽いこと……しかも、春川のモノマネをして公園をハム園と読んでいるではないか。誠一郎は携帯を手に持って激昂する。

「噴水に沈めてやるぞ！ 保志 せんぱい。……待っている」

そして、午前9時50分の三合公園に誠一郎はそのそとやってきた。その顔を見た誰もが、顔を引きつらせ、道を譲る。まるで、モーゼが海を割ったように、人の波は誠一郎を避けるように、噴水までの道を開ける。

噴水前には数人の人影があった。一人は小学生くらいの女の子。まさか、彼女が……？ ぎろりと女の子を見つめると、女の子は泣き出して、母親の元へ走って逃げた。

「違ったか」

いや、当たり前だろう。

噴水の前で杖をついて、お爺さんがよろよろとズボンのポケットから携帯を取り出した。……間違いない。

「失礼」

誠一郎はお爺さんから携帯をひったくり、その中身を確認する。

待ち受けは、誠一郎も大好きな『放課後うはうはパニック』でお馴染みの高城 あさぎが、かがみ込んで胸を寄せている画像であった。

「な、なにするんじゃ！ この無礼者が！」

携帯を奪い返したお爺さんは杖を肩に担いで、怒りをあらわにしながら、がに股で、ドスドスと公園を出て行った。杖を携行する必要があったのかどうか、疑わしい。

「また違った……」

それもそうだ。

しかたがなく、瑠奈の部屋から持ち出したビーズの塊を取り出し、他に有益な情報が無いか確認しようと画面を開いた時だった。

『着信中 せんぱい』

そう、表示されていた。

「あれ、マルちゃん!？」

何故か、目の前にはめかし込んだ春川がいて、誠一郎は驚きと喜びを含んで問いかけた。

「ん、春川くん？ 奇遇だね、こんな所で……散歩かい？」

ハンバーグはおいしい、丸山田 誠一郎

春川がぎこちなく固まる。誠一郎はその様子に首を傾げた。

「マ、マルちゃんこそ、こんな所でどうしたの？ あ、もしかして放牧？ この辺にうまい草はないから、あっちに行った方がいいんじゃないかなあ、アハハ」

春川は焦りつつ、けっこう失礼な事を口走った。

「あっちの草はダメだね。栄養価もそれほど高くないし、何より匂じゃないんだ」

春川はまさか、マジレスされるとは思っていなかったので、驚きのあまり背後の噴水に背中からダイブしてしまった。

「うわ！ 濡れる！ オレは水もしたたるいいオトコだけど、これはきつい！ マルちゃん助けて！」

「待っている、春川くん」

手を差し伸べた誠一郎だったが、ふと気になって、春川に問いかけた。

「春川くん、保志という男に心当たりはないか？ どうやら、そいつが瑠奈をさらっていったらんだ。まだ家に身代金の要求は着ていないけど、きっとじきに電話がかかってくるはずだ。10時に瑠奈とここで会う約束をしていたのに、姿を見せないのがそのいい証拠だよ」

「あの……もし、その、マルちゃんの娘さんの彼氏がここに来ていたら……どうするつもりだったの？」

春川は後悔した。世の中には知らなければいい事のほうが多いという事を、この日初めて思い知った。

「決まってるじゃないか。噴水に沈めてやるんだよ、生きては帰さない……フフ。ミンチにして、精肉コーナーに並べて、半額シールを貼って、さらにその上に2割引シールを貼ってやるんだ！ どうだ、90%オフだよ！ 酷い仕打ちだろう？」

『70%だよ』と訂正を入れたところだが、春川は涙を飲んで立ち上がり、噴水の外に出た。それにしても……いつの間にか、誘拐犯にまでグレードアップしている。このまま放っておくと、国際的なテロリストくらいにまで出世してしまうかもしれない。早急に何か手立てを考えなくては……。そう考えた時だった。

有名な時代劇、甘えん坊將軍のテーマソングがけたたましく鳴り響いて、誠一郎は携帯をポケットから取り出し、電話に出た。

「もしもし？ どちらさま？」

『……』

相手は無言のようだ。

「ちょっと？ イタズラなら切るよ？」

『お前の娘は預かっている』

男の声とも、女の声ともつかない、くぐもった声。変声機か何かを使用しているのだろうか。

「何！？　じゃあ、お前が保志とかいう男か！　姿を見せろ！　ミンチにしてやる！　ついでにハンバーグにして、デミグラスソースで煮込んで、チーズもトッピングして——」

誠一郎はさらに続ける。

「フライドポテトも添えて、上に目玉焼きを二個乗つけて——」

「それ、マルちゃんが食いたいただけじゃねえのかよ……」

『そろそろ話を先に進めていいか？』

電話の向こうの相手は明らかにうるたえていた。そりゃそうだろう、これだけ熱くハンバーグを語られたら、すぐにビクリトンキに駆け込みたくなるものだ。

「貴様！　ハンバーグをバカにしたな！　そもそもハンバーグの起源はドイツで労働者に食されていた——」

『今夜19時ちょうどに、三合レジャーランドに来い。お仲間もちろん歓迎だ。こなければ娘の命はないと思え』

「なに！？　瑠奈を返せ！」

しかし、通話口からはツーツーという無情な音だけが流れ出て、誠一郎はやり場のない怒りを地面に向けた。

噴水の周りの舗装されたアスファルトがヒビ割れ、ラジオ体操をしていたお隣の宮村さんが、屈伸したまま、前のおばあさんのお尻に突っ込んでしまい、襟首をつかまれた拳句、往復ビンタの火花が数発散ったのだが、誠一郎はそれに気付かない。

「クソ！ 保志め、あの男……瑠奈をどうするつもりだ。さんざん弄んだ拳句、今度は金をむしりとろうと言うのか、悪魔め……」

「るーちゃん……じゃなかった。マルちゃんの娘さん、ほんとに誘拐……されたのか？」

「ああ、僕の睨んだとおりだったよ。あの男は人間じゃない。春川くん！ 協力してくれるよね！？ 一緒に瑠奈を救い出してくれ！そして保志という男に地獄を見せてやろう！」

春川は考えた。これはある意味、チャンスではないか。この事態を逆に利用して、瑠奈を助け出せば、瑠奈と付き合っていることがバレても誠一郎から、悪魔だの、地獄を見せてやるだの言われないかもしれない。いや、むしろ嫁にもらってくれると、ブーブー鳴きながら懇願するかもしれない。

「マルちゃん。オレたち仲間だぜ？ 仲間のピンチを見過ごせるほど、オレは落ちぶれちゃいねーよ」

「ありがとう！ けど、君。たしか今日は彼女とデートなんだろう？ そっちはいいのかい？ なんなら僕が代わりに事情を説明してあげるよ」

「ああ！ ああ！ そっちはいいの！ なんか、連れ去られたって

「いつか、誘拐されたていうか！ ……あ”」

「何だって！ それは大変だ！ それで、その彼女はどこに監禁されているんだ！？」

「えっと……三合レジャーランド……っばい」

「決まりだ。春川くん。瑠奈と君の彼女。るーちゃんをなんとしても助け出そう。もしかすると、師匠もそこにいるかもしれない」

「あ、ああ。そうだね」

春川はあまりにも軽すぎる自分の口に後悔した。時刻は10時16分。約束の時間まで残り8時間と44分。誠一郎達にとってこの一週間最大にして、最後の戦いがすぐそこまで迫っていた。

俺の妹がこんなにかわいいわけがある、丸山田 誠一郎

「お兄ちゃん、起きて、朝だよ」

赤い髪を両端で結った少女が、ベッドの上で掛け布団に包まり、ダンゴ虫になっていた若い男を、愛らしい声で上から優しくそっと揺さぶる。慎重に、そっと。その動作はまぎれもなく優しさに満ちていた。

すでに部屋の時計は10時半をさしていたが、男は一向に起きる気配がなく、いびきを立て夢の中であつた。

少女は仕方なく、いつもの方法を取ることにした。ベッドの上の布団の中に入り込んで、枕の横から顔を出す。すると、目の前にはいつも自分を可愛がってくれている優しい兄の顔があつた。その兄の鼻をそっとつまむ。痛くないように、そっと。

「ん？ ああ、加奈子か。おはよう。今、何時だ？」

少女は兄が起きたのを確認すると、布団から飛び出してカーテンを開け、少し遅い日曜の朝が来たことを兄に告げる。

「10時半だよ。ご飯できてるから顔を洗って食べてね。パパもママも出かけてるから、お兄ちゃん一人だからね」

「ああ。いつも悪いな……」

兄は上半身を起こし、伸びをすると、枕の横に置いてあつた財布に手を伸ばし、そこからわずかばかりの金額を、最愛の妹へ渡す。

「お前は相変わらずいい子だなあ。お兄ちゃん、幸せ者だよ。はい、今月のお小遣い。足りなかったら、いつでも言うんだぞ」

「え？　こんなにいいの！？」

妹の頭を優しくなで、パジャマ姿の兄は少し胸を張って、不精ヒゲの生えたアゴを引いた。

「ああ、お兄ちゃん、ちょっと出世したんだ。加奈子の為ならいくらでも頑張れるんだぞ？」

「ありがとう、お兄ちゃん！」

印藤 澄夫^{すみお} 24歳は、パジャマ姿で寝癖のついた頭を揺らしながら、危うい足取りで階下へと消えた。

「ラッキー。8万GET！　何買おっかなー。アイテム課金はこの間4万くらい使ったし……もう一台PC買って8PCにするのもいいなあ」

印藤は、兄である澄夫の部屋で高笑いをして、転げまわった。日課である兄へのモーニングコールを終え、その報酬に大満足なのだ。先月まで上限が5万円だった小遣いも、今月からは一気に8万になった。お兄ちゃんさまさまである。

9つ年上の兄はことごとく印藤に甘い。収入のほとんどを惜しみなく、印藤の小遣いに充てるほどである。こんなお兄ちゃんが欲しいものだ。

自室に戻り、PCの電源を入れ、現在廃人プレイ中のMMO。カ
オスクロニクルに接続する。ログインの手続きを終え、キャラクタ
ー選択画面へ。キャラクター選択画面にはいかつい大男と、ダンデ
イーなヒゲの紳士の二人がいた。

大男を選択して、いざゲームの中へ。

「今日は彩華とペア狩りする予定だったっけ。彩華は……まだイン
してねーじゃん。その辺でソロつとくかなあ……」

ぼやきながら狩り場へ移動しようとした印藤に、突然電話が掛か
つてきて、少しキレそうになった。

『オレオレオレ!』

「うるせえ……髪の毛全部むしりって、うちの担任のハゲ頭に移
植されてーか? アア??」

『……ごめんなさい』

「一回言えば、解るんだよ。んで、何か用か春川?」

『ああ! ちょい大変な事になった! るーちゃんが、るーちゃん
が……さらわれたらしいんだ』

「はあ!??」

『昨日から家に帰ってないらしくてさ……今さっき、犯人から電話
があったんだけど……19時に三合レジャーランドに来ないと、る
ーちゃんが危ないんだ……』

「るなるなが……」

『だから、インコちゃんも——』

「行くに決まってるんだろ！ るなるなは……俺の恩人なんだ。絶対、助け出して犯人に地獄見せてやるぜ」

『何でもみんなこう、物騒なこと言うかなあ……オレ、アヤちゃんにも声かけとくからさ、18時50分に三合レジャーランドに集合ってことで』

「ちょっと待て！ 留子が消えた後になるなるなも消えたんだ……偶然じゃねえだろ、これは。二人は最近一緒に暮らしてたんだからな」

『……じゃあ。トメちゃんをさらった奴がるーちゃんも？』

「だろうな。何が目的かはわからねーけど、もしかしたら……」『Ｔ』
「かもしれねーぞ？」

『……そういや、昨日オレさ。自店の搬入口で少女とやりあったんだけど』

「はあ！？ 自店の搬入口で少女とやった？ そうか、ついにお前も犯罪者の仲間入りか。わかった、110番しとくな。いつかこんな日が来ると思って、親父の知り合いの刑事に話はつけてあるから、すぐに警官がそっち行くから、逃げるなよ？」

電話を切りそうになった印藤だが、二時間ドラマのオープニングで、第一の被害者になった女性のような悲鳴が聞こえてきて、思わ

ず耳を塞いだ。

「るせーな！ ぶっ殺すぞ！」

怒鳴り散らした印藤は、二時間ドラマの犯人のように、電話の相手を脅した。

「どーした、加奈子？ 朝からえらく元気だなあ」

部屋のドアの向こうから、未だ寝ぼけ気味の兄の声が聞こえて来て、印藤は背筋を伸ばし、『最愛の妹』へと変貌する。

「ごめんね、おにーちゃん！ 電話でお友達の飼ってる犬がうるさかったの。加奈子がそんな大声出すわけじゃない」

「何だ、そうか。お兄ちゃんちょっと出かけるから、後ヨロシクな」

「はあい」

兄の気配が去っていったのを確認して5秒後。

「おい、もうちょっとでお兄ちゃんに俺の素がばれるところだったろうが」

『命ばかりはどうかお助けを……』

「はん！ まいいだろ、それで？」

『ああ、そう！ ヴァンパイアだったんだよ！ その幼女』

「ああ……幼女ババアな。んで、無事ってことはちゃんとトドメ差したんだな。相手の戦力を少しでも減らしておくにこしたことはないよな。やるじゃん、春川」

『あー……うん。もう、バッチリ！そこはホラ。泣く子も黙るヴァンパイアハンターのオレだよ。定休日だろうと、相手が幼女だろうとオレのステーキはうなるのさ……うん』

「なんか歯切れわりーな……まあいいや。19時か。わかった、俺もフル装備で向かう。もしかすると……相手はAランクかもしれないし」

『田中 聖一郎……？』

「ああ。きつと、今日。決着がつくぜ。俺達と『T』に」

『だなあ。オレも気合入れるか！るーちゃんを絶対助けるぜ！そんじゃインコちゃん、また後でね！』

「ああ」

通話を終えた印藤は、学習機の右端に置いてあった、ポケットウイスキーのボトルと、栄養ドリンクに目をやった。

「るなるな……。るなるなの為だったら俺も……覚悟決めるかな」

二つの瓶を手に取り、印藤は席を立つと、部屋の外へと消えて行った。

フルアーマーマルちゃん出撃、丸山田 誠一郎

13時00分。成田空港。ケネディー国際空港から一機の飛行機が着陸し、大勢の上客が日本に足を踏み入れた。そして、その中には招かれざる客の姿もあった。

「お父様……」

スーツ姿の吉村が、空港の入り口から出てきた一人の男の姿を捉え、恭しく頭を下げる。

男は無言のまま、トランクケースを吉村に差し出し、少し唇を吊り上げた。吉村の乗ってきた車の後部座席に座り、その巨体を落착させる。

「お父様。お会いできて私は幸せ者です。今日はとびきりのディナーを用意しております。大好物でしょうか？ 若く美しい女の血は……」

吉村はそつとバックミラーで最愛の父の様子を盗み見て、その表情に満足した。バックミラーには、薄いヒゲが生えた口元が映し出され、それが先ほど以上に奇怪なほど歪んで見える。

田中 聖一郎……『T』が来日したのだ。これで今宵の晚餐の準備は整った。後は……。

田中 聖一郎が来日して5時間後。春川は自室のベッドの上で、戦の準備をしていた。いつも通りの学生服に、いつも通りのスニーカー。これが、ヴァンパイアハンター春川 優人としての正装なの

である。

「優ちゃん。今日は優ちゃんの大好きなカレーよ？ あら、どこかお出かけ？」

「あ、六姉。オレ、ちょっと友達のとこ行って来るよ。今夜はちょっと遅くなるかも」

ドアの隙間から顔を出した六番目の姉……エプロン姿の春川 六^り花は残念そうに、おたまを持つ手を下にさげ、シュンと落ち込んだ。

「そっか。五姉は大学の飲み会だし。二姉は今日仕事で遅くなっちゃうんだよね。七美^{ななみ}と八月^{やつき}は遊びに行つて帰つてこないし。九理^{くりす}栖^とと十菜^{とこな}はトラえもんごっこしたまま、二ヶ月帰ってきてないから、今日は優ちゃんと二人だったのにい。私一人か……」

春川家は13人姉弟である。そして、12姉妹はそれぞれ1から12までの数字が名前に入っているのだ。長女^{かすみ} 一美はすでに結婚しており、家を出ているし、四女^{しおん} 四音は一人暮らしをしている。しかし、日曜の夕食は姉弟全員が顔を合わせ、食事をする決まりがあった。

「悪いな、六姉。今日はどうしても外せないんだ。大事な人がさらわれちまってるのさ。オレは命をかけてその人を……助けないといけない」

「優ちゃんすごいー！ まるでトラえもん第237話の『ノブタくん奪還作戦』血みどろのドラム缶』で見せたトラえもんの横顔そっくり！」

「フ……微妙な褒め言葉ありがとよ、六姉。そんじゃ、オレは行くぜ」

「いつてらっしや〜い」

六花の能天気な見送りの言葉を背に受け、春川は玄関の扉を後にする。トライデントをその肩に担いで、ふと、赤くなり始めた空を見上げた。

「るーちゃん。待つてろよ。絶対助けてやるからな！　そんで、その後は……」

見上げた空に浮かんだ雲が、瑠奈の持つ柔らかな果実に見えてきて、よだれを垂らしかけた。しかし、その雲が風にさらされ、どこかで見た事のある50代の男の顔に変形し、よだれは生唾へと変わる。

「マ、マルちゃん……せめて妄想中の時は邪魔しないでよ……」

春川の持つ豊かな想像力が、瑠奈の双丘から、誠一郎のワイシャツの下脂肪を連想してしまい、一気に興が削がれた。

「いや、待て、トントロと思え……オレ。う、豚肉か……そういや最近焼肉食ってねーな。今度半額シール店からパクって勝手に貼り付けちゃお」

明日の晩御飯は焼肉だと決めて、三合レジャーランドへと歩みを進める。そして、18時53分。目的地の前には、藤内、印藤がすでに待機していた。

「ありゃ、マルちゃんは？」

春川がそう問いかけたとき、ドスドスと地響きがしてこの物語の主人公が現れた。

「遅いんじゃないの、ってうわ！」

今さっき自分もとどり着いたことを棚に上げて、文句を口にした春川だったが、誠一郎のその姿を見て声を上げた。

「や、やあ。ちょっと遅くなったかな？　お店にちょっと寄って行っただよ」

「ちょ、デブ。何やってんの……」

印藤は目を丸くして、誠一郎の姿を上から下まで眺めた。加奈子さんのファッションチェックである。評するならば、『ありえない』だ。頭にはカレー用の鍋を被っており、胴体にはどこから持ってきたのか、野球の審判が使う防具を着用し、左手にはなべのフタ。右手には鯉のぼりの先端部分。そして両足には何故かスキー靴を履いている。さらに、半額シールと2割引シールをたすきのようにしてX字にクロスさせている。

これが、最終決戦に向かう主人公の姿であつた。

「マルちゃん、個性的な戦闘服ですね。病は気からといいますし、気持ちで負けてはいけません……… 思います。……… プッ」

藤内は笑いを堪えながらなんとかフォローをした。印藤はとりあえず写メを取ってあとでブログにアップしようと考えた。春川は体

に巻きついた半額シールを後でこっそり盗もうと思った。

一同はそれぞれの思いを胸に、決戦の地。三合レジャーランドへと足を踏み入れる。

三合レジャーランドは、つい先月閉園したばかりの遊園地だ。去年までは活気に満ちていて、若者のデートスポットとしてその場を提供していた。

かくいう春川も、何度か女の子と来ている。無論、印藤とも。

「これはこれは皆さん。……おそろいで」

入場門をくぐった先にあるベンチに、一人の男が腰掛けていた。

「ブチョー……どうしたんだ？ 連絡ぜんぜん付かないし、オレちよっと心配したんだぜ」

もちろん、春川が心配したのは渡辺の安否ではなく、『放課後うはうはパニック2』を無事に貸してくれるかどうか、である。

渡辺はベンチから立ち上がり、一歩前に出る。

「何故、僕がここにいるか？ よく考えて御覧なさい。田中さんと共に消えた僕。これまで連絡がつかなかった理由……さあ、答えはもう出たでしょう？」

「まさか……」

誠一郎はハツとして、一歩前に出て渡辺と目を合わせた。

「渡辺部長……あなたは……」

「そう、僕こそが！」

「瑠奈の彼氏だったのか！」

「スパイだったのです！」

誠一郎と渡辺の口が同時に動き、言葉がすれ違った。

「は？」

「よくも瑠奈を……よくも……嫁にいけない体にしたあげく、金を要求し、師匠さえもその毒牙に……このヘンタイめ！」

誠一郎はさらに一步前にでて、渡辺は肩を空かせて、呆れてみせる。

「そんなワケないでしょう？ 僕は紳士です。これも崇高な目的の為……彼女達にはその尊い犠牲に——」

と、言ったところで、スーツの内側のポケットからDVDのケースが落ちて、『放課後うはうはパニック2』のケース裏のいやらしい写真に、その場にいた一同の視線が集まる。

「ほう……渡辺部長は瑠奈や師匠にこんな事をさせようと？ 確かに崇高な目的だな。覚悟しろ、渡辺 義久！」

「……まあ、もう。どっちでもいいですよ。ここであなた達を少し

でも足止めしろと上から言われてるのですね。来なさい、丸山田くん。エリートと窓際社員の違いを見せてあげましょう」

そのセリフと同時に、一気に間合いを詰めた渡辺の華麗な上段蹴りが、誠一郎の頭の鍋を粉々に砕いた。

主婦VSヴァンパイアハンター、丸山田 誠一郎

「ちょっとブチヨー!?　いくら、フルアーマーマルちゃんがイマイチだからって、チャームポイントの鍋破壊することないんじゃないの!？」

頭部のパーツを失った誠一郎だったが、それでも怯むことなく渡辺と対峙し、背中の春川に思いを託した。

「春川くん……僕のことはいいんだ……それよりここは僕に任せて先に行って瑠奈とるーちゃんと師匠を助けてやってくれ……きつと今頃……恥ずかしい写真の撮影会が始まっているはずだ。なんとしても、それを阻止して……」

春川は思わず息を飲んだ。誠一郎の言う、恥ずかしい写真の撮影会が真実かどうかは解らないが、誠一郎がああ渡辺を一对一で引き受けるというのだ。渡辺の実力は春川も一目置いている。はっきり言って誠一郎が敵うはずもないのだが、それでも引き受けるという誠一郎の背中に漢を感じた。

「わかった。行くぜ、アヤちゃんインコちゃん。ここはマルちゃんに任せてオレ達は先に進もう。マルちゃん、待ってるぜ」

「うん」

誠一郎は春川に振り向かず、言葉だけで頷く。春川たちが先に進んだのを確認すると、鯉のぼりの先端を渡辺に向けて、一歩前に出る。

「君には30年来の……入社式から積もり積もった恨みがありますからねえ。今日はとことん残業してもらいますよ？　僕に蹴られまくるお仕事ですけどねえ！」

再び渡辺が迫る。俊足。誠一郎の目には、まるでテレポーテーションをしたかのように、一瞬で背後に回られて、振り向く。

「生意気なんですよ、君は！　あろう事か、社員食堂で僕が食べるはずだったスペシャルお子様ランチを、一人で20人分注文して、そのすぐ後ろにいた僕に回ってこなかった！」

槍の様な鋭い蹴りが、誠一郎の腹部……野球の防具を突き破り、クリティカルヒットする。誠一郎は声を上げることなく、後ろへ吹き飛ばされ手にしていた伝説の剣と盾を武装解除してしまい、ゴミ箱の上にお尻から突っ込んでしまう。

「入社5年目の事です。君と一緒に行ったお得意先の部長さんが、えらく君の事を気に入っておられてね。君の、ピーナッツを指で5個弾いて、それをすべて口の中に放り込む技を、僕が別の日に一人で訪問したとき、あろうことが、『渡辺くんもできるよね？』と強要されて、僕もやってみたら自分の鼻の穴に入り込んでしまったあげく、部長さんの鼻にも入ってしまったって大騒ぎですよ。救急車を呼んで一大事でした。その部長さんは何とか一命を取り留めましたが、僕の信用はガタ落ちです」

渡辺の積年の恨みが暴露されていく。

誠一郎は立ち上がろうとしたが、ゴミ箱にお尻がジャストフィットしてしまい、抜け出せないでいた。

「いいかつこうですねえ。丸山田くん。君にお似合いだ。君にはゴミ箱が良く似合う。なに、大丈夫。奥さんもお嬢さんも、僕が幸せにしてあげますよ。僕のずっとあこがれだった美雪……それが何故こんな奴に……許せない。君のような男に彼女は似合わない」

「渡辺部長……」

渡辺は落ちていた鯉のぼりの先端を誠一郎の額に突きつけた。

「丸山田くん。今日の残業はこれで終わりです。上がっていいですよ？　そしてお行きなさい。あの世へ」

誠一郎に鯉のぼりの先端が迫る。しかし――。

「う！？」

渡辺の右手にボールペンが飛んできて、鯉のぼりの先端が弾かれる。

「お久しぶりです、渡辺部長。主人がいつもお世話になっております」

「君は……」

夕闇に包まれた三合レジャーランドの入場門に、スーパーの買い物袋を左手に持ち、年季の入ったママチャリに盗難防止用のチェーンをかけて、その人物がやってきた。トップスは白いノースリーブ。ボトムスは黒のハーフパンツ。そして、健康サンダルを履いた本人曰くその服装は『遠征用装備』だ。

「あれは確か……もう、10年くらい前になりますね。酔った主人を家まで運んでいただいて……その節はご迷惑をお掛けしました」

「美雪……？」

誠一郎が呟くと同時。美雪が走った。美雪の未だ衰えていない、セクシーな足から繰り出される蹴りが、渡辺の側頭部を直撃する。渡辺は健康サンダルつま先を食らい、自販機に体を叩きつけられた。

「何故、君がここに……？」

よろめきながら立ち上がった渡辺に、美雪がさも当然の様に答える。

「知らないんですか？ 渡辺部長。今日はスーパーヤオイチで18時からお肉の半額処分セールがあるんです」

左手のスーパーの袋を肩の位置まで持ち上げて美雪は答える。その中身が夕日に照らされ、4つの黒毛和牛肩ロースステーキのパックらしきシルエットを外側からでも渡辺にも確認できた。

「そのスーパー……隣県でしょう？ 一体、どうやって……」

渡辺は、しばし啞然とし美雪の答えを待った。

「主婦に不可能はありません」

美雪は有名SNS。NIXIニクシーのママ友のコミュニティで、奇怪な生物を三合レジャーランド付近で見かけたというブログの記事と、

そこに映っていた重装備の夫の姿を確認し、直感的に夫の身に何かあったのでは？ と思い、隣のスーパーからママチャリにまたがり、時速80キロで駆けてきたのである。

ちなみに、この日。都市伝説を語る某掲示板のスレで『怪人ママチャリ女』、もしくは『ビューティフルサイクロン』が話題になっており、それが大型二輪に乗って爆走していた若者8人をゴボウ抜きにして、震え上がった若者らは頭を丸めて、寺に入って無事更生されたという記事が載っており、一躍有名になったのだが、美雪はそれを知らない。

「あなた、大丈夫？」

美雪は誠一郎をゴミ箱から救出すると、どこにもケガが無い事を確認して、ほっと一息ついた。

「美雪……ありがとう。僕の体の事を心配してくれて……」

「当然じゃない！ だって……あなたの身に何かあったら……」

「美雪……」

「家のローンが払えなくなるし、明日、通販で買った美容器具の代金だって危うくなるし、車のローンも、瑠奈の授業料も……」

美雪は家計簿にあった出費のデータを全て並べ立て、働き手がいなくなった後の丸山田家の悲惨さを20分かけ、図解して説明した。

「それよりたいへんなんだ、美雪！ 瑠奈が……あの男にさらわれたんだ！ 渡辺部長が……犯人なんだ！」

「……何ですって？」

美雪は渡辺に振り向き、闘気をたぎらせた。

「フフ。美雪さん。バレてしまつては仕方ない。どうです？ そんな男はさつさと捨てて、僕と一緒にありませんか？ 僕ならば……ローンも全て肩代わりしてあげるし、お望みの美容器具だつてなんでも、買つて上げましょう。瑠奈さんの為に、一流の家庭教師をつけるのもいいし、この際だ。新型のハイブリットカーの試乗にでも行きませんか？ そのままキャッシュで買つて、家まで乗つて帰るのもいい」

「私は金を見せびらかしたり、金で何でも買えると思つてゐる男が嫌いなんです。この人は……馬鹿だし、甲斐性もないし、人300倍食べるし、トイレは長いし、いい所がありません」

「み、美雪……」

誠一郎はがつくりとうなだれた。

「でも」

美雪は胸を張つて、笑つて続ける。

「幸せなんです。この人と一緒なら」

「美雪……」

誠一郎は感動のあまり、顔から分泌できる液体をすべて垂れ流し

た。

「やれやれ。どうやら僕の見込み違いだったようだ……いいでしょう。ならば、夫婦仲良く水入らずであの世へお行きなさい」

渡辺が走った。美雪は動かず、神経を集中させる。

「生意気な女は嫌いなんですよ、僕は！」

放物線を描くように跳躍し、下半身をくねらせ、回転を加えた渡辺の華麗な蹴りが、美雪に迫る。しかし、美雪は動かない。

美雪は渡辺の足が迫るコンマ何秒かの前に、渡辺の足の動きを見切った上で、右手で足首をつかみ、相手の力を殺さず、さらにそのまま自分の力を上乗せして、地面に叩きつけた。

「遅い。遅いわ。渡辺部長。これがミナミやったら、食いだおれ人形でドついて、道頓堀に放り投げたる所やわ」

美雪は、戦闘時に興奮すると大阪弁に戻ってしまうらしい。

「ぐ！？ なぜ……生身の人間が……ヴァンパイアハンターになって身体能力が強化されているこの僕の……体術を……」

立ち上がった渡辺に、今度は美雪から仕掛けた。蹴りと蹴り。気合と気合。互いの技がぶつかり合い、まるで少年漫画のワンシーンのような光景が誠一郎の目の前で繰り広げられた。

「遅い！」

ついには美雪の上段蹴りが渡辺の首にヒットし、さらに下段蹴りが運悪く、股間に直撃して、渡辺は動きを止めた。そして、サマーソルトキックでトドメを差した。『美雪乱舞』だか、『鳳凰脚』である。

「立ちいや。ミナミやったらこっからが本番なんやで？」

しかし、渡辺は立ち上がることなく、地面に倒れてそのまま動かなくなった。１７年経った今でも、大阪で語り継がれている伝説の女格闘家『ミナミの龍』は健在であった。

ミドルネームはエリーゼ、丸山田 誠一郎

春川と印藤、藤内の3人は、入り口から少し進んだ場所にある、お化け屋敷の前で立ち止まっていた。この三合レジャーランドに人が出入りできる建物は多い。目の前のお化け屋敷もそうだが、プラネタリウム。レストラン。トイレ。プールもある。どこから手をつけるべきか迷ったが、とりあえず目の前の建物から調査することになった。

三合レジャーランドのお化け屋敷は有名だった。一年前、印藤とデートでここを訪れたときの記憶が、春川の頭の中で鮮やかに蘇る。当時の売りであった、リアル感満載の特殊メイクを施したスタッフがあちこちに配備され、凝った演出とともに登場する恐怖感が若いカップルにウけた。

春川からも期待して乗り込んでみたが、それからがタイヘンだった。なにせ、お化け役のアルバイトが印藤と目があつた瞬間、それまで怠慢だった職務の分を取り戻すかのように、金切り声を上げ、生ける屍を髣髴^{ほうふつ}とさせる特殊メイクの顔で『お化け！』と叫んで気絶してしまった。

仕方が無く、倒れたバイトの代わりにノーメイクの印藤がそのポジションに立って代役した所、一躍限りなく本物に近いお化け屋敷として有名になり、その日の入場者数は、過去最高となった。

当の印藤にとっては失礼極まりない話だが……ちなみに、臨時アルバイトということで、バイト代が出たのだが、春川は印藤に黙って、ポケットにつつこんだままであった。後日、別の女の子と一緒にここに来て、全額使ってしまったことがばれれば、春川は特殊メ

イクなしの生ける屍になるかもしれない。

「おい、どうしたよ？」

「ギャア！？ お化け！！」

急に目の前に飛び出してきた印藤の目を見て、あの時の記憶が蘇り、思わず春川は叫んだ。

「お前……昨日からマジでムカつくな。俺は15歳だぞ？ JKだぞ？ どの世界にそんな反応しか返さない奴がいるんだよ、アア！？」

『今時のJKは殺人的な瞳で、人の首絞めて、足元のコンクリに穴空けたりしないよ』、と春川の目が語っていた。

「あ、ああああ！？ 後ろ、マジで出た！！」

春川は印藤の後ろのお化け屋敷の入り口を指差し、喚き散らした。

「てめえ……マジで殺すぞ……」

「ウフフフフフ。ここで網を張っていれば、必ず来ると思っていたわ。ヴァンパイアハンター共！」

背中から声がして、印藤は振り向いた。お化け屋敷の中から一人の少女が出てきたようだ。

「あん？ ……ババア少女……？」

エリーであつた。先日春川と搬入口でやりあつた時の様に、顔半分が包帯のままであり、右足を引きずりながら闇から這い出てくる。

「昨日はそのボウヤにお世話になつたわ。けれど、もう引き下がれないのよ。お父様が……お前達を始末しろと仰られた。この命はお父様の物。お父様の為なら私は死ねる」

印藤は春川に振り返り、過去最高の加奈子ちゃんビームをつぶらな瞳から発射した。

「おい」

「は、はひ!？」

「始末したんじゃないのか？」

春川は顔面蒼白となり、小刻みに震えだした。そして、見苦しい言い訳を始める。

「い、いやあゝ何かの手違いかも。あ、もしかして双子なんじゃないの!？ 世の中ってフシギ」

「そうね。世の中解らない事だらけだよな。加奈子、困っちゃう」

急に可愛らしい声と、愛くるしい表情で、印藤は春川に抱きついた。

「おほつ！ インコちゃん。やっぱオレに未練アリ？ あら、インコちゃんちょっと成長したんじゃないの？ もしかして、AからBになった？」

春川は突如豹変した加奈子ちゃんの熱い抱擁にうっとりしていた。しかし、その時間は長く続くわけが無く……。

「なんていうワケあるとでも思ったか？ このクソボケハナクソヘンタイ王子が！」

印藤は春川の腰にまわしていた腕にぐつと力を込め、そのまま上半身をそり返し、春川の頭をコンクリートで舗装された地面にめり込ませた。プロレス技でいう、ジャーマンスープレックスである。

「彩華。その馬鹿と先行つて。この少女はオレが責任持つて処分しとくから」

「は、はい。……春川くん、行きましょう。生きるんです。逝つてはダメです」

藤内は、春川を地面から大根のように引き抜くと、肩にかついで奥へと消えて行った。

「あら？ いいの？ 彼のあの武器がなければ私には勝てないわよ？ この前でもそうだったじゃない。ちょこまか動くだけのヘボ女のクセに。せつかくの切り札を切らずに捨ててしまうなんて……バカな子」

エリーはせせら笑い、印藤の怒りを煽^{あお}ろうとする。

「は。あんなバカの力借りるくらいなら、ここで死んだ方がマシつてもんだ。それに」

印藤は懷からポケットウイスキーのボトルを取り出し続ける。

「俺には奥の手もある」

「何よ、今度は別のクスリ？ 芸が無いわね。お姉さんが遊んであげるわ、かわいいお人形さん。……フフ。すぐに中に詰まった綿引き抜いて、雑巾にして、床に落ちた臭い牛乳を拭いて、生乾きにして放置してやるわ」

「言ってる、幼女」

印藤はポケットウイスキーのフタを空け、一気に飲み干した。周囲には甘ったるい匂いが立ち込め、印藤は唇から垂れていた一筋の雫を袖で拭くと、エリーにゆっくりと近づいた。Zealotである。

エリーはゆっくりと迫る印藤に向け、灰色に変色した巨大な右手を、ハンマーのように真上から叩きつけた。印藤はそれを左手で受け止める。

「今度はパワータイプってわけ？ フォームチェンジもできるのね。最近のお人形さんはすごいわ、アクションフィギュアの真似事までできるなんて、さすがMADE IN JAPAN！」

エリーは左手を同じく印藤に向けて叩きつける。印藤もそれに応え、右手を差し出し受け止める。二人の間に力の拮抗が生じ、それが周囲に伝播して地面にヒビが入る。

「残念、ほんと俺。MADAINUSAなんだよ。ちなみにミドルネームはエリーゼな。カナコ・エリーゼ・インドウ。エリー

って呼んでいいぜ？ お前に呼ばれたら吐き気がするけど」

力と力の押し合い。単純な我慢比べ。根性の見せ合い。そこに一切の駆け引きはなかった。やがてエリーはしびれを切らし、一步引く。

「とんだ産地偽装だわね。このクソ人形は……いいわ。今は一対一。気兼ねなく、私も本気を出せる……」

「はいはい。三段変身？ 変形合体？ それともあれか？ メダルでコンボチェンジか？」

エリーは膝を地面に付き、自らの体を抱きしめ、変貌を始める。ワンピースの背中が二箇所、背中から生え出た角のような物に裂かれ、それがドラゴンの様な翼に変わると、紫色の尻尾も生えた。

「どうかしら？ 今日の朝8時にテレビを付けたら、ちょうどこんな感じの奴が出ていたのよ、かつこいいでしょう？」

「パンチ力何トンいくんだよ？ それ……」

印藤のボヤキが終わる前に、エリーはドラゴンのような翼をはためかせ、風を切って飛んだ。巨大な両の手から爪を生やしてスピードとパワーで印藤を切り裂く。

印藤は身を引いてかわし、エリーをやりすごしたかたに思えたが、尻尾が印藤の首に巻きつき、空にさらわれる。エリーは観覧車の頂上まで飛行し、そこから印藤を地面へと突き落とした。

「さよなら、俺っ娘ツインテール。中々萌えだったわよ。体ごとペ

たんこになれば、もう胸の事気にしなくてすむわよね？　ありがとう
く思いなさい」

印藤は地面に落下し、土煙にまみれ、その姿を確認する事が出来
なくなつた。エリーは地面に着地すると死体を確認する為、爆心地
となつた墜落地点に向かう。

「お前の洗濯板に言われたら、さすがに俺の堪忍袋の緒もブチ切れ
だぜ」

土煙から姿を現した印藤は所々服が破けているものの、無傷であ
つた。

「しぶとい奴ね、お前。今度こそ、ぶつ殺してやるわ」

「そりゃ、こつちのセリフだってーの。おい、ババア。知ってるか
？　ゲームにゃよ。一時間に一回くらいしか使えないチートなスキ
ルがあんだよ。大抵そういうのは重ねがけできねー仕様になつてゐる」

印藤は懷から栄養ドリンクを取り出して、続ける。

「俺は分の悪い賭けは大嫌いだ。絶対に勝てる戦いじゃない。け
ど……親友の為なら……るなるなの為なら賭けてもいい。俺の命を
チップにして、全額でな」

栄養ドリンクのフタを開けて一気に喉に流し込んだ。

「るなるながいなかったら今の俺はいない。俺の大事な人を助ける、
その為なら……俺は自分に課したルールも破る」

FrenzyとZealotの同時服用。印藤は自ら『加奈子ちゃんルール』を破った。その先に待つであろう結果を省みず。

そしてこれは初めてのことだった。初めて他人のために命をかけた。たった一人、いじめられていた自分を助けて、初めて友達になつてくれた瑠奈を助けるために。

印藤は笑った。そして嘲笑った。さっきまでの自分がウソのようだ。はつきり言って、負ける気がしない。すべてがスローモーション。すべてが塵よりも軽く、もろい。

それは目の前の敵とて同じ。印藤が一步進む。それだけで、エリーの驚愕した顔が眼前に迫る。エリーの右手がピクリと動いた瞬間。印藤は頭突きをエリーの頭部にそれよりも数1000倍早く叩き込んだ。

エリーはお化け屋敷に突っ込み、その拍子に建物は倒壊し、エリーはその中に埋もれた。

これで終わりかと思つた瞬間、瓦礫の中から空へ飛翔して、エリーが空中から迫った。エリーが何かを喋っている。しかし、遅すぎて逆に聞き取れない。すでに印藤はエリーと同じ時間の流れの中を生きてはいない。

印藤はなおも笑う。そして、音速を超えて走り回り、エリーをかく乱する。

空中にいたエリーは一瞬動きを止め、倒すべき相手がどこにいるのか解らなくなる。すさまじい勢いを持った運動エネルギーのベクトルその物となった印藤の姿を、視ることなどできはしない。

エリーの目の前を何かが横切ったと思ったら、背後で何かが爆発したかの様な衝撃に襲われ、また即座に別方向からの衝撃。さらに、衝撃。そして、衝撃。衝撃。

「フルボッコじゃすまさねえ……ここでカタをつけてやる……エリー……」

凄まじい勢いでエリーは空を切り裂き、風そのものとなって、三合レジャーランドの空中をポップコーンの様に舞った。一方的、いや。圧倒的であり、無慈悲な猛打……。

そして、トドメの一撃がエリーの腹部に炸裂する。印藤が全体重を乗せ、空中からエリーの腹目掛けて、飛び降りたのだった。

静寂。そして、時が流れ始めると同時。エリーは動かなくなり、勝敗は決した。

「俺は、幼女だろうと定休日だろうと容赦はしねえ。お前とも……ここまでだ」

印藤は聖水のペットボトルを取り出し、エリーに歩み寄った。

メリーゴーランドは回る、丸山田 誠一郎

メリーゴーランド。誰もが一度は幼い頃に一度は乗ったことがあるだろう。上下に揺れる白い木馬、騎乗の間は夢の世界に旅立つことができる。

しかし、夜のメリーゴーランドは不気味そのものだった。誰も乗っていないのに、動き出した木馬達。薄暗い照明の中で踊るそれは、まるでこの世と隔絶された別世界のようだった。

「懐かしいですね。もし、あの子が大きくなったら……三人で遊園地に行つて、メリーゴーランドに乗りたい……私達の……夢でしたよね、光彦さん？」

メリーゴーランドの前に二つの人影があつた。スーパーフジタニの制服を着用し、左肩に春川を担ぎ、右手に刀を持った若い女性……藤内。がっちりとした体型がスーツの上からはつきりと解る若い男……吉村。

「龍太が生きていれば、今年で33……もしかしたら、私達はおじいちゃん、おばあちゃんになつていたかもしれません……時間の流れとは無情ですね。そう思いませんか、彩華？」

吉村の問い掛けに藤内は表情を変えずに、春川を地面に優しく横たわらせ、刀を抜いた。

「昔の事なんですネ、もう……。もし、たった一人の……かわいい息子が……今の私達を見たら……どう思うか……」

「『もし』とか『たら』とか、そんな仮定の話をしてもしようがないでしょう。私達の息子は死んだ。車にはねられて。あれは運命だった。そう思うしかない。そして私はヴァンパイア。君はヴァンパイアハンター。この事実も変わりがない。これから始まる事も……」

吉村は上着を脱ぎ、戦闘形態へと姿を変える。黒く変貌した皮膚と鋭く伸びた爪。赤く光る瞳と、鋭い牙が、メリーゴーランドを背景に藤内の前に立ちはだかる。

「最初で最後の夫婦喧嘩……いや。もう赤の他人でしたね、私達は……行きますよ……彩華」

藤内は、胸ポケットに入れておいた紙切れを吉村の鼻先に突き出す。それは緑色の文字で印字された、一枚の記入用紙だった。

「離婚届です。戸籍上では私達、まだ夫婦なんですよ？」

氏名の欄には吉村 光彦と吉村 彩華の名前があった。しかし、生年月日の欄は空白だった。吉村はすぐにそれに気付いたが、その話題に触れると、攻撃の手がより激しくなる事が予想されたので、沈黙を貫いた。

「離婚届は、お互いが合意しないと役所が受理してくれません。今日はもらいます、あなたの首と印鑑……」

「律儀な女だ……だが、そこがいい。彩華。きっと龍太も一人で寂しいでしょう……あの子の所へ行ってやってください」

メリーゴーランドは回る。ひたすら回る。しかし、回っても回っても前の木馬に追いつくことはない。それは30年間互いを追い求

めた二人と同じであった。しかし、今夜ようやく30年来のけじめが付けられる。

斬撃。刺突。薙ぎ払い。藤内の刀が吉村の爪と切り結ぶ。絶え間無き斬り合い。二人の間には無数の火花が散る。夜の闇はその度、カメラでフラッシュを焚いた様に一瞬発光し、再び闇で黒く塗りつぶされる。

30年前……二人の間には3歳になったばかりの息子がいた。名前は龍太。顔立ちは母親に似てとても可愛らしく、性格は父親に似てやんちゃな子だった。しかしある時、不幸が起きた。

少し目を離れた間に……二人の目の前で……。

吉村は自分を呪った。もっとこの手が早く伸びていたなら、もっとこの足が速く走れたなら……もっと、もっと……。

そんな折、出くわしてしまった絶対たる強大なヴァンパイアの力。吉村はそこに救いを求めた。無力な自分を呪う自分。そこからただ抜け出したい、逃げ出したい一心ですがりついた。

いつしか力に溺れ、吉村は人ではなかった。忠実な「丁」の僕……。人を捨てることで、人であった時の過ちも捨てる。吉村はそうすることで、罪の意識から逃れたかったのだ。

藤内は全てを受け入れた。息子の死も、ヴァンパイアハンターも、現実も。受け入れて前へ進んだ。過去は変えられない。あるのは重くのしかかる現実と、この手に残る斬撃の感触のみ。

もっと早くに気付いていたなら、いや。あの日外出さえしていなけ

れば……後悔先に立たず。

だから前へ進む。吉村がああなってしまったのも、すべては自分のせい。

だから自分の手でケリを付ける。他の誰にも迷惑はかけない。夫婦喧嘩は犬にも、ヴァンパイアにも、誰にも食わせない。すべては自分の手で、今日この場でケリを付ける。

剣戟。双爪と刀。鋭く研ぎ澄まされた刃は夜空ごと斬るかのよう
に、真一文字に空中から一直線に振り下ろされる。

火花。爪と刃がこすれ合うとき、そこを中心として衝撃と火花と
爆音が周囲へと伝わる。

後退。互いに間合いを測り直し、相手の出方を窺う。これは、相
手のクセを互いに知っているから迂闊^{うかつ}に動けないという理由もあっ
た。

「虫を一匹殺すのに、家中大騒ぎした君がここまで遠慮なく刃を振
るうとは……やはり時間は無情だ。30年はそれだけ君を変えてし
まったか……」

「あなたは変わっていませんね。30年前からずっと……あの瞬間
からずっとあなたは変わっていない。ウソを付くときは、必ず歯を
かみ締めるクセも、変わっていません。効きませんよ？ あなたの
フエイント」

「やれやれ……君はいつもそうだ。勘が鋭い上に、他人の細かい事
によく気が付く。だからこそ——自分の事に関しては鈍い。君の動

き……パターンは読みました。次で終わりです」

互いに引かない。そして、隙を探り合う。一瞬の油断。集中力が切れた時——それが終わりの時。

藤内の額を汗が流れる。それが髪を伝い……まぶたに落ちる。それが始まりだった。

吉村は繰り出す。渾身の一撃を。

だが、藤内はかわさない。フェイントである事を見抜いているからだ。

だから、直撃した。

吉村の爪は、藤内の刀の横っ腹を捕らえ、刀身を柄とキレイに半分にした。吉村はあえて自分のクセを利用したのだ。フェイントのフェイント。さらに藤内の動きは分析済みなので、フェイントを入れた次の攻撃でカウンターを繰り出すことも予想済だ。それが藤内の武器を破壊し、勝機を奪うという結果に至った。

「終わりですね……彩華」

刃は折れて、地面に突き刺さっている。そして、申し訳程度に柄にくっついている刃程度では、武器になりそうにない。

吉村が迫る。爪が——スーパーフジタニのピンク色の制服の上着を切り裂く。

「メリーゴーランドにヴァンパイア。これほどミスマッチかつ、見

栄えの悪いワンショットはねえな」

「春川くん……」

春川がトライデントで吉村の爪を受け止め、藤内は無事だった。

「ヨッシー、邪魔すんぜ。夫婦喧嘩はイケメンも食わねーが、アヤちゃんは人類の宝だ。ヴァンパイアハンター兼トレジャーハンターなオレが相手だ！」

「貴様……エリーと戦って生きていたか。邪魔な奴め」

吉村はトライデントに遮られていた爪に力を込め、春川を押し始める。

「春川くん……私はいいから、田中さんと瑠奈ちゃんを助けに行つてあげてください。私はなんとかありますから」

「はあ！？ アヤちゃんの武器はもうないじゃんよ！」

「それなら大丈夫。私には、もう一本ありますから。……それに、最近出番がなかったんです。少しくらい活躍させてください」

春川をみつめる藤内の眼に確かな決意の光が宿っていた。春川はその決意に負け、吉村の爪を受け止めていた手を放し、横にそれる。

「行くぜ、オレ。後でな、アヤちゃん」

「行つてらっしゃい、春川くん」

藤内は闇の奥に消えて行った春川の背中を見送り、吉村に向き直る。

「あの子は元気がいっぱい、ちょっとおバカな所もあるけど……優しくて可愛い子なんです。……龍太みたいに。私にとっては、息子みたいなものですね」

藤内は営業スマイルではなく、心から笑った。そして、突き刺さっていた刃に足を向け、上着を脱ぎ、手に巻きつけると刃を握る。さらに、上着をそこに巻きつけ固定する。

「ヴァンパイアハンターの検定制度は5級から1級までです」

「知っていますよ。そんな事は。私だって君達のことをずっと研究してきた」

「1級までというのは、一般的な話です。1級所持者が会得する技……高速で相手に迫り、下段から斬り上げる『紫電』。それよりも高速の横一文字の一薙ぎ……『神威』^{かむい}。それを会得したヴァンパイアハンターは尊敬と畏怖の念を込めて、特1級と呼ばれるそうです」

「中学生くらいの子供が好きな設定ですね。で？ 君はそれが使えると？ フハハハ。まともな剣ですらないボンクラで、どうするつもりです」

一閃。銀の光が煌いたのは一瞬。乾いた笑い声を上げたまま吉村は、高速の横一文字の一薙ぎを受けて崩れる。

「ちなみにウソです。そんな技なんてありませんし、検定制度は1級までです。あなたは笑うと目を閉じるクセがあるから……本当に

変わってませんね、光彦さん……」

メリーゴーランドは回る。やがて夢の時間は終わりを告げ、電源が落ちる。光を失った白馬の目には、一つの終焉が映し出された。

お腹が空いたら我慢するな、食べる、丸山田 誠一郎

暗闇の中で瑠奈は目を覚ました。何故か体は動かない。頭の中で一生懸命に記憶の糸を手繰り寄せ、考えた。ここはどこか？ 何故、ここににいるのか？

しかし、お腹が空いて考える所ではなかった。可愛い音がして、瑠奈は頬を赤らめる。

「このお腹の空き具合からして……最後に食事を摂ったのが、午後6時のデスバーガーゴートウーヘルセットだったから……あれ。うそ、25時間も経ってるじゃん！」

瑠奈は腹時計で現在の時刻を知り、驚いた。これも、父親から受け継いだ使えないスキルの一つである。

「んー……あれ？ ここって……どこかのレストラン？」

暗闇に眼が慣れてきて、周囲に目をやると、ここはレストランの様だった。自分はレストランのフロアを中心に、何故か設置されたベッドの上で、鎖により拘束されているらしい。瑠奈はなんとなく右を見て、さらに驚いた。

「ららちゃん！？ どうしてここにいるの？」

すぐ隣にベッドがあって、そこには自分と同じ様に鎖で体を繋がれた、ららちゃんこと、留子がいた。

「瑠奈おねーちゃん？」

「待つてて！　すぐに助けてあげるからね！」

「無駄だよ。この鎖、相当頑丈だから……昨日からずっと試してるけど、どうにもならない——」

留子がそついい終わる前に、破壊的な音がして、じゃらじゃらと鎖が碎ける音が室内にこだました。

「は？」

留子は目が点になった。あろうことか、瑠奈はたった一撃鎖に力を込めただけで引きちぎってしまったのだ。昨日、吉村達が去って行った後、暴れまわったり、かじったりして脱出を試みたのに……留子は丸山田家の特異さを、改めて思い知った。

「こんなの大したことないよ。いちご先輩の膝十字固めに比べたら、綿アメみたいなものだし！　ららちゃんも今助けてあげるね」

瑠奈が嬉々として飛び上がり、留子のベッドの鎖に手をかけた時だった。

レストランの従業員用の扉……そこから目が空るな数人の男達が出来てきた。ヴァンパイアである。おそらく見張りの兵隊だろう。

「瑠奈お姉ちゃん！　逃げて、こいつらは——」

「解ってる、チカンでしょ？　任せて、ららちゃんは私が守ってあげるから！」

瑠奈はにつこりと微笑み、襲い掛かってきたヴァンパイアに、母直伝のカカト落としをお見舞いした。ヴァンパイアは脳天にそれをくらい、衝撃で床を割り、床下に体をめり込ませ動かなくなった。

その様子を満足しているヒマもなく、二体目のヴァンパイアが瑠奈の肩を両手でつかんで、瑠奈は苛立ちを隠さずに声を上げる。

「東京都迷惑防止条例！ あんたみたいな犯罪者^{チカン}はあたしが制裁してやるわ！」

瑠奈は両手をバンザイをするかの様に上げて、ヴァンパイアの手を振りほどき、そこから両肘を引いて背後のヴァンパイアに直撃させる。そして、振り向き様に軽く跳躍して回し蹴りを放つ。ヴァンパイアはテーブルの上を飛び、窓を突き破って派手なスタントを披露した。

「ママが言ってた。チカンは蹴り殺せって！」

瑠奈の目には恐怖はない。いつものチカン狩りと一緒なのだ。

男の一人が拳を振りかざし、瑠奈に向けて突進してくる。それをあつさりと受け止め、足払いをして転倒させる。無防備に腹をさらけ出した所に拳で一激。沈黙。

留子は呆気にとられた。実力だけなら、体術検定2級クラスはある。丸山田家はあらゆる意味で想定外で規格外だった。

「オヤジが言ってた。お腹が空いたら我慢するな、食べる。それを邪魔する奴はミンチにして、ハンバーグにして、デミグラスソースで煮込んで、フライドポテトを添えて——以下略！」

瑠奈が闇を舞う。空中で電光石火の如く3発の蹴りを繰り出し、ヴァンパイアの顔面にそれが炸裂する。ヴァンパイアはそれをまともに食らって、レジスターに背中から倒れこむ。すると、チン！と音がして、レジスターの中からコインケースやらお釣りが出てきた。

殲滅。時間にしてわずか数十秒。お見事としか言いようが無い。留子はヴァンパイアハンターにスカウトしたくなった。

「よいしょっと。はい、ららちゃん。どこか痛くない？ ケガとか、大丈夫？」

「う、うん。すごいね……瑠奈おねーちゃん」

留子は瑠奈によって鎖を引きちぎられ、自由となった。瑠奈は留子の手を引いてレストランの入り口へと向かう。

「早く逃げなきゃ……携帯も家に置いてきちゃったし……どこだろう……」

瑠奈は呟きつつも、留子の手を引き駆け足で出口を目指す。ドアノブを握ろうとしたとき、唐突に開いて、そこから瑠奈も良く知る人間が室内に入り込んできた。

50代の男。地味な黒いフレームの眼鏡。でっぷりと太った体。口元のだらしない不精ヒゲ……。そして、真紅の瞳。

「……オヤジ？　もしかして、助けに来てくれたの！？」

瑠奈が前に飛び出そうとしたとき、留子は呟いた。それは、留子の実の父親であった。

「お父様……」

その一言に瑠奈は驚き、振り返る。

「え？ ……ららちゃんの……パパ？ それって、もしかして……」

瑠奈は驚愕の真実をそこで知った。

「ららちゃん……オヤジの隠し子で……あたしの妹だったの!？」

瑠奈の思考が暴走しだす。留子はそれを抑えようとしたが、父……

…田中 聖一郎の手が留子に伸びる。

留子はそれを振り払い、顔面に蹴りを放ち、レストランの外へと追いやった。

「ちょ、ちよつとららちゃん!? いくら腹が立つからって、そこまでやつちゃダメだよ! お小遣いもらえなくなっちゃうよ!」

瑠奈は留子を制止しようとするが、留子は面倒になったので、瑠奈の首筋に手刀を入れ気絶させた。

「悪いな、瑠奈。少しそこで眠っていてくれ……」

留子は気を失った瑠奈をレストランの入りに座らせ、父に向き直る。

「お父様……ついに、来たのですか……」

聖一郎はむくりと立ち上がり、紅い目を瞬きして、にっこりと笑う。殺意や敵意といったモノはなく、優しい空気を纏っていて、穏やかに、ゆっくりと留子に向かって両手を広げ歩いてくる。

「留子」お父さんだよ。今日は何をして遊ぶのかあ？ 留子のためにアメリカから飛んできたんだ。お土産も、ホラ。かわいいお人形さんだろう？ 留子のほしい物なら、何でもあげよう。欲しい物を言ってごらん？ 何でもお前の思い通りだよ」

留子も歩き出す。聖一郎に向かって、そしてレストランの壁を蹴り、空中から強襲する。

「欲しい物は……お前の命だ！」

聖一郎はがっくりとうなだれる。

「お父さん悲しいなあ。そんな親不孝な娘に育てた覚えはないんだけどなあ。そうだ。お仕置きしちやおう。留子はいけない子だから、お仕置きだ、うんうん。それがいい。じゃあまずは腕をサヨナラしちやおう。足ももうちょっと短く、コンパクトに。それからそんな汚い言葉を使うお口にチャックだ。お父さん、裁縫も覚えたんだよ」

「うるさい！」

留子の靴底が聖一郎の腹を直撃するが、脂肪に阻まれ威力は大きく減衰する。足が聖一郎の腹にめりこんでしまい、抜け出せなくなる。

「捕まえた」

聖一郎の目に邪気はない。しかし、言葉とは裏腹に、留子の右足をつかむその手は殺人的な握力であった。留子の額に脂汗が浮かぶ。このままでは、折れてしまいそうだった。

「は、離せ！」

留子は体をひねり、左足で聖一郎の鼻を蹴り上げた。

「痛い！ 何をするんだ、お鼻をすりむいちゃったよ、もう。相変わらずやんちゃな子だなあ。留子は」

しかし、留子の右足は依然聖一郎につかまれたままで、逃げ出す事はかなわなかった。

「うふふふふ。久しぶりに留子と遊べて楽しいよ。さあ、もっとお父さんと遊ぼう、ね？」

「オレが遊んでやるぜ、このヘンタイ野郎！」

言葉と同時。聖一郎の腹に3つの穴が空いた。そして、爆音。衝撃で留子は吹き飛ばされ、レストランの壁に叩きつけられる。

「あれ？ 僕のお腹に穴が空いてる」

聖一郎は首を傾げ、後ろを振り返る。そこには、トライデントを構えた春川がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8093t/>

50代から始める基礎戦闘術

2011年11月6日13時20分発行